沖縄市文化財調査報告書第 36 集

上地のバーキづくり

—與志平朝蒲氏製作バーキ調査報告書—

2008 年 12 月

沖縄市教育委員会

沖縄市文化財調査報告書第36集

上地のバーキづくり

—與志平朝蒲氏製作バーキ調査報告書—

2008年12月

沖縄市教育委員会

はじめに

本報告書は、平成15年度に沖縄市立郷土博物館へ寄贈された與志平朝蒲氏製作のバーキを調査したものです。

本市上地は、かつてバーキづくりが盛んだった地域です。與志平氏は、その上地において、長年バーキづくりに携わってこられました。

その技術はたいへん素晴らしく、上地におけるバーキづくりの伝統が、製作されたバーキに表現されております。

本報告書が、地域や学校、各家庭において広く活用され、本市の文化財について考える一助となることを願ってやみません。

末尾になりましたが、調査にご協力いただいた多くの方々に対し、感謝を申し上げます。

2008（平成20）年12月19日

沖縄市教育委員会
教育長　眞榮城玄昌

凡　例

1．本報告書は、平成15年度に沖縄市立郷土博物館へ寄贈された與志平朝蒲（よしひらちょうほう）氏のバーキ28点の調査報告書である。

2．調査は平成12年度に基礎調査を、17年度に本調査を行った。

3．調査は、下記のメンバーで行った。

調　　査：木下義宣（沖縄市文化財調査審議会委員）
調 査 補 助：宮城昭美（沖縄市立郷土博物館）
宮城利旭、辺土名初美、當真香、金城直子（前郷土博物館）
比嘉賀盛（市文化財調査審議会委員）
報告書作成：比嘉清和（郷土博物館）
協　　力：池原直樹、崎原恒新（市文化財調査審議会）

4．バーキの名称については、與志平氏への聞き取りによる。

5．與志平氏製作バーキ資料には、バーキ以外のものも含まれているが、竹細工製品の総称としてバーキと呼ぶこととする。

6．與志平氏製作バーキ資料において、蓋付きかご、手提げかご、茶碗かご、果物かご、つりかご、チリカゴ、ウミディールについては、與志平氏が本土の講師に習ったもので、上地では製作されていないものであるが、與志平氏の高い技術を表すものとして掲載した。また、かご（六つ目編み指導用のサンプル）は、與志平氏が講師として六つ目編みを指導する際に用いたものである。

目　次

はじめに

凡　例

第１章　上地におけるバーキづくり　1

沖縄県の主な有用竹・笹　3
上地アラバーキ　6
バーキとの出会い　7
上地副業組合の設立　8
職人の技　8
技術の伝承へむけての取り組み　9

第２章　與志平朝蒲氏製作バーキ資料　11

アラバーキ 12／アラバーキ 14／ミンバーキ 16／ンムジョーキ 18／
ユナバーキ 20／ユナバーキ 22／フタバーキ（身部）24／フタバーキ（蓋部）26／
ミージョーキ 28／ミージョーキ 30／ミージョーキ 32／ミージョーキ 34／
ユイの仲間 36／ユイ 38／サギジョーキ 40／蓋付きかご 42／
手提げかご 44／ムチウブサー 46／茶碗かご 48／茶碗かご 50／
かご（六つ目編み指導用のサンプル）52／果物かご 54／果物かご 56／
ソーキ 58／カジラーティール 60／カジラーティール 62／
つりかご 64／チリカゴ 66／ウミディール 68

第３章　バーキの作り方　71

アラバーキの作り方　72
ミージョーキの作り方　74
六つ目かごの編み方　82
ティールの作り方　87

第1章　上地におけるバーキづくり

沖縄県の主な有用竹・笹

日本における代表的な竹はモウソウチク（孟宗竹）、マダケ（苦竹）、ハチク（淡竹）の温帯系の3種である。県内における竹科の植物は、11属40余種（種、変種、品種、栽培品種を含む）が知られている。その中で、食材、建材、生垣、庭園樹などに用いられている主なものは、下表のとおりである。

種類		属名	名称	方言名	主な用途	特徴
竹類（竹の皮は若竹になるとき落ちる）	地下茎は長くて細い	マダケ	マダケ（苦竹） Phyllostachys bambusoides	カラタキ（唐竹）、カラタケ（西表）、カラダイ（与論、西表）、カラデー、デー、マーデー（奄美）、カラデ（喜界）、マデー（加計呂麻）	御用竹（公儀用）として王家のために用いた。砂糖樽のたが（帯）、雨傘の骨、笛、船具用、高級花籠類、物干竿、鯉幟用竿、トーカチ（斗掻）、竹フゾウ（煙草入）、箒	稈は高さ18～20m、径10cmに達する。棹皮は緑色。3～4年後に灰白黄色になる。節は2環状。筍は4～5月に出る。稈は弾力と靭性に富み耐久力が強く、竹材中もっとも工芸的性質にすぐれる。沖縄では、旧美里村が生産地であったが、絶対量が少なく、県外から購入していたため、バーキ類には殆ど用いなかった。美しくて丈夫な竹。
			ホテイチク（布袋竹） Phyllostachys aurea	クサンダキ、チンブクダキ、チンブーダキ（釣竿の意）、アハタキ、クサンダイ、チボタキ（西表）、グサンダキ（石垣）、チャグダキ（与那国）	釣竿、杖、格子、パイプ、花籠類、庭園用、鑑賞用、門松、枝は箒、根の分部は細工物に利用	中高木で高さ8～10m、径3～5cm、基部の節間はごく短い。琉球王朝時代に導入され、各地で群落を見る事が多い。稈は強靭だが編物細工には適しない。
			モウソウチク（孟宗竹） Phyllostachys heterocycla	モーソー、モーソーデー（奄美）、ヤマトゥデー（喜界）	筍は食用（中国の孟宗が病弱の母親のため寒中に筍を求めた故事から、その竹をモウソウチクと称する）	稈は高さ10～15m、径20cmに達する。節は単環状で、若い時は短毛がある。枝は稈の中部以上の節に2本ずつ互生する。筍は4月に出て食用にされる。葉は枝先に2～8個ずつつく。中国原産で、1736年に薩摩藩に献納したものが日本各地へ広がった。沖縄では生育は良くない。
			ケイチク（桂竹） ＝タイワンマダケ（台湾苦竹） Phyllostachys makinoi			稈は高さ10～18m、径5～9cm。戦後、台湾より導入され栽培されているが生育は良好。
		トウチク	トウチク（唐竹） Sinobambusa tootsik		鑑賞用。	稈は高さ13m、径5cm。筍は6月ごろ出る。葉は小枝に3～9枚つく。
		マチク	マチク（麻竹） Dendrocalamus latifolius			高さ10～20m、径15cm内外、稈に直角に枝を出す。戦前は本部町伊豆味の桃原農園ほかに栽培されていたが、戦後台湾より導入、広く普及されるようになった。

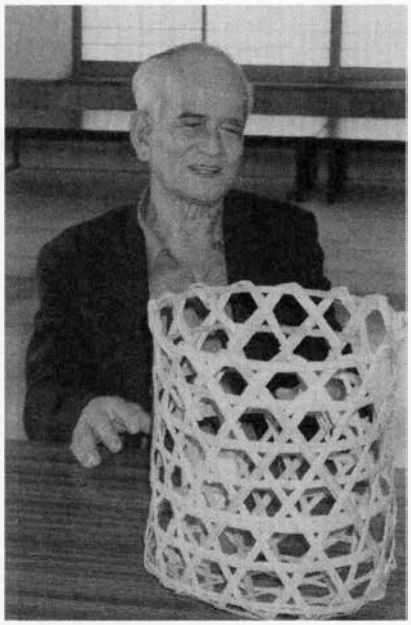
	地下茎は短くて太い	ホウライチク	ホウライチク（蓬莱竹）Bambusa glaucescens	ンジャタキ（苦竹）、ンジャダキ、ニガダキ、シマダキ（島竹）、カーダキ、ウビダキ（桶の帯竹の意）、クーダキ（鳥籠を作る竹の意）、ゲッタキ、インガタキ、インザダキ、キンチク（金竹、鹿児島付近）、チンチク（種子島）	皮に粘り気があり、籠作りに最適で、竹細工に多く用いられる。生垣や川の土砂止め、集落内の屋敷林として植栽。建築用	稈は高さ3～4m、径2～3cm。上方は多少湾曲し、節間は20～50cm、肉厚で中央の空間は小さく、若い時は稈面に逆向きの細毛がある。枝は節から大小多数出る。筍は夏から秋に出る。葉は小枝に3～15枚つく。インドシナ原産。九州、琉球で生垣に植栽したのが逸出し、野生化した所がある。和名の蓬莱は中国伝説で仙人が住む山と言われる神仙境の意で、この竹を賞賛して名付けられたとのこと。
			リョクチク（緑竹）Bambusa oldhamii	マータク、マッタク、マツトゥク、マティーク（与那国）		高さ12m内外、径10cm位。筍を食用とするため台湾より導入された。
			ダイサンチク（泰山竹）Bambusa vulgaris	マータク、マータクー、マッタク、マットゥク、マティク、ウブダキ（西表、桶の帯の意）、タイワンダキ（与那国）	筍は食用、幹は竿や建築用材、箸立、運搬用棒、物干し竿、ウチカビの銭型	高さ5～15m、径3～15cm、鮮緑色で光沢があり、1節から多数の枝が出る。竹の皮の表面には褐毛が多い。肉質部が厚く、その向きの細工物に利用したが、皮を利用する竹細工には向かない。琉球王朝時代より宅地の周囲などに栽培される。
			キンシチク（金糸竹）Bambusa vulgaris var. striata		鑑賞用。	1955(昭和30)年ごろ台湾から導入され、庭園や公園などの植え込み用として使用。叢立性の竹で、高さ4～5m、径8～9cm。ダイサンチクの変種で、稈に黄金色の線条がある。
			シチク（莿竹）Bambusa stenostachya			高さ10～12m、径8～12cm。稈はやや湾曲し、枝が直角に出る。各節に1～3個の太い刺がある。戦前に台湾から導入された。
笹類（竹の皮はずっと残る）	メダケ		リュウキュウチク（琉球竹）Pleioblastus linearis	ヤンバルダキ（山原竹）、ヤンバラーダキ、クンヂャンダキ、チヌブダキ、ヤマダキ、ダキ、イャーゴロ、クダグン、ササ、デー、デフェ、ニャーゴロ、ヤーギョロ（奄美）	丸竹細工、チヌブ、チニブ（壁、垣根、ヒンプン）、竹編み障子、天井、屋根などの建築用、庭箒、炭俵	稈は高さ1～3m、径1～2cm、節間は15～16cm。琉球列島固有。稈は強靭で建築補助材、編物、農業資材として利用され、枝葉は屋根葺きに用いられ、70～80年もつ。
			タイミンチク（大明竹）Pleioblastus gramineus	シマダキ、ダイミョー、デーノダキ、デーモーダキ、フクダキ、クサタキ（与那国）、ウシダイ、シノール（西表）	竹床、物干竿、笛材	稈は高さ1～3m、径1～2.5cm。節間は長く25cm内外。沖縄諸島の固有と考えられている。葉はやや薄く下垂する。庭園樹として植栽され、稈、枝葉ともに脆弱なため建築補助材等には殆ど利用されない。

		ゴザダケザサ（御座岳笹）Pleioblastus gozadakense	ウムトゥダキ、タキャーマ（石垣）、ヤマダイ（与那国）、ヤマンダイ（西表）	竹床、物干竿、笛材矢材（伝承）、屋根材	稈は高さ1～4m、径0.5～2.5cm。節間は20～23cmあり、枝は1～2.5mと長い。石垣・西表島に自生する。稈は強靭でリュウキュウチクに勝り、建築補助材、垣根材、農業用資材として利用される。枝葉は屋根葺き用に良い。
		カンザンチク（寒山竹）Pleioblastus hindsii	デーミョー、ダイミョー（西表）、ダイミョーダキ、コバマダケ（石垣）、ダイミョーチク、クバマダイ（与那国）	竹床（石垣周辺）、簾（小浜島）、横笛（小浜島）、竹垣用	稈は高さ2～5m、径2～3cm、節間は14～15cm。枝は節より3～5本ずつ鋭角に出る。葉は小枝の先に4～7枚ずつつく。中国南部原産。関東地方以西で栽培。沖縄では与那国島、小浜島に多い。

参考文献

『沖縄大百科事典』　沖縄タイムス社　1983年
『沖縄語辞典』　大蔵省印刷局　1998年
『図鑑　琉球列島有用樹木誌』　沖縄出版　1989年
『日本の野生植物　木本Ⅱ』　平凡社　1999年
『琉球列島植物方言集』　新星図書出版　1979年
『農務帳を読む』　比嘉武吉　1997年
『日本農書全書34』　農山漁村文化協会　1983年
『佐敷町史　2　民俗』　佐敷町　1984年
『沖縄植物野外活用図鑑』　新星図書出版　1979年
『沖縄の民具』　慶友社　1973年
『沖縄の暮らしと民具』　慶友社　1982年
『沖縄県史　第23巻　民俗2』　沖縄県教育委員会　1973年

上地アラバーキ



與志平朝蒲氏（大正2年生）の製作によるバーキ28点が平成15年6月12日に沖縄市立郷土博物館へ寄贈された。これらのバーキは、1953年～1983年頃にかけて製作されたものであるが、戦前から上地で作り続けられたバーキづくりの技術が受け継がれている。ここでは、與志平氏への聞き取りを交えながら、戦前における上地のバーキの時代背景を紹介する。

沖縄本島において竹細工の村として知られていたのは、南部地区では南城市佐敷の小谷と新里、北部地区では宜野座村の祖慶、漢那、名護市伊差川、今帰仁村、中部地区では、旧美里村や越来村一帯であった。「スーキカンナー」という沖縄民謡に“越来間切ぬ上地どやいびーしが荒バーキーや買みそーらに”と村から村へ品物を売り歩く行商人たちの活気あふれるやり取りを歌う曲がある。歌の節にも登場するように、上地はアラバーキが有名で、“イーチアラバーキー”と呼ばれていた。

> 「…上地は上地アラバーキーという名前がついたおかげで、潤いができたんじゃないかと。だから全体的に言うて、上地の経済を何して（支えて）くれたのはこの竹細工なんだと。」

與志平朝蒲氏はそのように語る。與志平さんは戦前の上地で実際に竹細工に従事され、竹細工の講師もなさった方である。

上地ではもともと竹細工が盛んだったので、上地で作られたアラバーキは「上地アラバーキ」と呼ばれていた。この上地アラバーキが、上地の経済をささえた。

> 「このタマナ（キャベツのこと）バーキを作る場合にはですね、上地の部落内ならばもう、どうしても4､50名（の方が）作ったと思いますが。夜もですね、ひどい人は2時間ぐらいしか寝てなかったんじゃないかと思います。もう、“上地ぇ銭神降とーんどー（上地はお金の神様が降りてきている）”して評判だったからね。」

上地では昔から副業としてバーキを作っていた。

「…耕地面積の広いところは副業はあまりなかったと思いますがですね。上地は面積が小さいから、昔から副業は盛んだったと思います。」

農地の多い地域では農業だけで生活できるが、農地の少ない上地にとって副業である竹細工は大事な収入源であった。だが、以前はまだ「銭神降る」ほどの収入源とはならなかったという。「銭神降る」状況になるのは、昭和5年に上地副業組合ができてからである。

その前に、與志平さんの子ども時代を振り返ってみることにする。

バーキとの出会い

與志平さんがバーキ作りをはじめたのは10才頃である。親戚の家に遊びに行ったときに見よう見まねで作りはじめた。

小学4年生の時に学校でバーキ作りをやったが、仕上げのところで自信がなかったので、家に持ち帰って近所の方に教えてもらい、翌日学校で仕上げて提出した。するとそれが県に出品されて見事1位になった。そのあと本土へも出品され、3位になった。與志平さんは、小さいころからバーキづくりの才能を発揮していた。

「私はもう、今は人間になったと思っております。」

與志平さんが突然こう言いだした。周囲はどっと笑いにつつまれる。
以前は何だったんですかとたずねる。

「あの時分はですね、小学校出る時分、また、10代の終わりまで、(中略)“それがは人間にはならない(立派な大人にはなれない)”と言われるぐらいやんちゃ者で、そしてこのバーキグゥーチュクヤー(竹細工を作る人)して遊んで歩いて、農作業は全然やらないし…」

意外な答えが返ってきた。周囲からそう言われるほど、バーキ作りはまだ理解を得られていなかった。周囲の人はこう思っていた。「與志平さんが農作業をやらないのは体のどこかが悪く健康体でないからだ、陰で竹細工をして遊んでいるのはそのせいだ」と。しかし、與志平さんが農作業をやらなかったのは、決して体のど

こかが悪かったからではない。家庭の境遇のせいだった。與志平さんの家庭は、広い農地を持っていなかったため、子どもの頃からバーキ作りをしていたのである。

竹細工がどんなにうまくても評価されない。その時、與志平さんは何を思っただろうか…。

だが、そんなバーキグヮーチュクヤーが、いずれ上地の役に立つことになる。

上地副業組合の設立

昭和5年、上地副業組合が設立された。

当時の沖縄は、冬キャベツの産地として全国一を誇り、国内はもとより朝鮮や中国東北部にも出荷していた。そのキャベツの出荷用として、竹かご等の需要が急速にのびたのである。副業組合では竹製品の統一が行われ、品質改善や技術の刷新を追求した。

副業組合では、県から招かれた本土の講師による講習が行われた。與志平さんは17歳の時に初めて講習を受け、いろいろな技術を学んだ。

竹細工の生産は、組合が千個単位で業者と契約し、各人へ割り当てるという方法で行った。一人あたりの割り当てはバーキ25個・ミーバーラー4個であった。割り当てをこなすと、奨励金がもらえたという。

竹細工の需要は増加の一途をたどり、材料である竹は、上地では需要のわずか2割程度しか調達できず、倉敷や御殿敷(うどぅんしき)、遠くは金武あたりまで調達に出かけた。

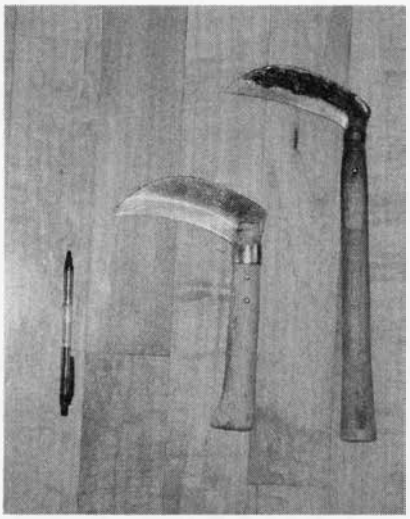
即現金収入となる竹細工は魅力的で、各家庭では夜になっても明かりを灯しながら作り続け、子どもたちも手伝ったという。

組合の設立によって上地アラバーキは県内で有名になり、與志平さんの技術もまた、活きる場所を得た。

職人の技

竹細工の製作はアチイラナ（厚鎌）のみで行った。これは沖縄の竹細工の特徴である。本土の工芸品の製作には、ナタを使用したこともあった。

與志平さんはこのアチイラナ1本を上手に使いこなす。例えば、バーキ作りの製作工程で一番難しいとされる竹ヒゴ作りでは、普通の人がヒゴを3本しか作れないところを、與志平さんは4本作ってしまう。



竹採りに使った厚ガマ（右）と竹細工に使ったアチイラナ（左）

製作されたバーキは、どれも同じ大きさであり、均整がとれてい

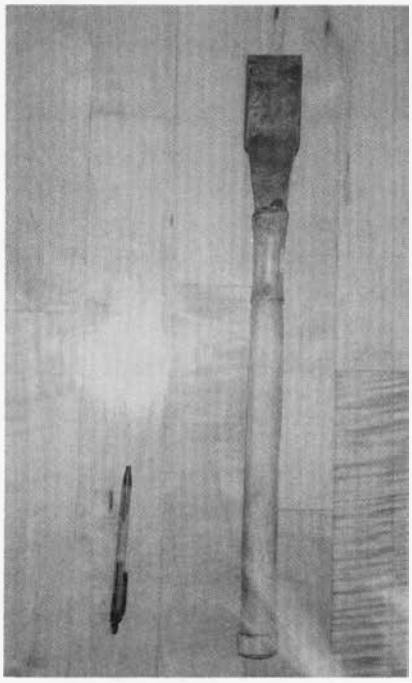
て美しい。

バーキの大きさをどうやって決めているのか聞くと「手が覚えている」と言って、いつも同じ大きさのものが作れるという自信をのぞかせた。

しかし技術があるだけでは職人とはいえない。これだけ大量の需要があると、品質を落としてでも数多く作らなければならないこともある。

「だから、私の物はね、みんなで“あれは上手だよ”という時期もあればね、
“ありが物やならんしが、売いぐるさぬ（あれのはだめだ、売りにくいから）”
といってね。」

バーキが大量に必要な時期には半分の材料で一つのバーキを作る。そのため、手に持つとやわく、非常に軽い。逆に買い手が少なくなってくるとしっかりした頑丈なものを作って、再び自分の技術をアピールするのである。


竹を根元から伐るのに使ったノミ

與志平さんは、これまで40種類もの竹細工を製作してきたが、中にはちょっと変わった物もある。戦時中に作った竹飛行機である。

竹飛行機は、米軍機が本物の飛行機と見誤って爆弾投下するのをねらったものである。鹿児島から竹細工の職人たちが来て、竹飛行機の図面を見たが、職人たちは作れないと言った。ちょうどその時、與志平さんは飛行場の測量を手伝っていた。マイクで呼びだされ、竹飛行機の製作を命じられた。與志平さんは、竹細工をしていた者を集め、竹飛行機を完成させた。米軍はねらい通り爆弾を落としてきたが、爆風でふわっと浮いた機体の底が竹だったのを見て、その後爆弾を落とさなくなった。

技術の伝承へむけての取り組み

戦後、與志平さんは生業としてのバーキづくりをやめた。講師として教えることはたまにあったが、自分で作って売ることはしなかった。役所から講習を依頼された時も「教えることはするが、あまり人前に名前を出さないでくれ」と頼んだ。

「私が竹細工やったのはですね、ただ暇だからやっただけであってですね。貧乏であって何もすることがないので、竹と遊んでいたら、それがお金になっただけの話でありまして。」

與志平さんは竹細工で稼いだお金を子どもの学費にあてた。貧乏で学校へ行けなかった自分の境遇を思い出し、子どもたちは学校に行かせようと決意した。竹細工で生活していくのは自分の世代で終わりにしようと思い、子どもたちには竹細工をさせなかった。子どもたちは立派に育ち、学校の先生などになった。

しかし、一方でさみしい気持ちもあった。上地アラバーキが自分の代でなくなる。先輩から受け継いだ伝統が失われてしまう。自分の持っている技術をなんとかして後世に伝えたいと與志平さんは思うようになった。

その思いを、上地郷友会のみなさんがうけとめた。現在、上地アラバーキの技術の継承へむけた取組みがはじまっている。「月に一度でいいから、みんなで集まって竹細工の勉強をしよう。次の世代に竹細工を伝えていく努力をしよう」少しずつだが、みんな子どもの頃バーキ作りをした経験を思い出しつつある。

（本文は、平成12年12月19日に行われた聞き取り調査を元に構成したものである。）

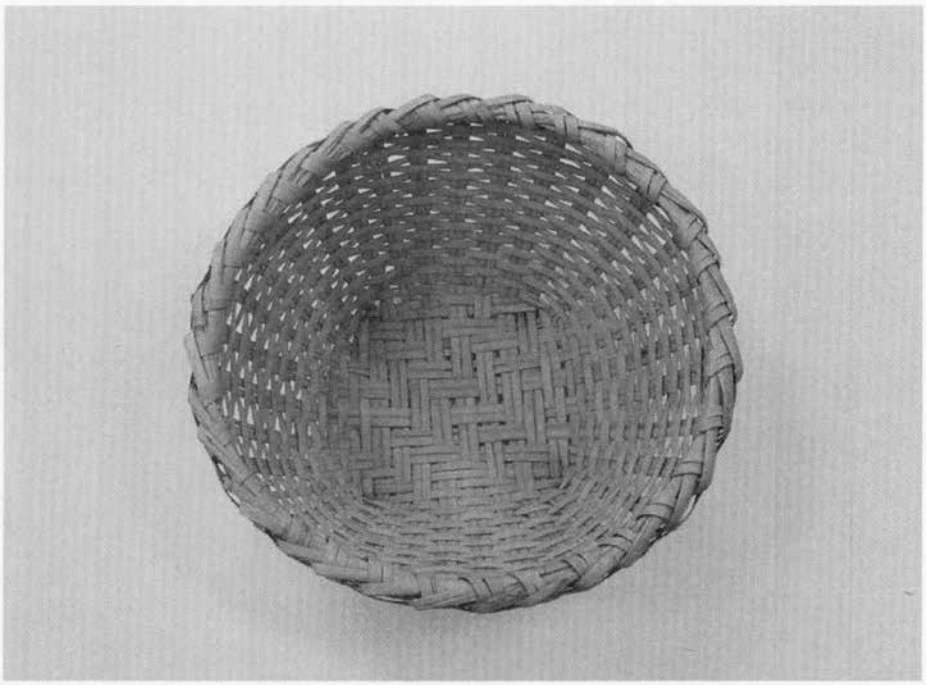
第２章　與志平朝蒲氏製作バーキ資料

名称	アラバーキ

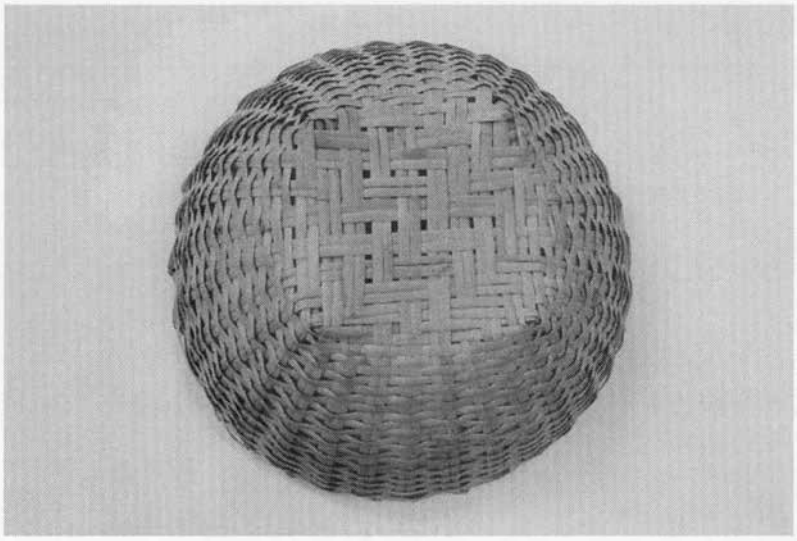
収蔵品番号	2003-1-0005

全体俯瞰

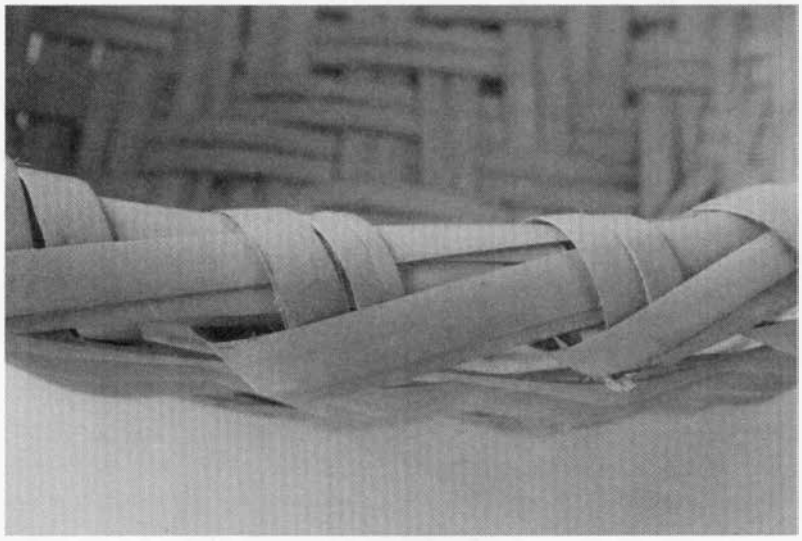
製作年月日	
用　　途	キャベツ(タマナー)の出荷に使った。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:32本(8列×2本×2) 幅:9～10　厚さ:0.8　長さ:1,200 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:9～11　厚さ:0.8　長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み
伝承など	上の縁の部分に少し隙間を空けて作っておいた。 出荷の際には、キャベツを出来るだけたくさん詰めた後、この隙間に紐を通して梱包した。
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 520 220 220
備考	編み方は72ページ参照



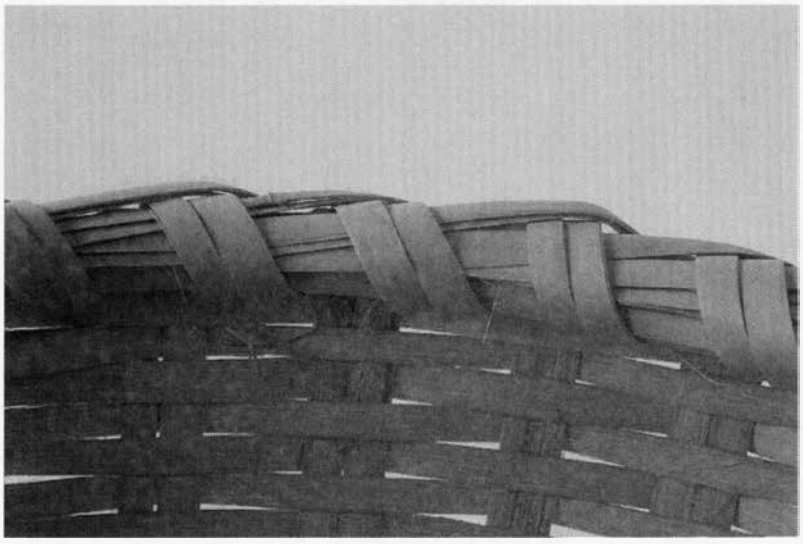
上面



底面



縁外側



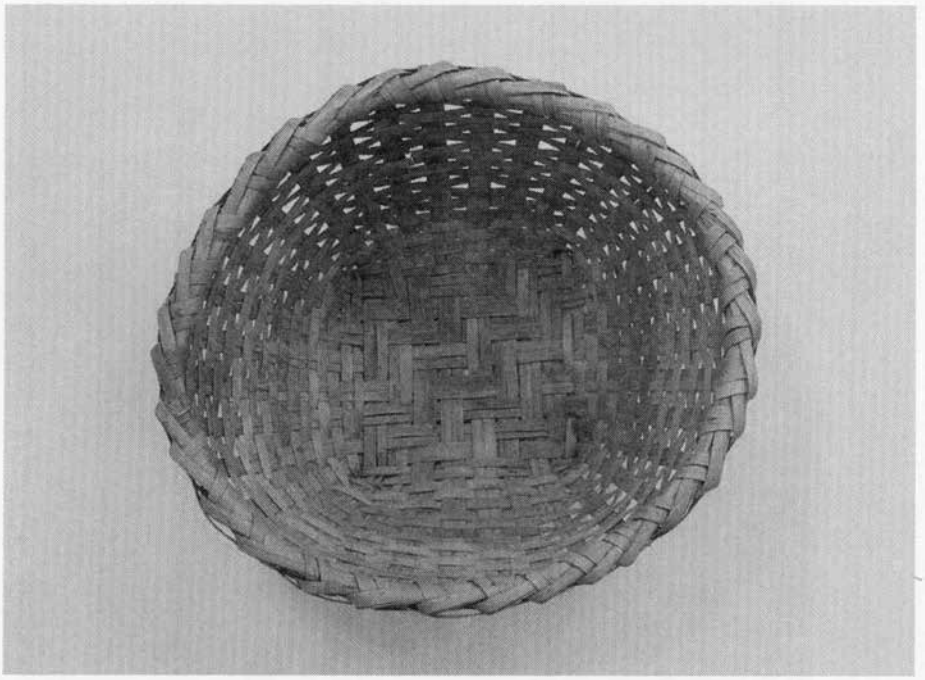
縁内側

名称	アラバーキ

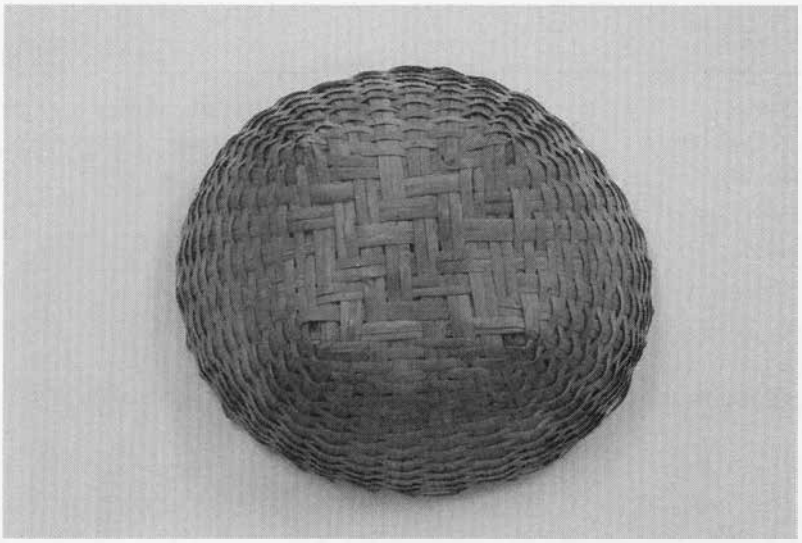
収蔵品番号	2003-1-0006

全体俯瞰

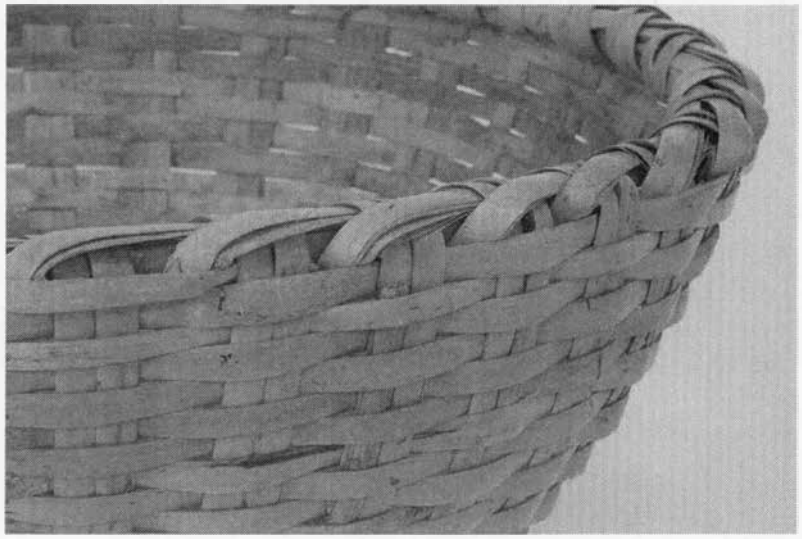
製作年月日	
用　　途	土木工事の際に土砂の運搬に用いた。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ)使用本数:32本(8列×2本×2) 幅:8～9　厚さ:0.8　長さ:110 巻ひご(ヌチ)本数:適量 幅:8～9　厚さ:0.8　長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み
伝承など	
略図（寸法（直径・高さ・耳・蓋の有無など））	単位:mm 400 180 150
備　考	編み方は72ページ参照



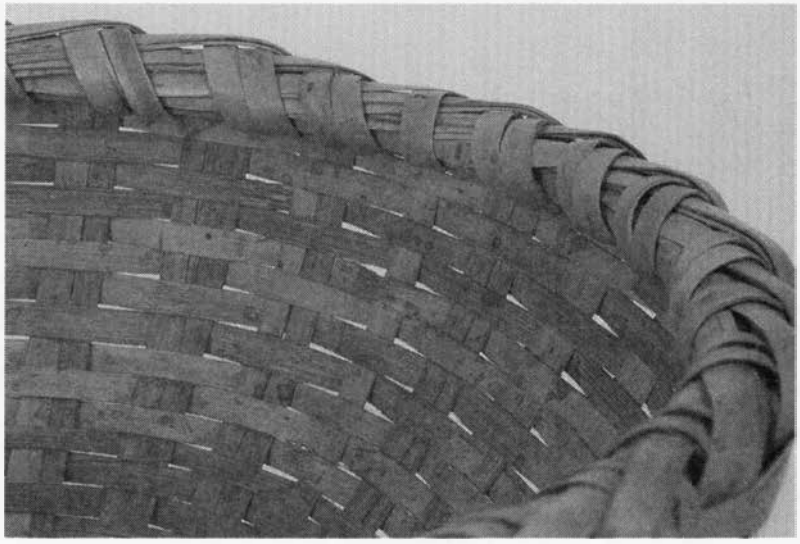
上面



底面



縁外側



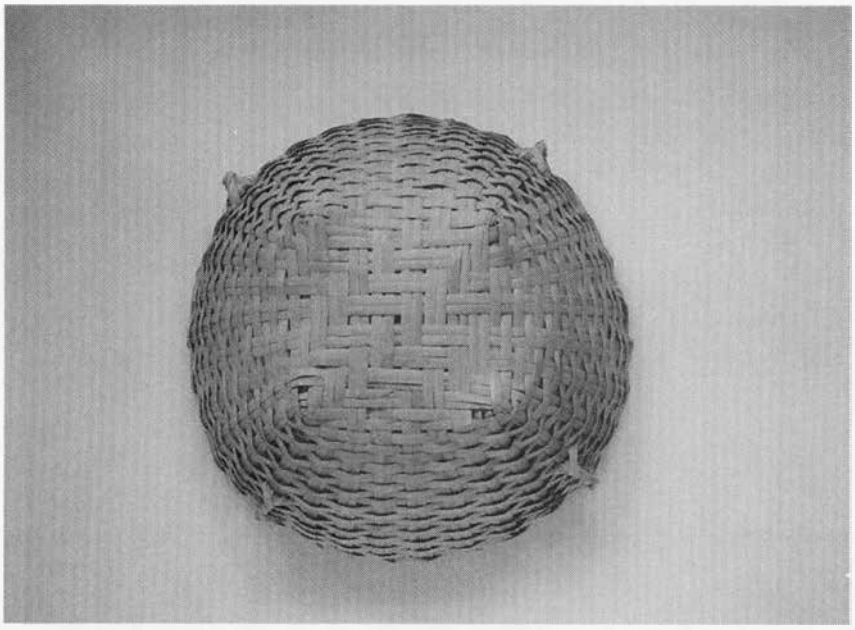
縁内側

名称	ミンバーキ

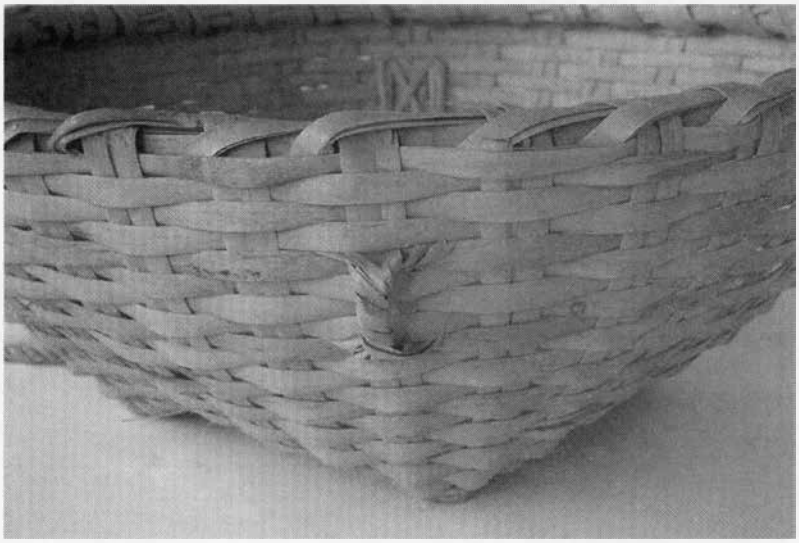
収蔵品番号	2003-1-0007

全体俯瞰

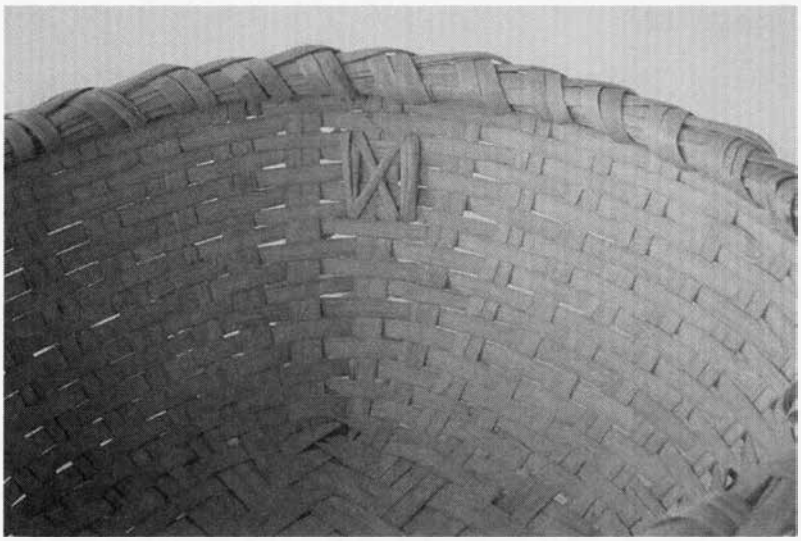
製作年月日	
用　　途	掘った芋や、堆肥を入れ運搬するのに使用した。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:32本(8列×2本×2) 幅:7～10　厚さ:0.5　長さ:1，000 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:8～10　厚さ:0.6～0.8 長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み
伝承など	4個の耳をつけそこにロープを通し、天秤棒の両端に対で吊して使用した。
略図（寸法（直径・高さ・耳・蓋の有無など））	単位:mm 440 170 180
備　考	編み方は72ページ参照



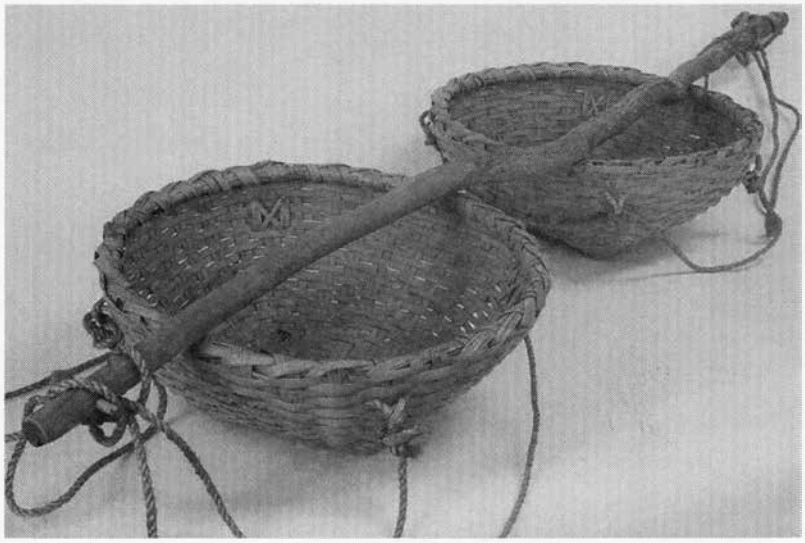
底面



縁外側



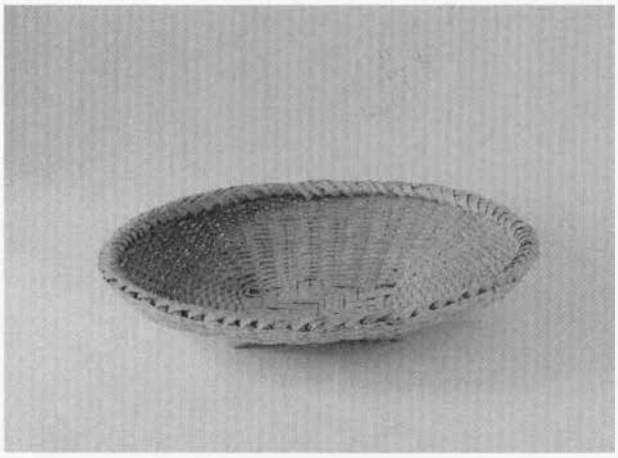
縁内側



使用状況

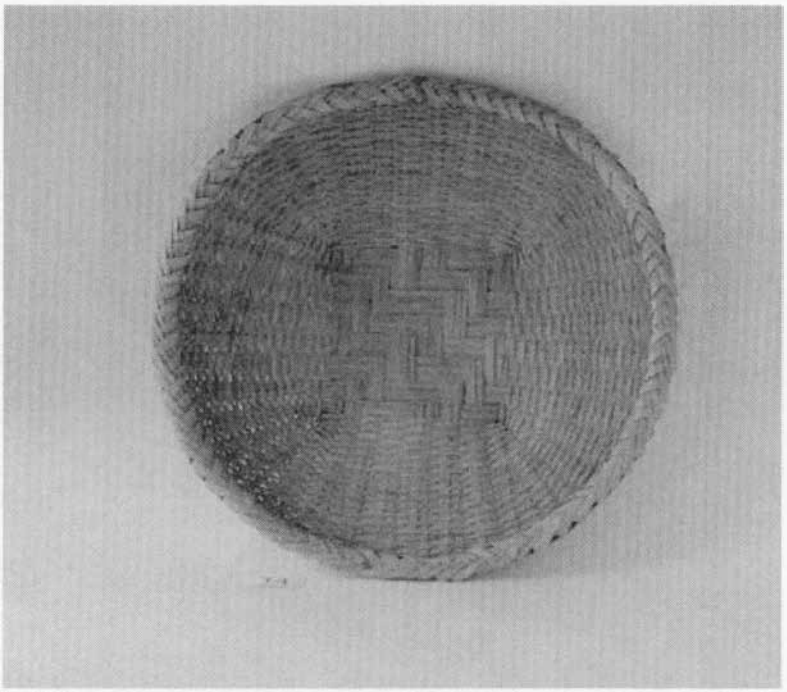
名称	ンムジョーキ

収蔵品番号	2003-1-0008

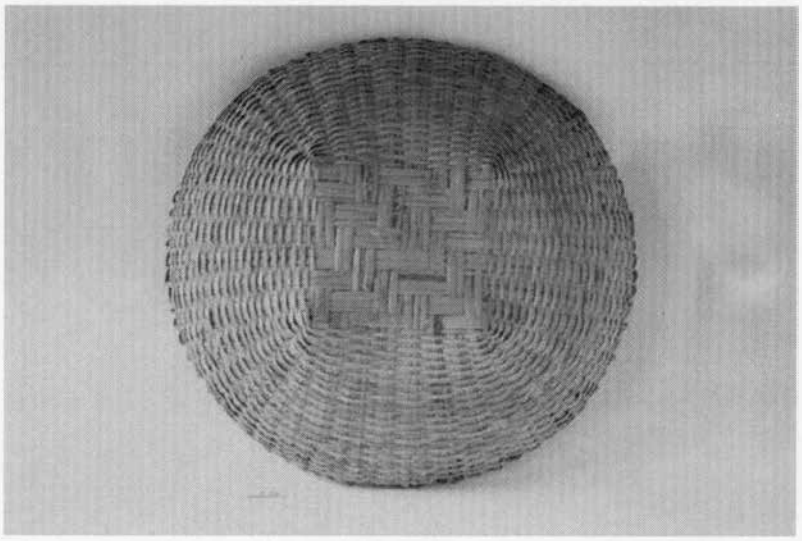


全体俯瞰

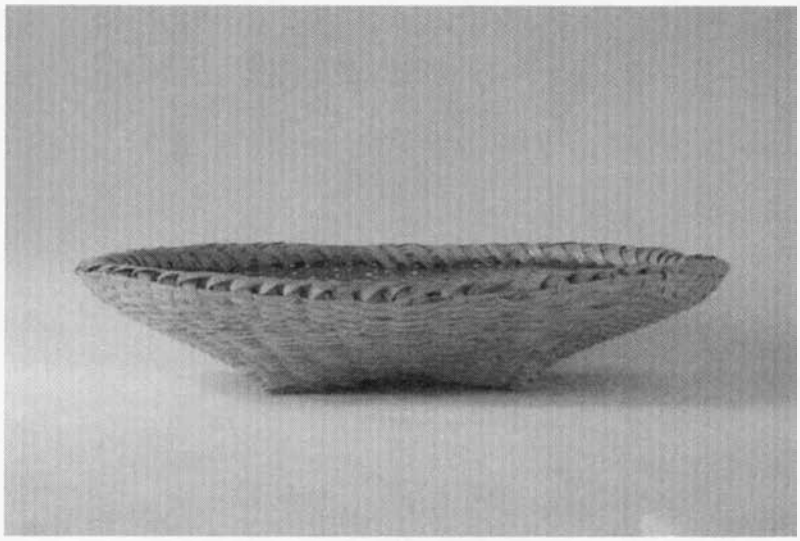
製作年月日	1978～1979年頃
用　　途	主食である煮た芋を入れて食卓上に置いて使った。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ)　使用本数:32本(8列×2本×2) 幅:7.5～9　厚さ:0.5　長さ:900 使用本数は途中から増える。 巻ひご(ヌチ)　本数:適量 幅:3.5～4　厚さ:0.5 長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み
伝承など	家族の数によってンムジョーキの大きさが変わった。 芋の皮は、豚のえさにもなった。どの家庭にもあった。
略図（寸法（直径・高さ・耳・蓋の有無など））	単位:mm 450 90 170
備　考	編み方は72ページ参照



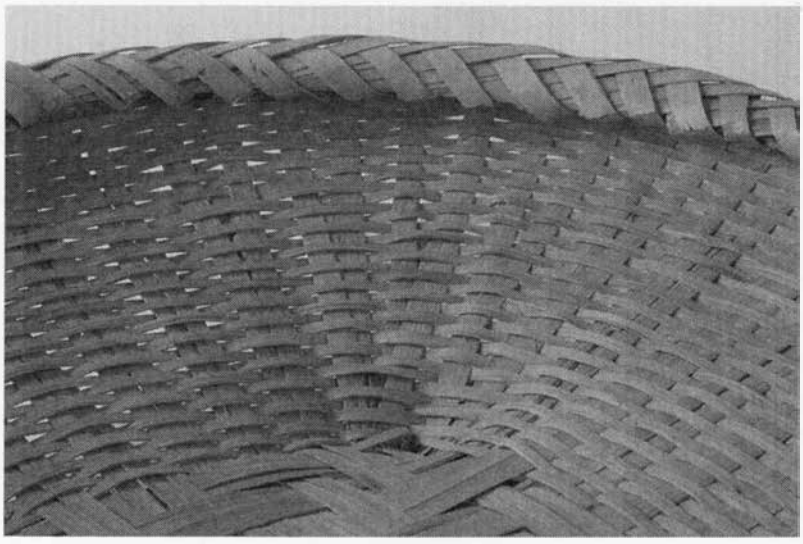
上面



底面



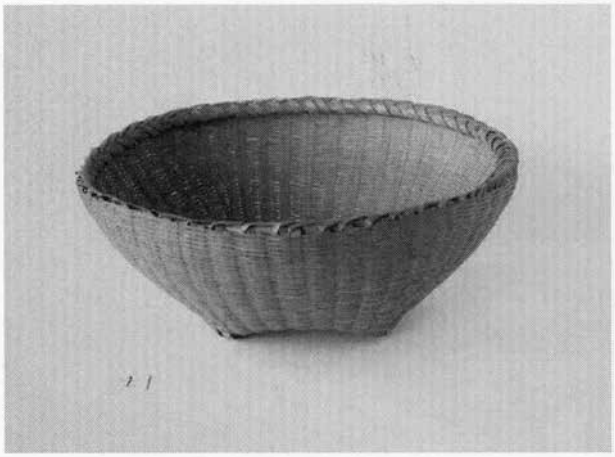
縁外側



縁内側

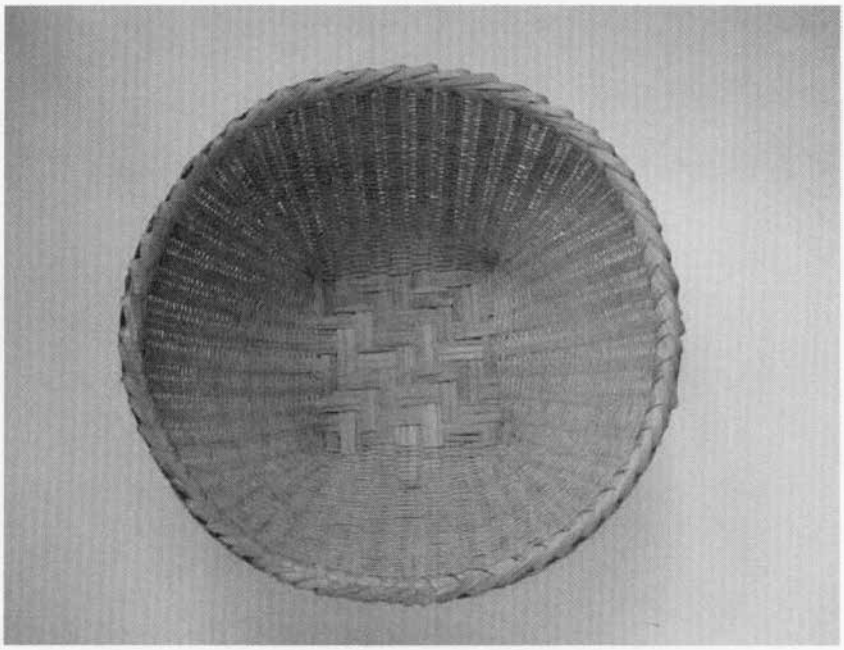
名称	ユナバーキ

収蔵品番号	2003-1-0009

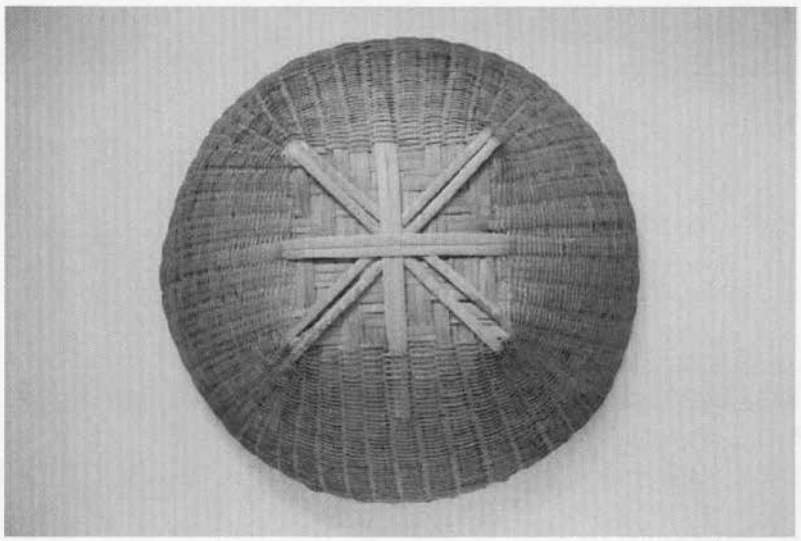


全体俯瞰

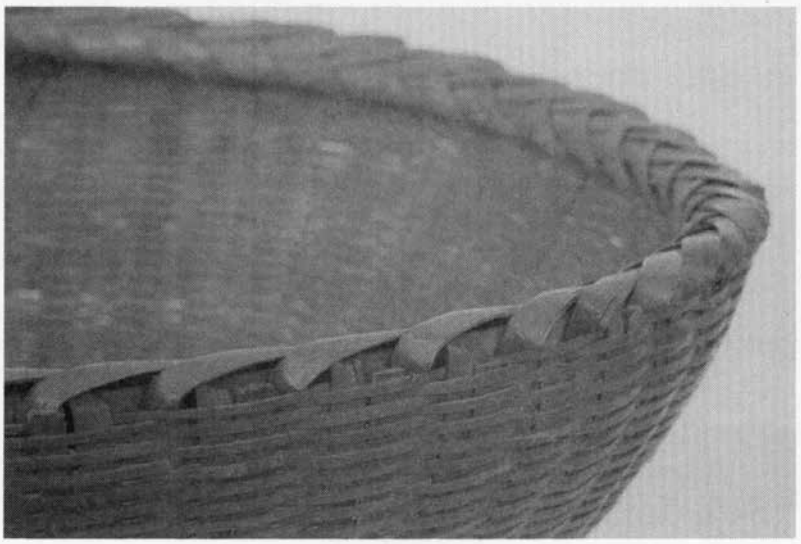
製作年月日	1945年頃
用　　途	トーカチ（米寿）の祝いで、米を八升八合入れた。
材料素材	ホウライチク（ンジャダキ）
材料寸法 mm	縦ひご（カシ）使用本数：36本（9列×2本×2） 幅：7～8　厚さ：0.8　長さ：1，000 巻ひご（ヌチ）本数：適量 幅：2～3　厚さ：0.8　長さ：竹1本分
底の編み方	網代編み　（補強材有り）
伝承など	マグイ（縁周り）の下まで米を入れると八升八合になる。そのため、マグイを作る前に砂を入れ、大きさを確認した。
略図（寸法（直径・高さ・耳・蓋の有無など））	単位：mm　460　180　180
備　考	編み方は72ページ参照



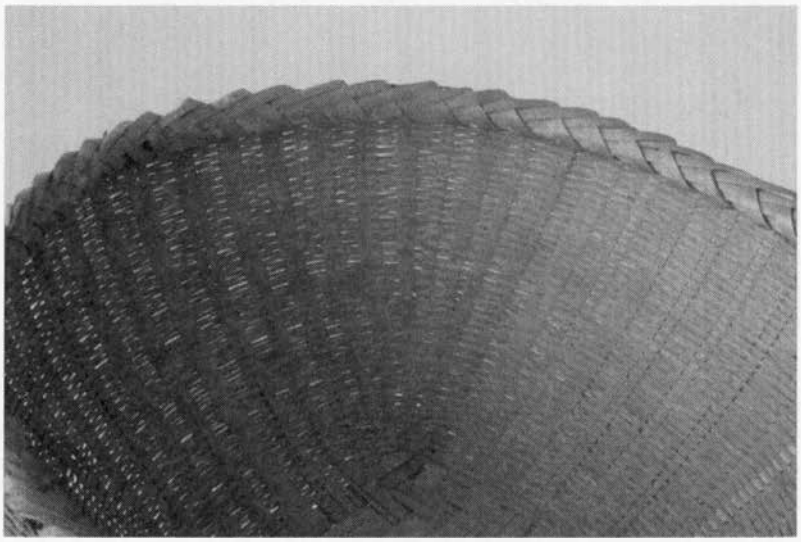
上面



底面



縁外側



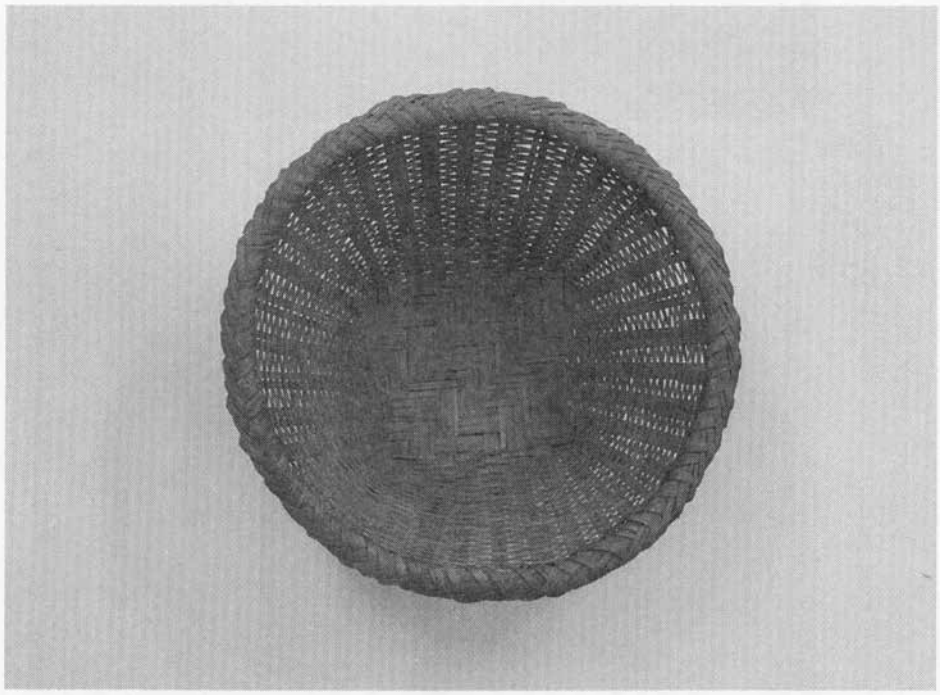
縁内側

名称	ユナバーキ

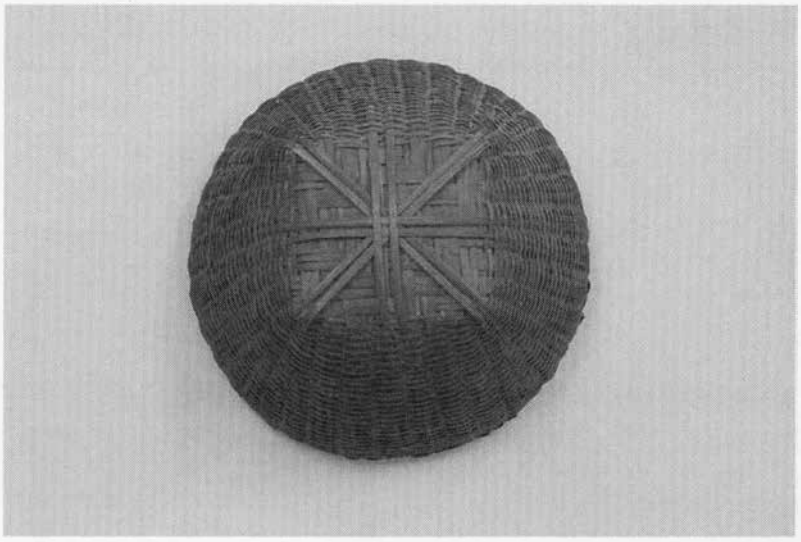
収蔵品番号	2003-1-0010

全体俯瞰

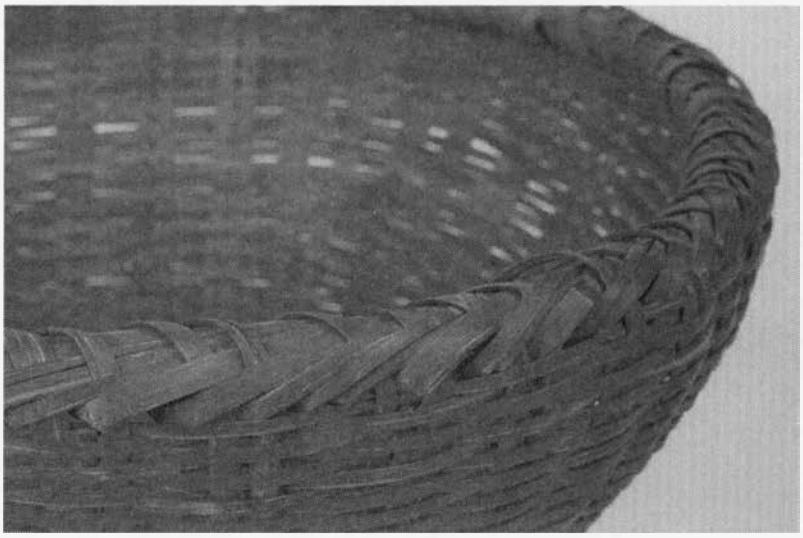
用　　途	米などを量る時に使用した。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ)使用本数:32本(8列×2本×2) 幅:6～8　厚さ:0.3　長さ:950 巻ひご(ヌチ)本数:適量 幅:4　厚さ:0.3　長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み　(補強材有り)
伝承など	
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 345 170 150 底の補強材:2本×4方掛け 幅:0.6～0.7　長さ:300 厚さ:0.5
備　考	編み方は72ページ参照



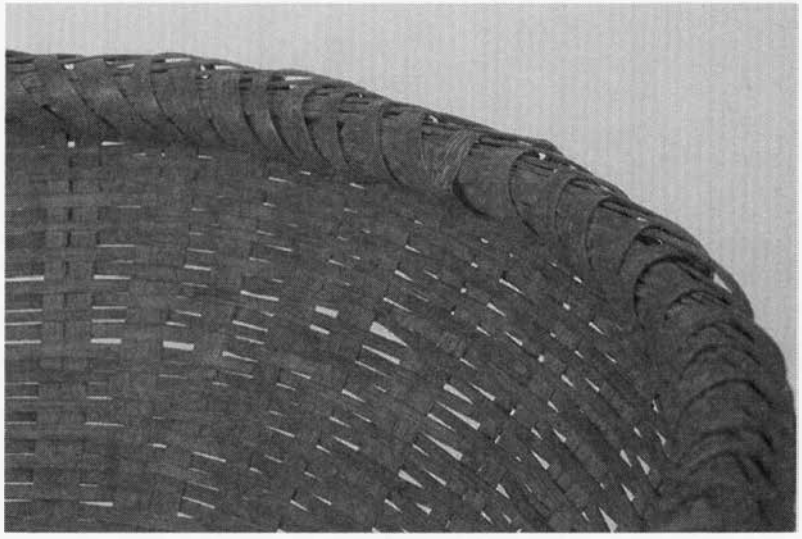
上面



底面



縁外側

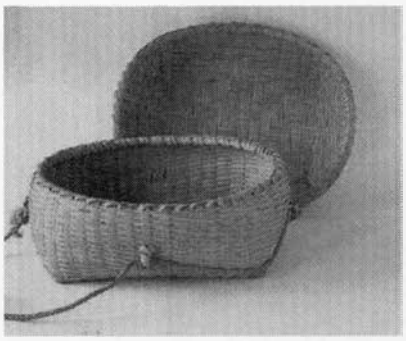


縁内側

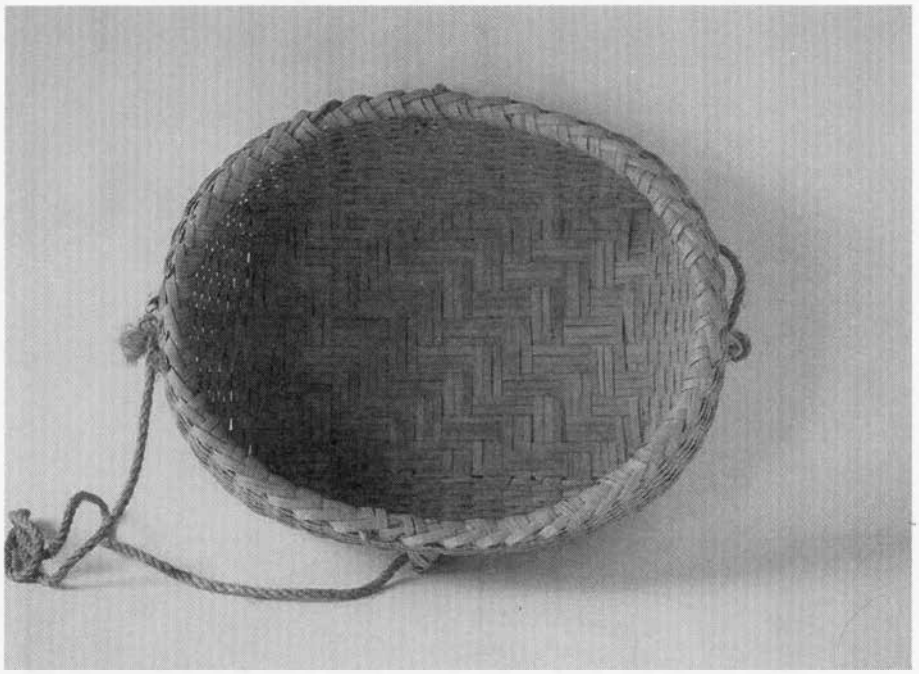
名称	フタバーキ（身部）

収蔵品番号	2003-1-0011

全体俯瞰

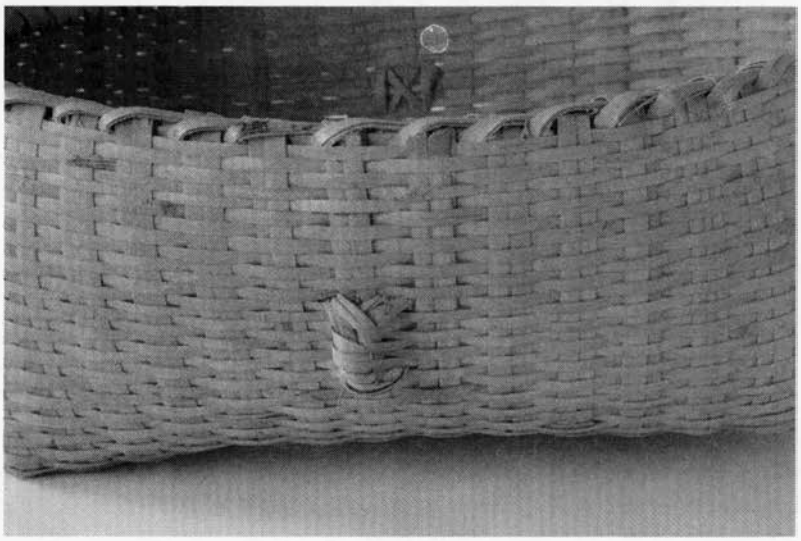


用　　途	物を入れて蓋をし、紐を4カ所の耳に通して縛った。蓋なしで入れ物として使用する事もある。
材料素材	ホウライチク（ンジャダキ）
材料寸法 mm	縦ひご（カシ）　使用本数：50本 幅：5.5～7.0　厚さ：0.5　長さ：1,050×15列×2本 長さ：900×10列×2本 巻ひご（ヌチ）　本数：適量 幅：5.5～7.0　厚さ：0.5 長さ：竹1本分
底の編み方	網代編み
伝承など	耳が付いている。 底のカシは1列3本で、立ち上がり部分から2本。
略図（寸法（直径・高さ・耳・蓋の有無など））	単位：mm 側面　380　150 平面　340　310
備　考	編み方は72ページ参照

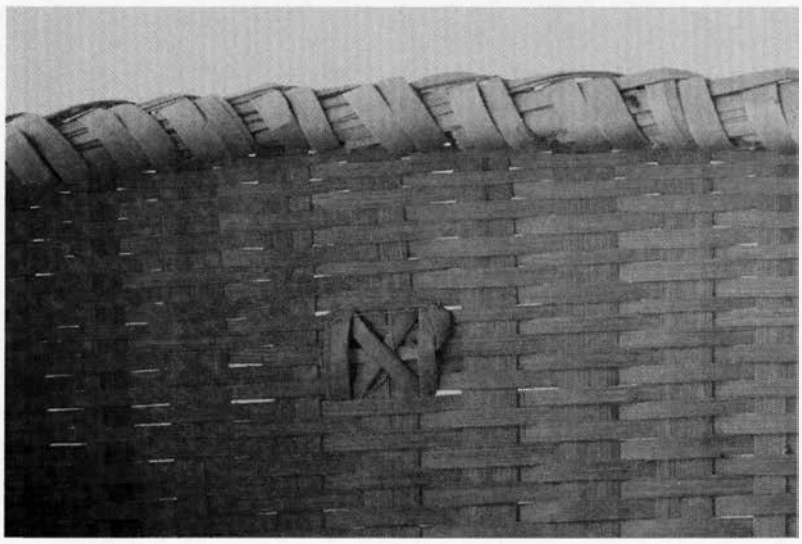


上面

底面



縁外側



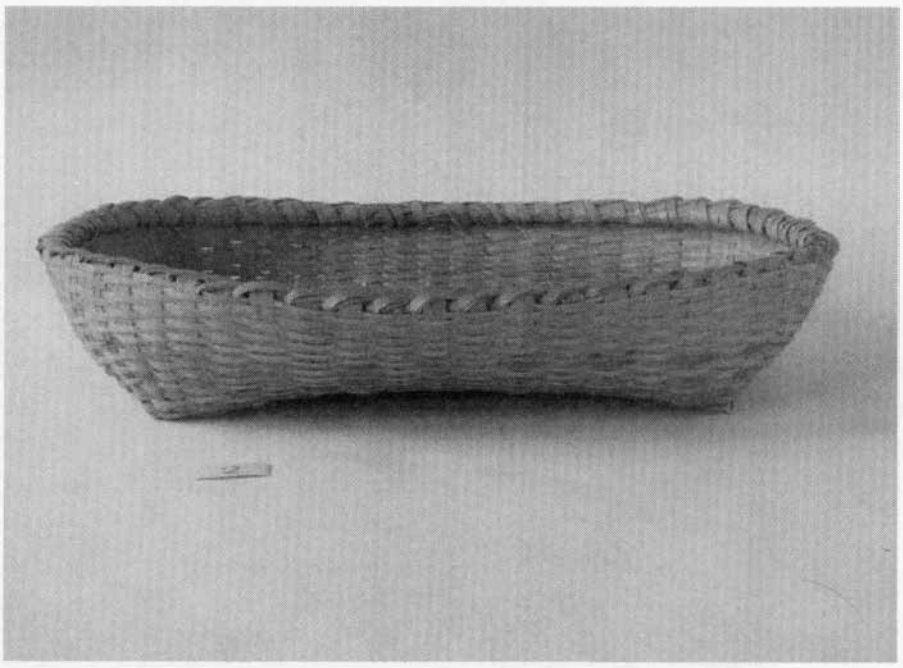
縁内側

名称	フタバーキ(蓋部)

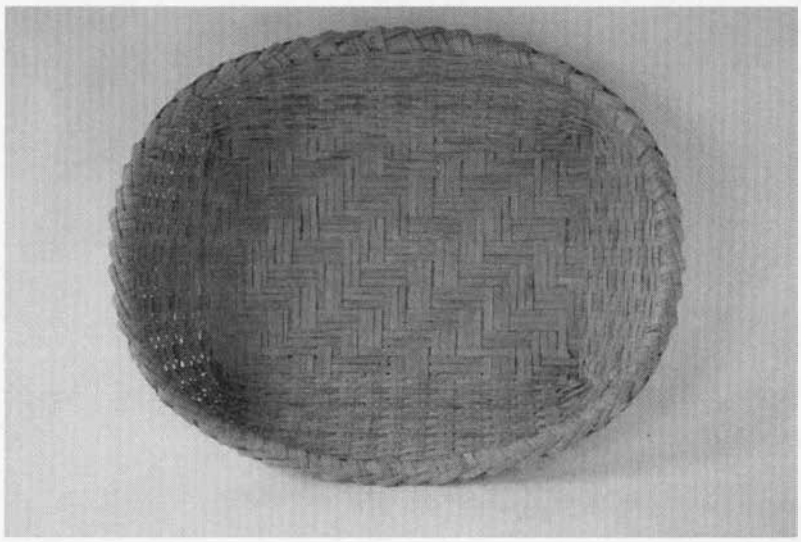
収蔵品番号	2003-1-0011

全体俯瞰

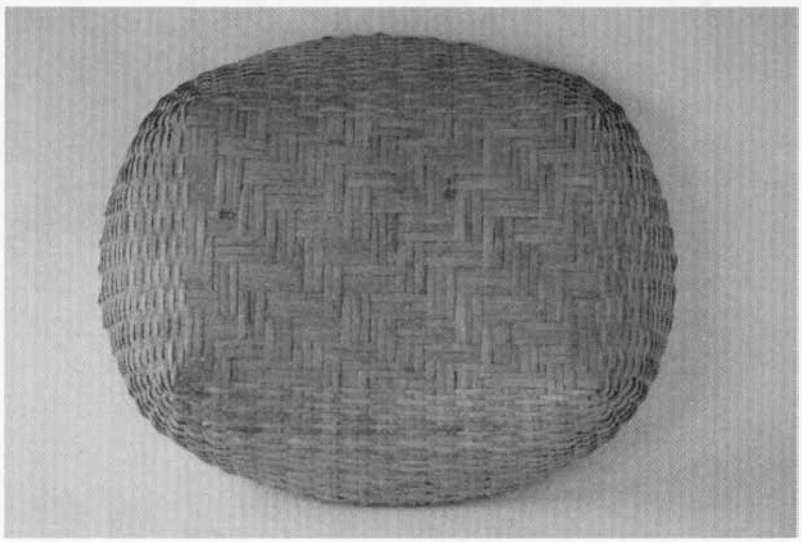
用　　途	物を入れて蓋をし、紐を4カ所の耳に通して縛った。蓋のみを入れ物として使用する事もある。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ)　使用本数:50本 幅:5.5～7.0　厚さ:0.5　長さ:700×15列×2本 長さ:850×10列×2本 巻ひご(ヌチ)　本数:適量 幅:5.5～7.0　厚さ:0.5 長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み
伝承など	
略図(寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 側面 445 × 85 平面 305 × 355
備　考	編み方は72ページ参照



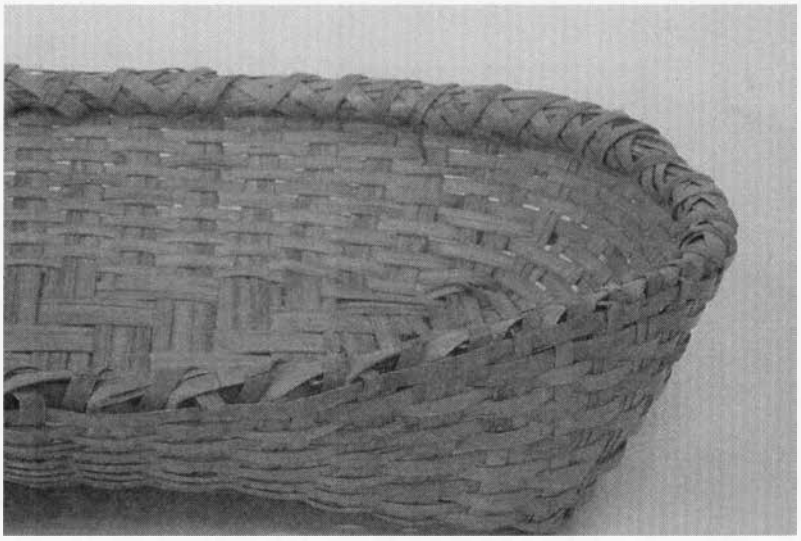
蓋のみで使用する場合



蓋底面



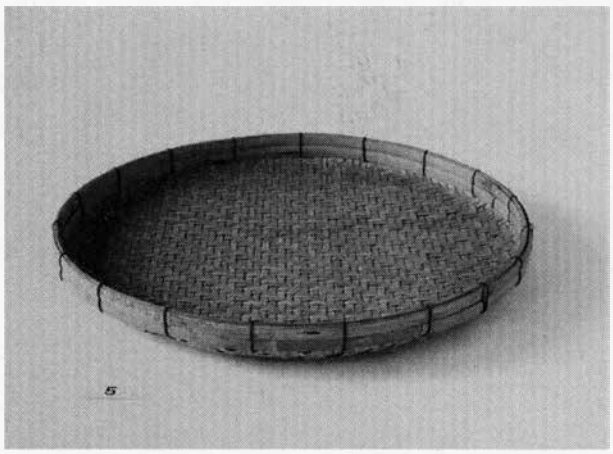
蓋上面



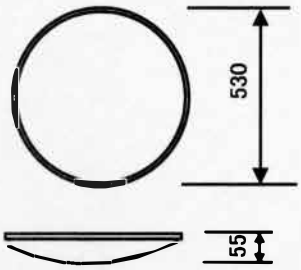
縁外側

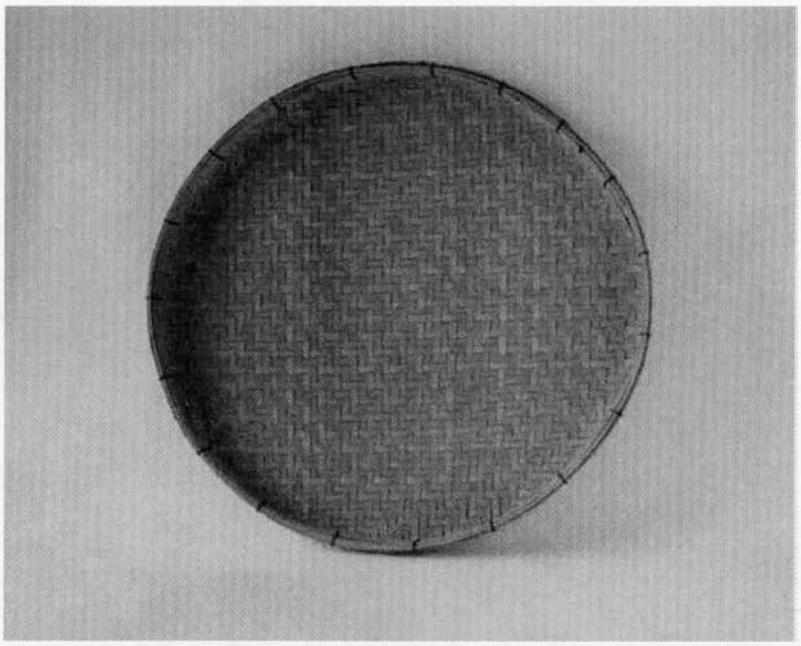
名称	ミージョーキ

収蔵品番号	2003-1-0012

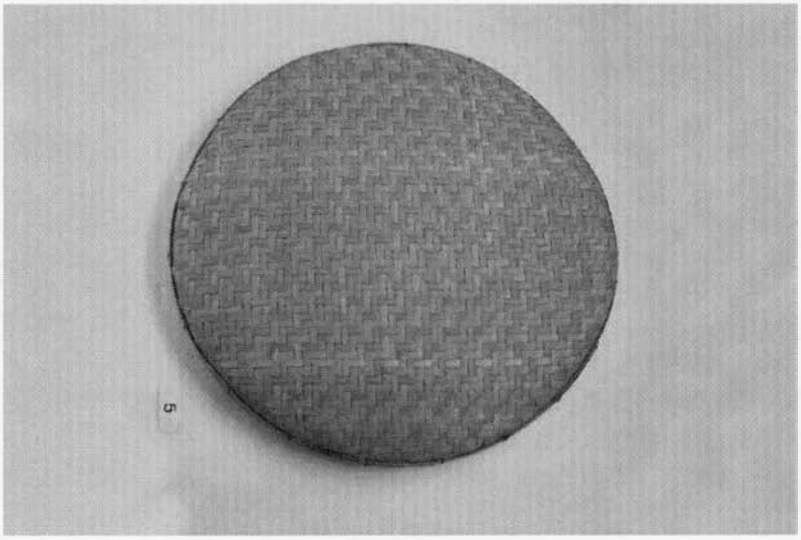


全体俯瞰

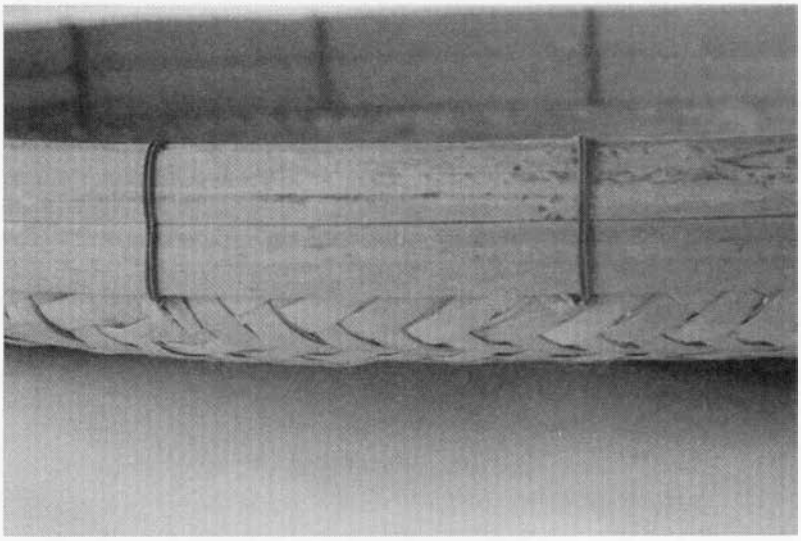
用　　途	穀物の実と殻をふるい分けたり、干したりする時に使用した。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)、銅線
材料寸法 mm	縦ひご(カシ)　使用本数:64本×2方向 幅:8.0　厚さ:0.3　長さ:400～700 縁竹　本数:4本(外側、内側各2本) 幅:15　厚さ:3　長さ:1,800
底の編み方	2本飛び網代編み
伝承など	40年前に作った。 縁竹は、7～8cm間隔で銅線で縛ってある。
略図 寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など)	単位:mm 
備　考	編み方は74ページ参照



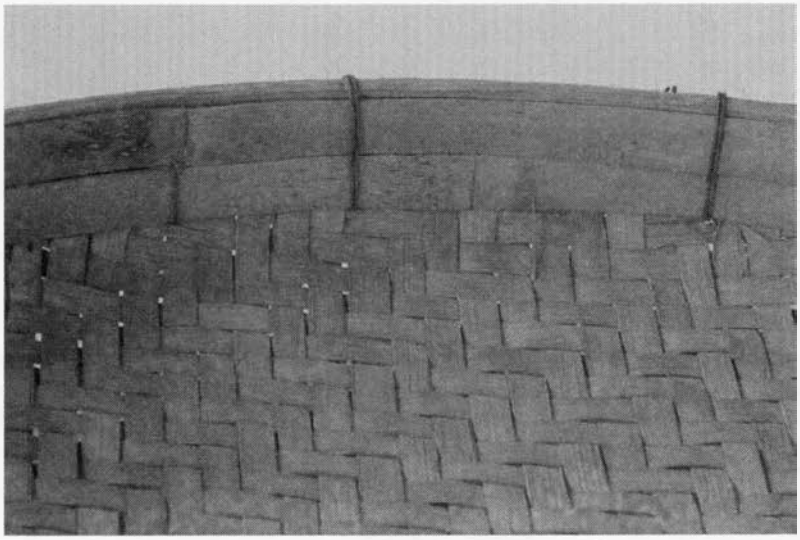
上面



底面



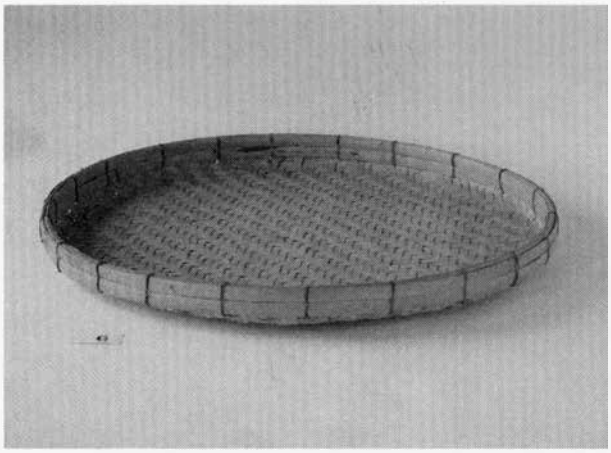
縁外側



縁内側

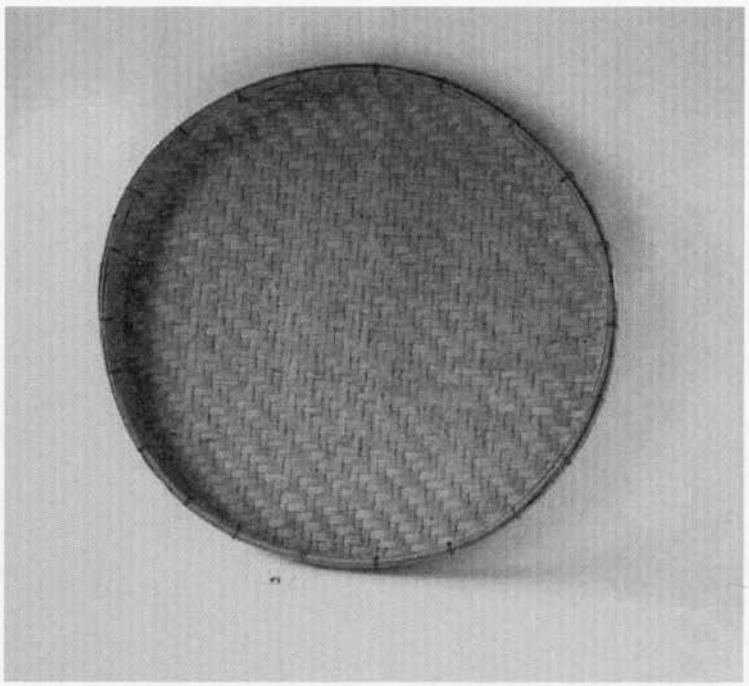
名称	ミージョーキ

収蔵品番号	2003-1-0013

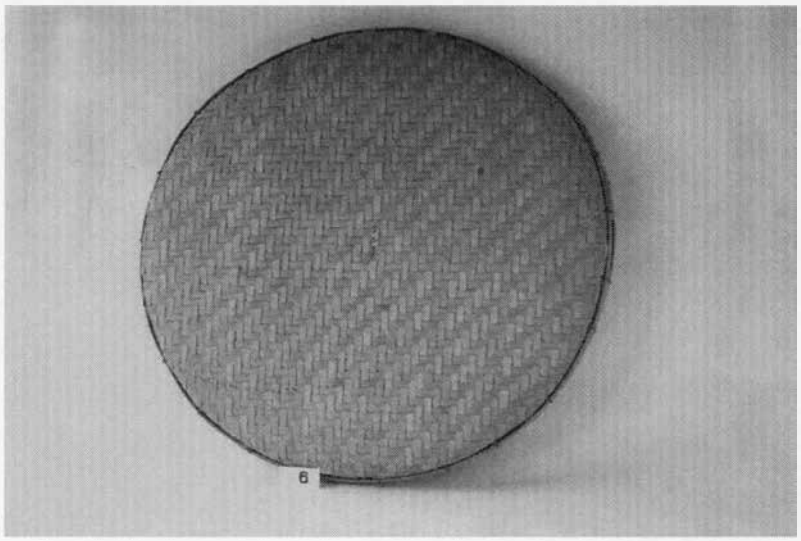


全体俯瞰

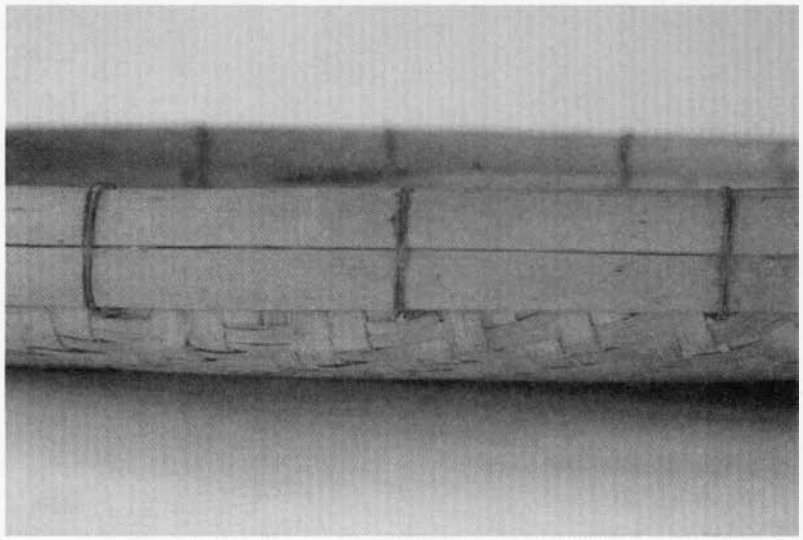
用　　途	大豆、麦、穀物をより分けるもの。 ユイでより分けた物をさらに細かく分ける 時などに使った。（P38参照）
材料素材	ホウライチク（ンジャダキ）、針金
材料寸法 mm	縦ひご（カシ）使用本数：63本×2方向 幅：8.4～10　厚さ：0.3　長さ：400～700 外皮：たて方向、ワタ：よこ方向に使用 縁竹　　本数：4本（外側、内側各2本） 幅：15　　厚さ：3　　長さ：1,900
底の編み方	2本飛び網代編み
伝承など	石川先生（新潟出身の方で県から技術指導者として 派遣）から教わった。縁竹を縛るのに現在は針金や 銅線を使用しているが、以前はヤマカズラで縛った。
略図（寸法）直径・高さ・耳・蓋の有無など）	単位：mm 570 55
備　考	編み方は74ページ参照



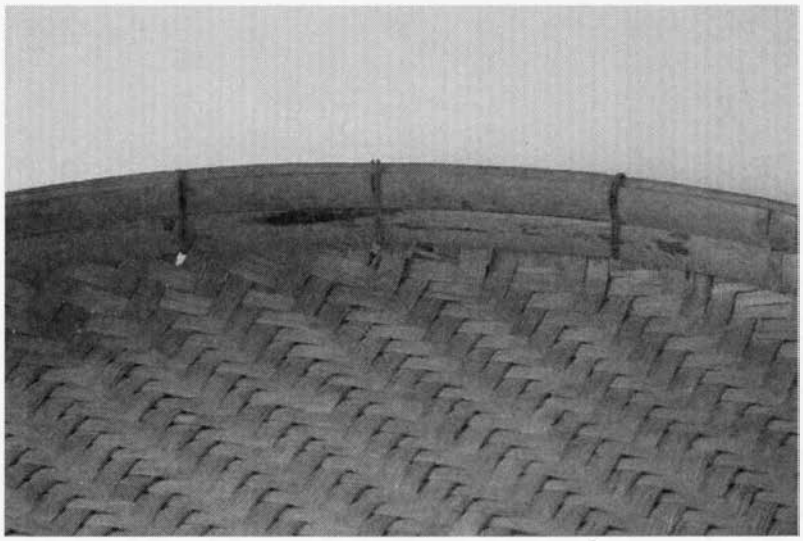
上面



底面



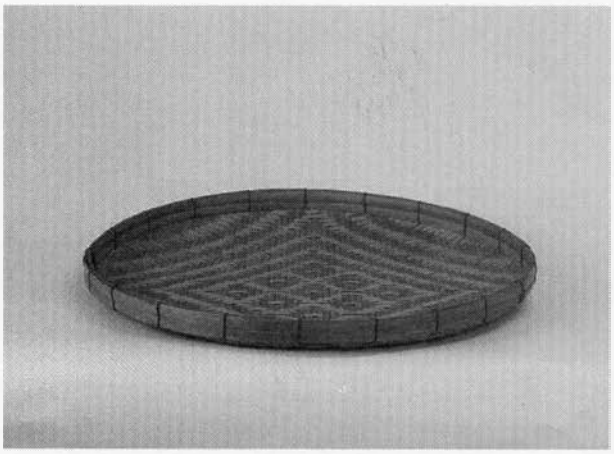
縁外側



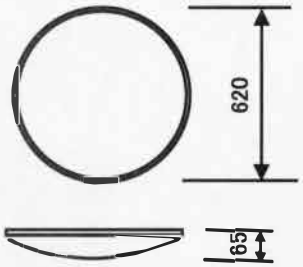
縁内側

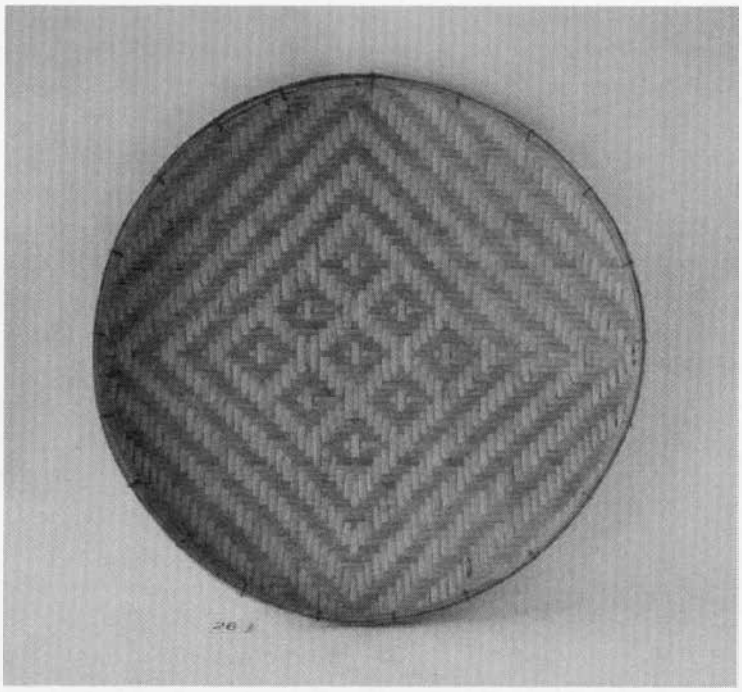
名称	ミージョーキ

収蔵品番号	2003-1-0014

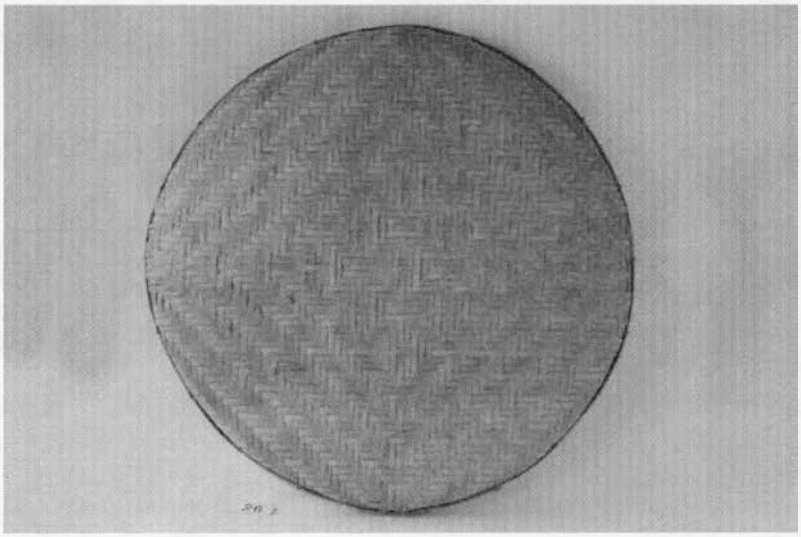


全体俯瞰

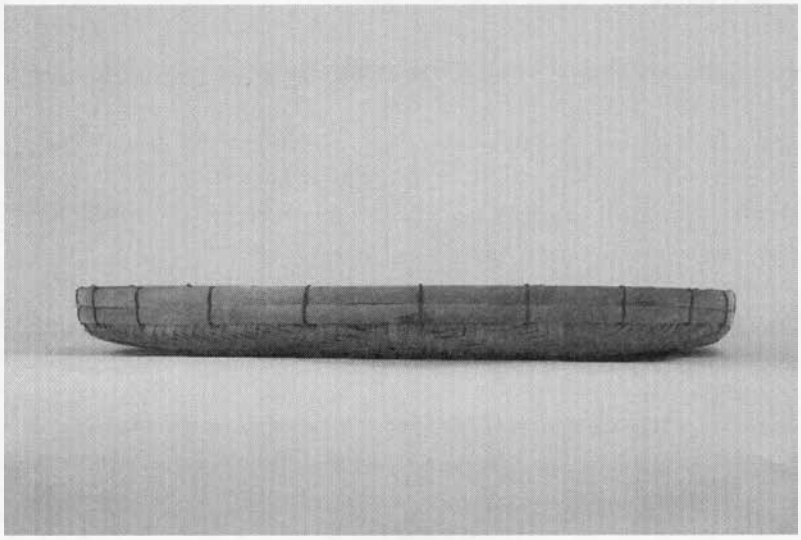
用　　途	穀物をふるい飛ばし選別する用具。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)、銅線
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:71本×2方向 幅:8.4～10 厚さ:0.3 長さ:350～830 外皮とワタ混ぜて使用し、模様を作った。 縁竹 本数:4本(外側、内側各2本) 幅:15 厚さ:3 長さ:2,050 幅:25 厚さ:3 長さ:2,050×1本
底の編み方	中央部:花ますあじろ編み(模様:3×3個) 外側部:連続ますあじろ編み
伝承など	縁竹は、9～10cm間隔で銅線で縛ってある。
略図(寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 
備　考	編み方は74ページ参照



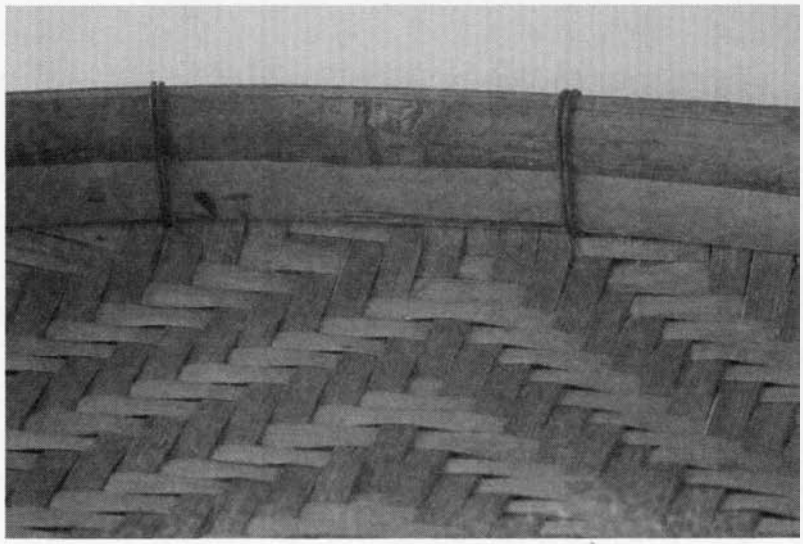
上面



底面



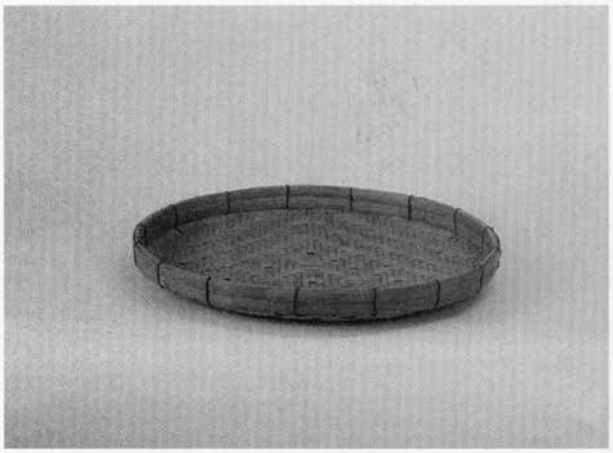
側面



縁内側

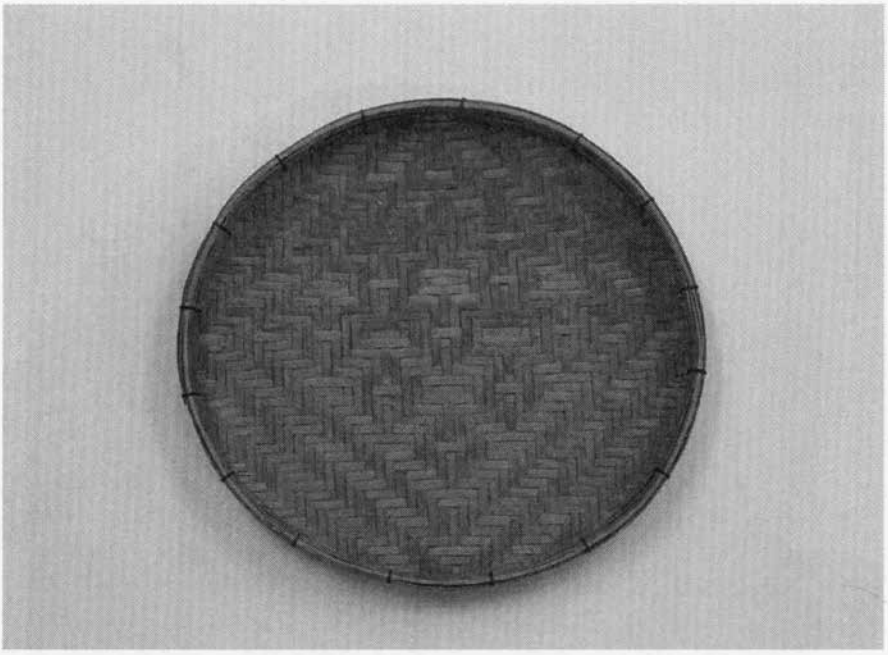
名称	ミージョーキ

収蔵品番号	2003-1-0015

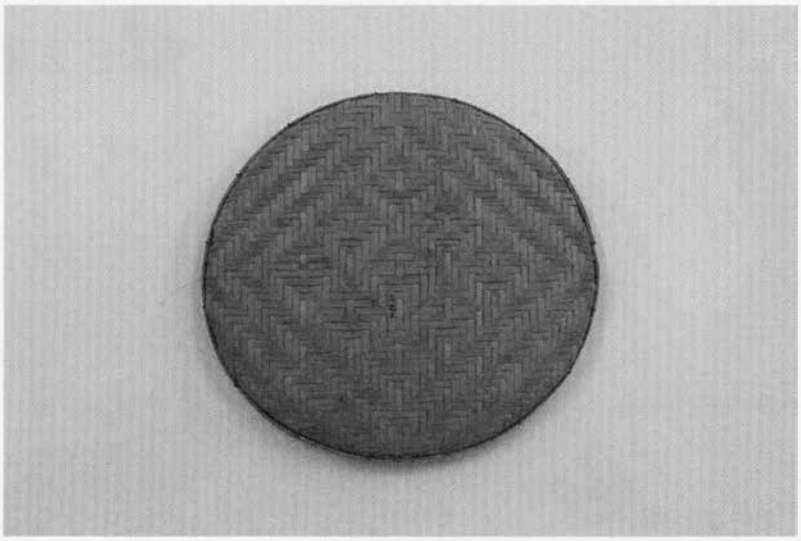


全体俯瞰

用　　途	穀物をふるい飛ばし選別する用具。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)、銅線
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:47本×2方向 幅:6.6～0.8 厚さ:0.03 長さ:300～550 外皮とワタ混ぜて使用し、模様を作った。 縁竹 幅:13　厚さ:4　長さ:1,400×4本 幅:40　厚さ:3　長さ:1,400×1本
底の編み方	中央部:花ますあじろ編み(模様:3×3個) 外側部:連続ますあじろ編み
伝承など	縁竹は、7～8cm間隔で銅線で縛ってある。
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 410 55
備　考	編み方は74ページ参照

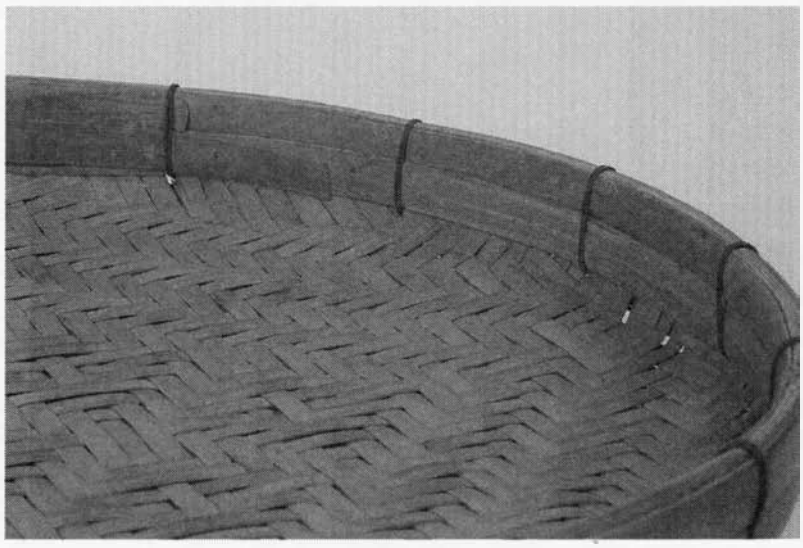


上面



底面

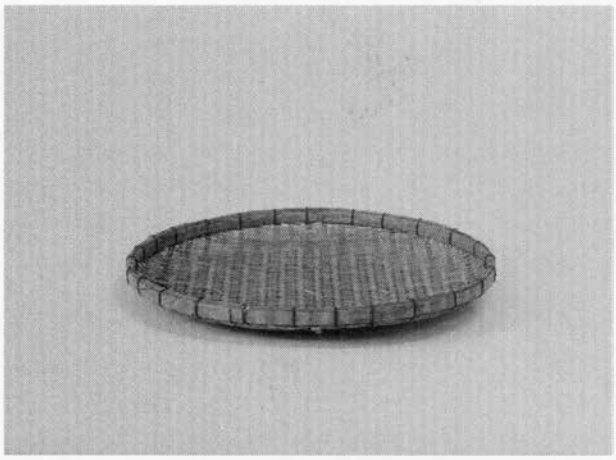
縁外側



縁内側

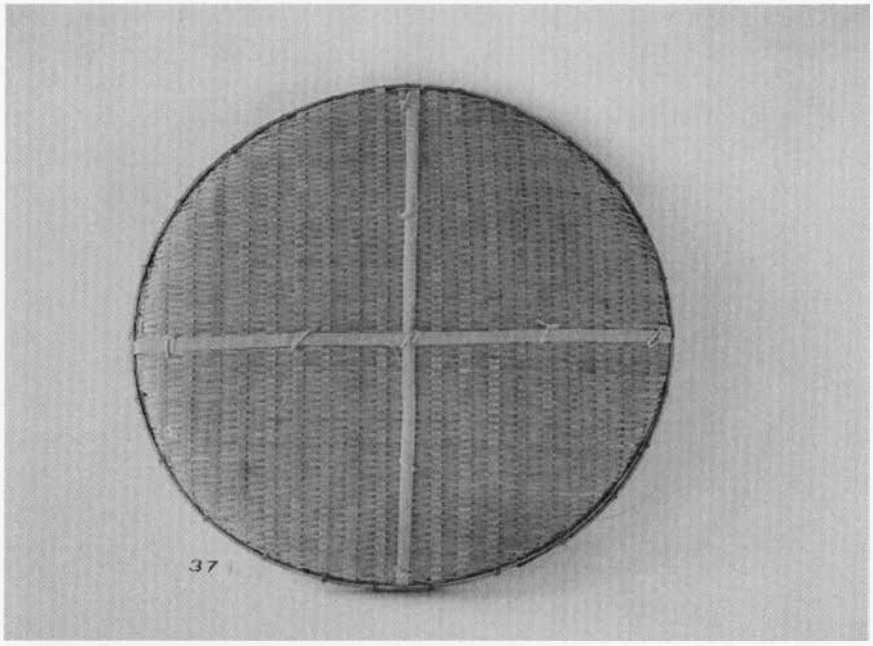
名称	ユイの仲間

収蔵品番号	2003-1-0016

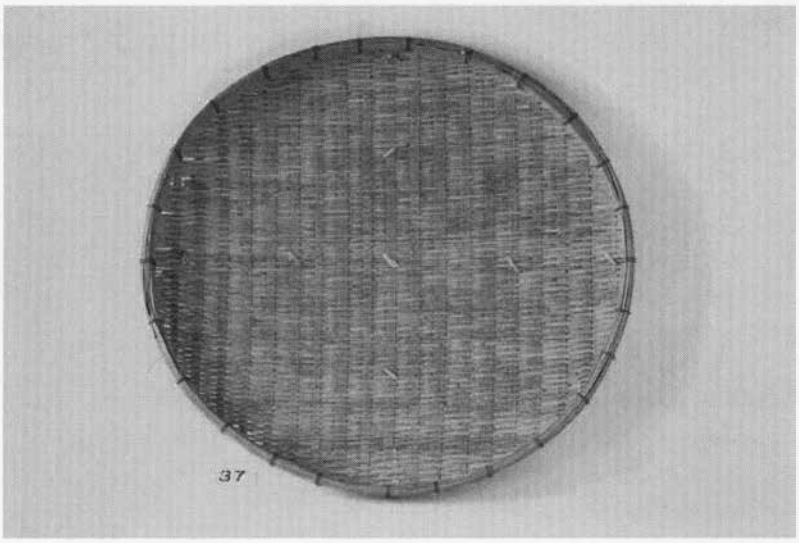


全体俯瞰

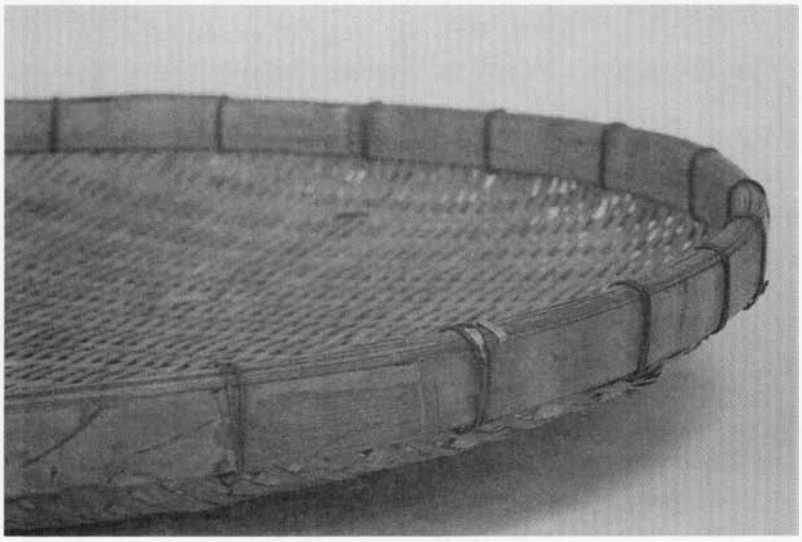
用　　途	穀物のふるい分けに使用
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)、銅線
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) ワタを使用、本数:20本 幅:8～10　厚さ:0.3　長さ:300～550 巻ひご(ヌチ) 外皮を使用 幅:2.5～3　厚さ:0.3　長さ:竹1本分 縁竹　幅:20×2本　長さ:1,600 押さえ竹(ささら割)　幅:5
底の編み方	ざる目編み
伝承など	興志平さん自身で考案し、製作したので呼び名はわからない。 縁竹は、4.5～6.5cm間隔で銅線で縛ってある。
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 477 45
備　考	



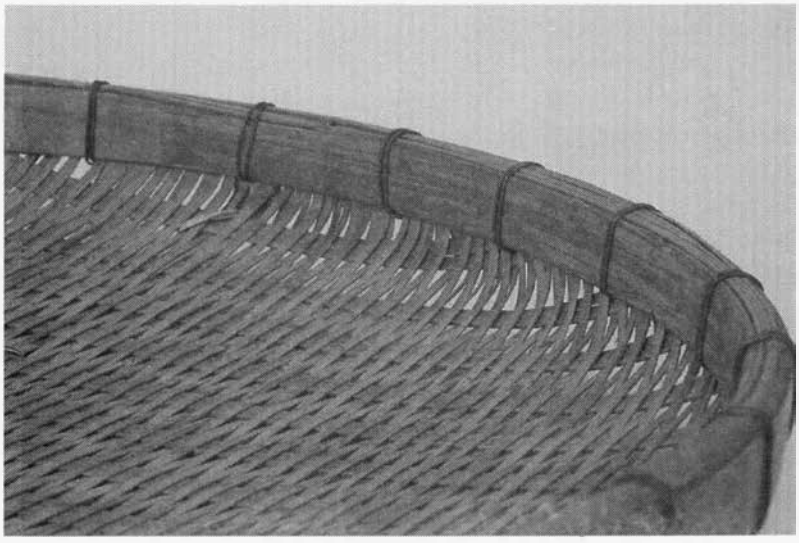
底面



上面



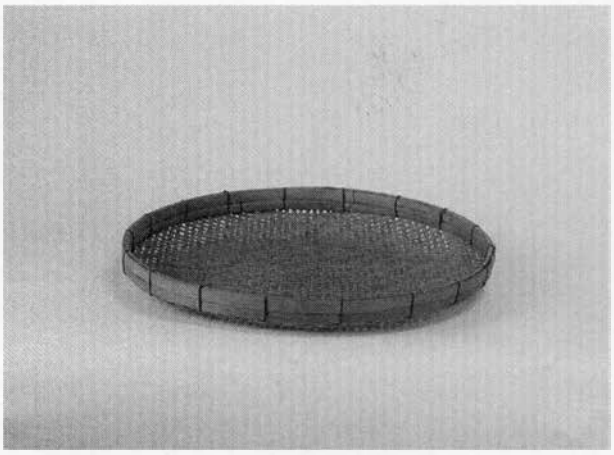
縁外側



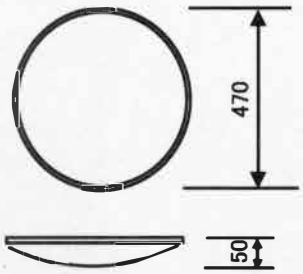
縁内側

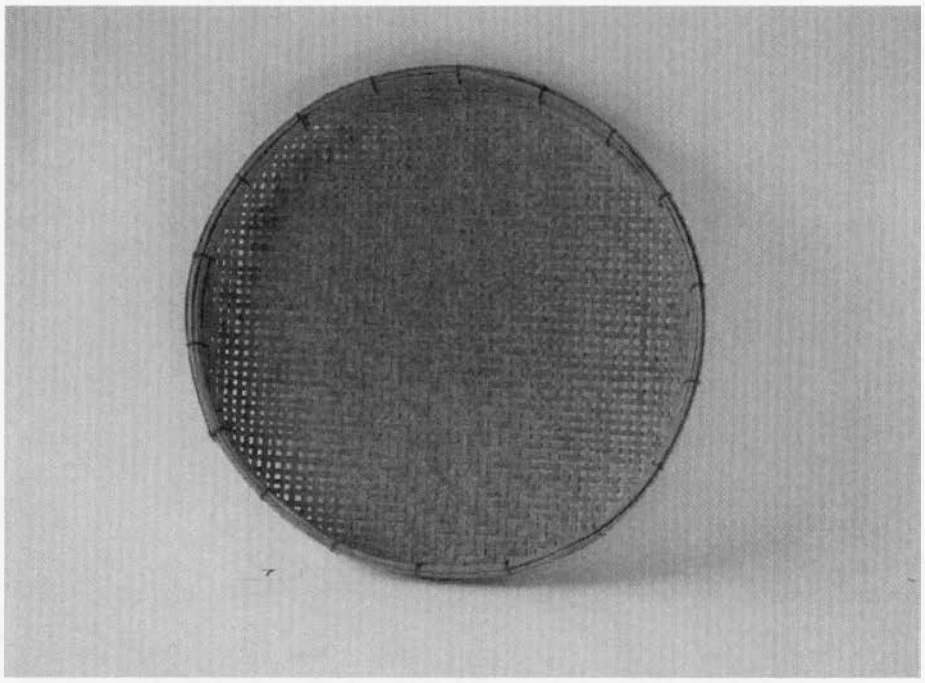
名称	ユイ

収蔵品番号	2003-1-0017

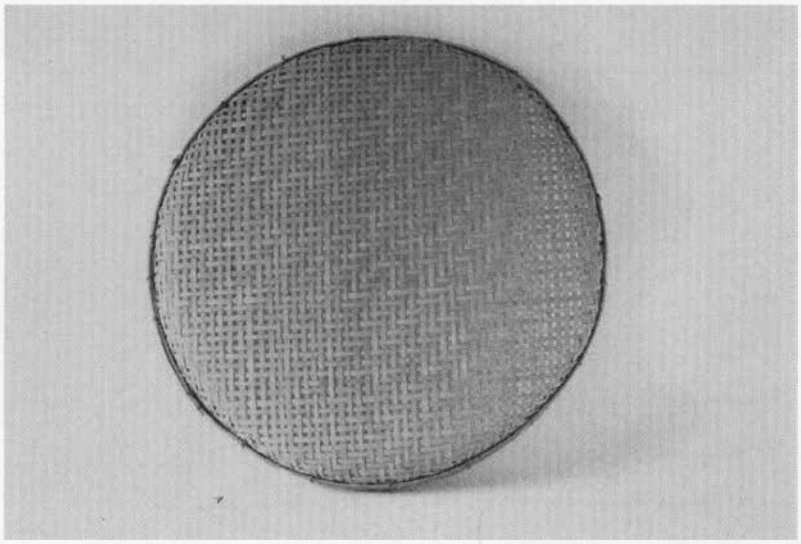


全体俯瞰

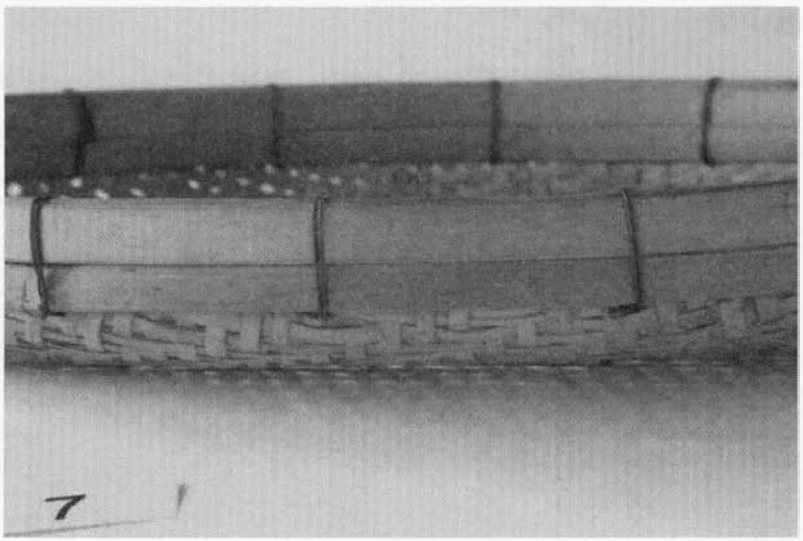
用　　途	穀物をふるって小さいクズや土などを下に落として選別する。ユイでの作業の後に、ミージョーキを使う。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)、銅線
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 外皮を裏向きに使用 幅:5～6　厚さ:0.3　長さ:300～600 28列×2×2+2=114本 縁竹　幅:15×2本、11×2本 長さ:1,600 押さえ竹　厚さ:4
底の編み方	二つ目とびあじろ編み 隙間3．3mm～5mm
伝承など	與志平さん自身で考案し、製作したので呼び名はわからない。 縁竹は、4.5～6.5cm間隔で銅線で縛ってある。
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 
備　考	編み方は74ページ参照



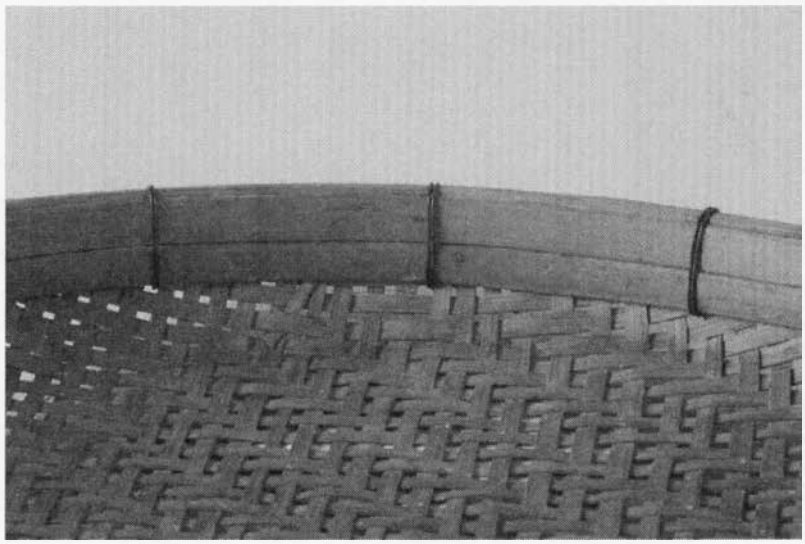
上面



底面



縁外側



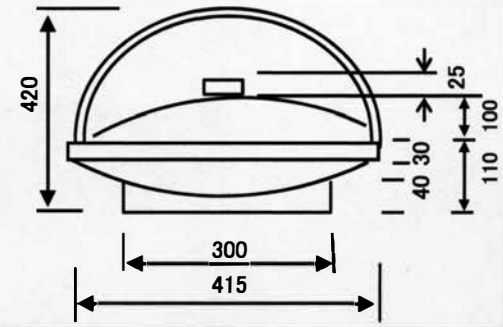
縁内側

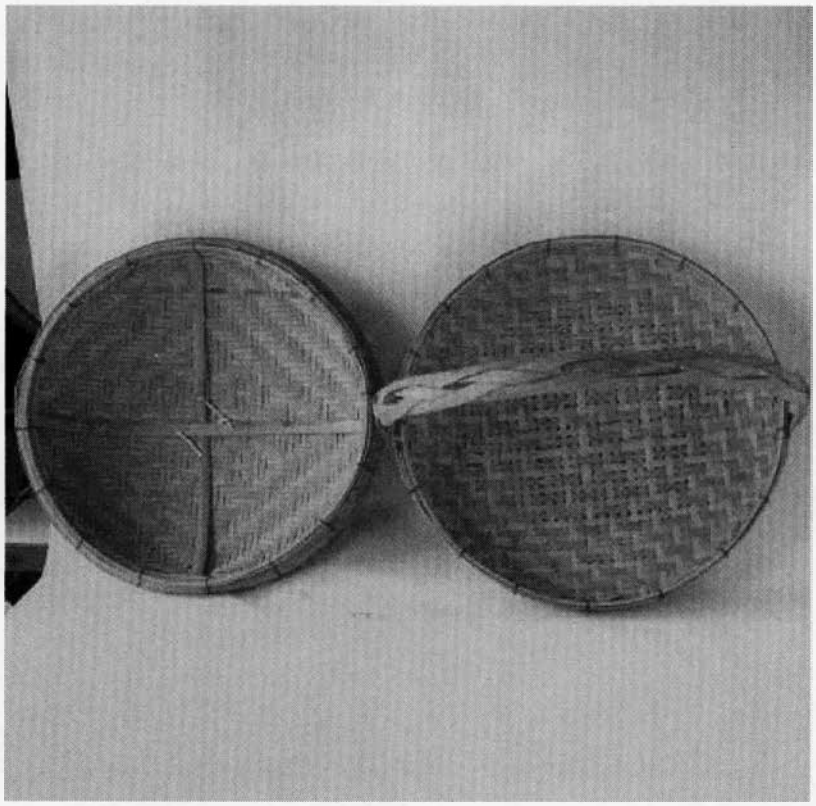
名称	サギジョーキ

収蔵品番号	2003-1-0018

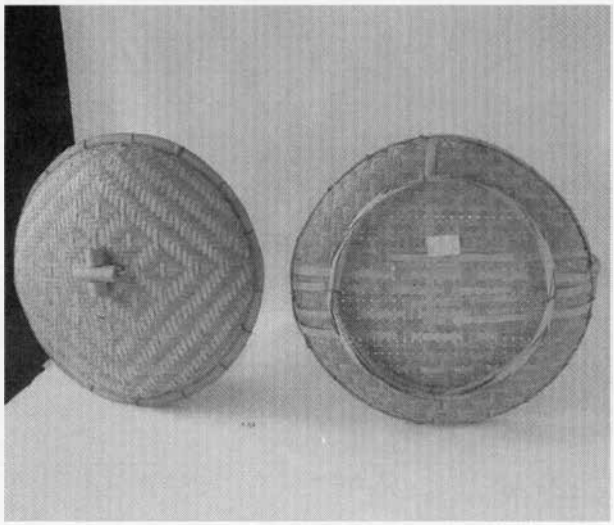
全体俯瞰

製作年月日	1973年頃
用　　途	食べ物を入れて軒先などの涼しい場所に提げておいた。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm 現物が無いので寸法取り出来ない	縦ひご(カシ) 幅:7～8　厚さ:0.8　長さ:300～600 縁竹　幅:15 長さ:1500 厚さ:2～3
底の編み方	花ますあじろ編み
伝承など	編み目模様を石川先生から教わった。手提げの4本編みが難しい。蓋を丁度良い大きさに作るのが難しい。
略図 (寸法)直径・高さ・耳・蓋の有無など)	単位:mm
備　考	編み方は74ページ参照

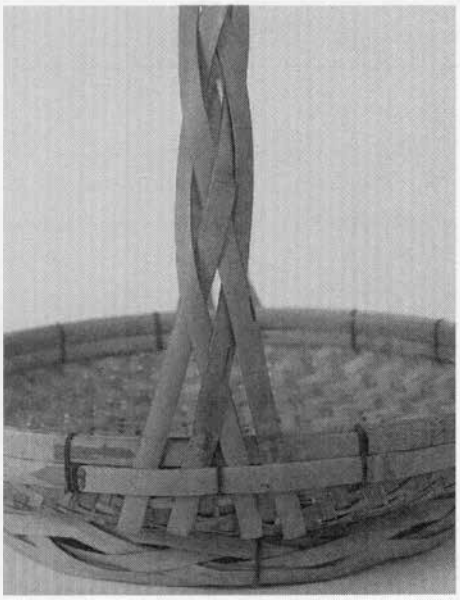




蓋を開けた内側

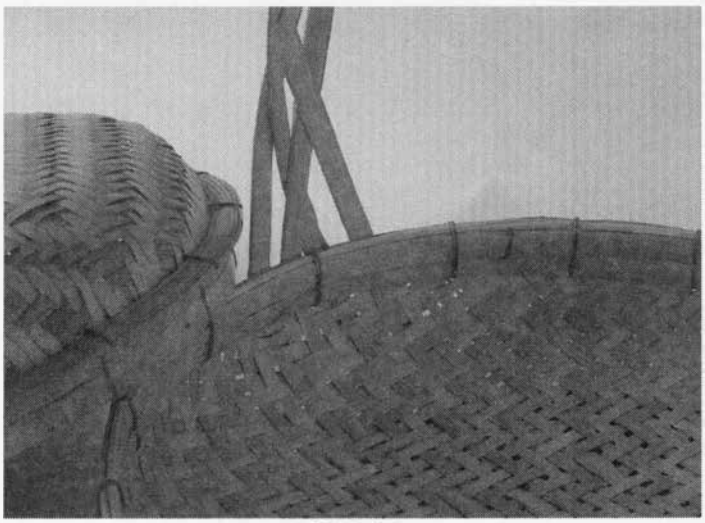


蓋を開けた外側



取手の編み方

縁外側



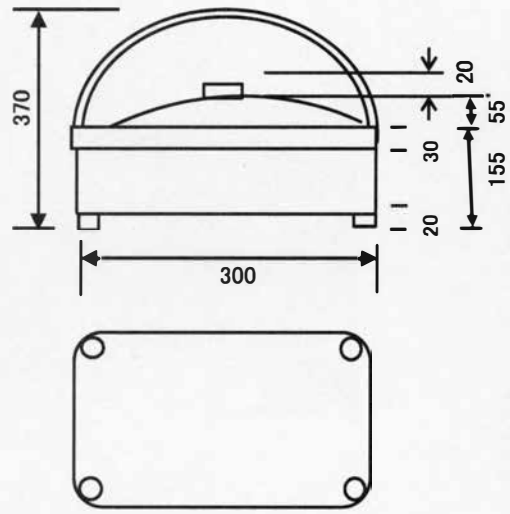
縁内側

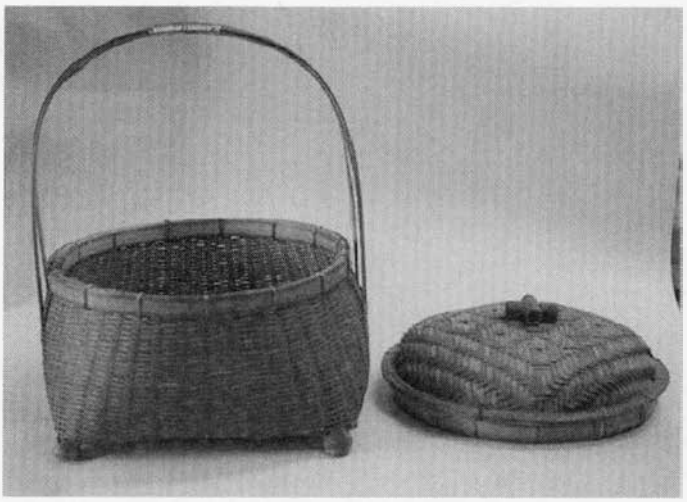
名称	蓋付きかご

収蔵品番号	2003-1-0019

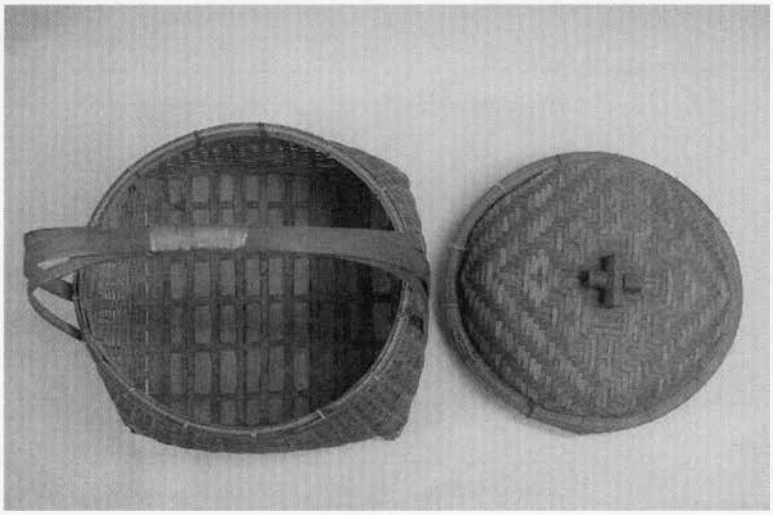
全体俯瞰

製作年月日		1953年頃
用　　途		食べ物の保存容器として使用していた。
材料素材		ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	蓋部	縦ひご(カシ):外皮とワタを使用
		幅:5～5.7　厚さ:0.3　長さ:200～440
		29列×2＋1本=59本
	了部	縦ひご(カシ):外皮
		幅:7.5～8.5 長さ:650　貫指し幅:15～16長さ250
		巻ひご(ヌチ)　幅:22～25
底の編み方		花ますあじろ編み(外皮が表側になるように)
伝承など		17歳くらいの時、石川先生に教わった。昭和5～6年頃から上地でも作られるようになった。ヌチは二本で編む。1953年5月26日ペルリ提督来琉100周年記念展覧会一等賞受賞作品(賞状あり)
略図	寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など)	単位:mm
備考		



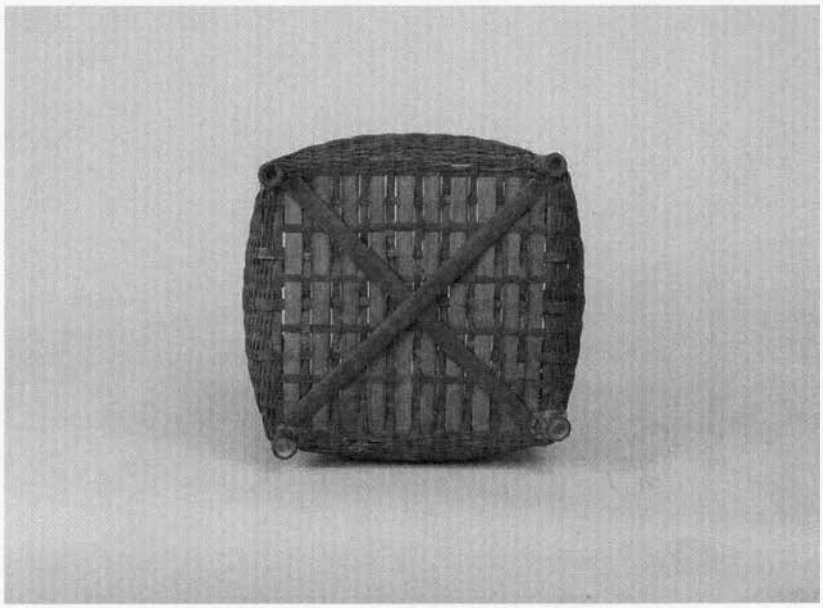


蓋を開けた状態



上面

側面



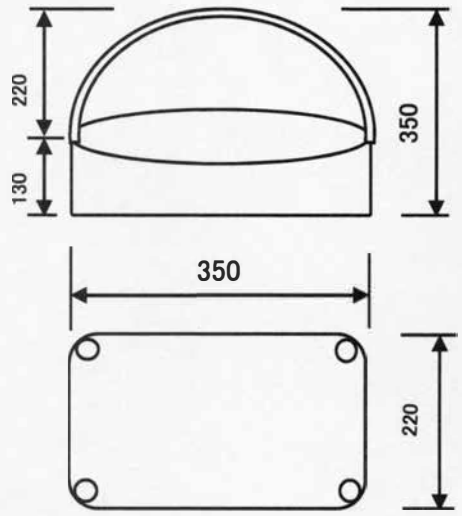
底面

名称	手提げかご

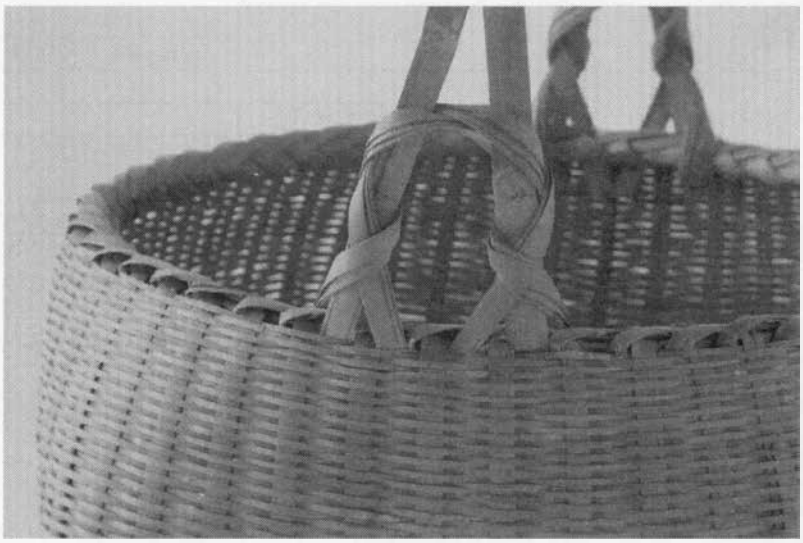
収蔵品番号	2003-1-0020

全体俯瞰

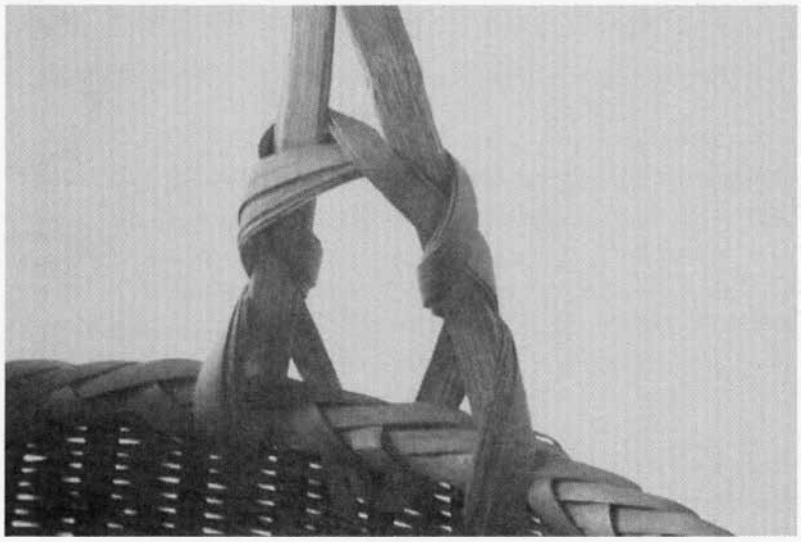
製作年月日	1953年頃
用　　途	食べ物を入れたり、花器として使用した。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:11本＋15本 幅:8～8.7　厚さ:0.3　長さ:680 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2　厚さ:0.3　長さ:竹1本分 差し込み竹(ワタ) 幅:13～16 長さ:320 10本 その他 取手材 足材有り
底の編み方	筏編み
伝承など	石川先生から教わった。
略図（寸法（直径・高さ・耳・蓋の有無など））	単位:mm
備考	



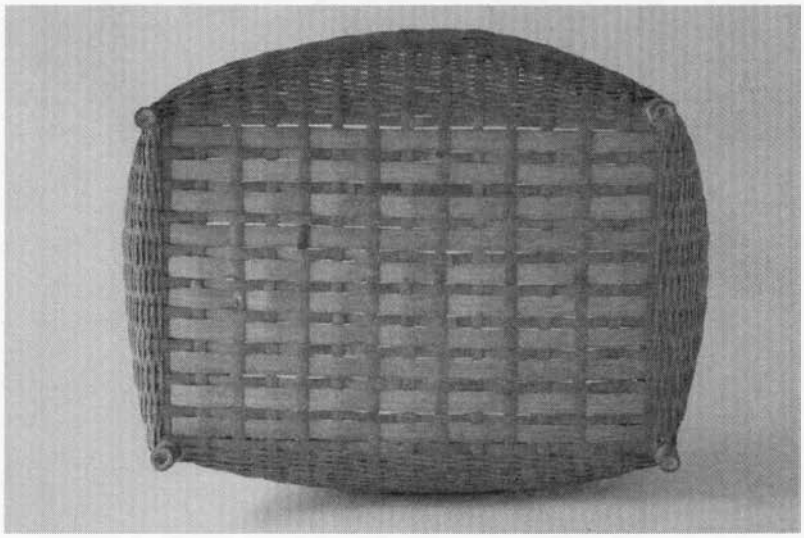
手提げ部分



縁外側



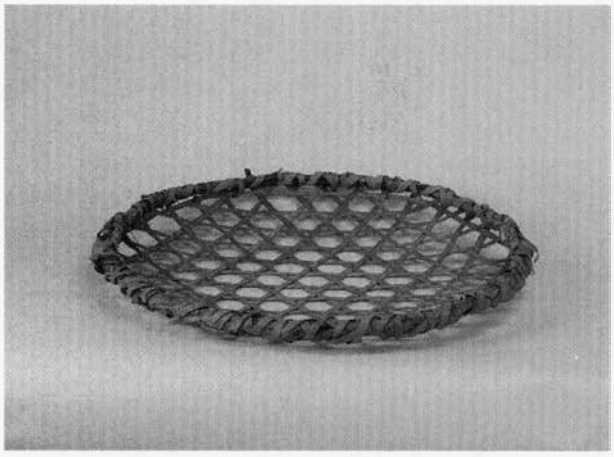
縁内側



底面

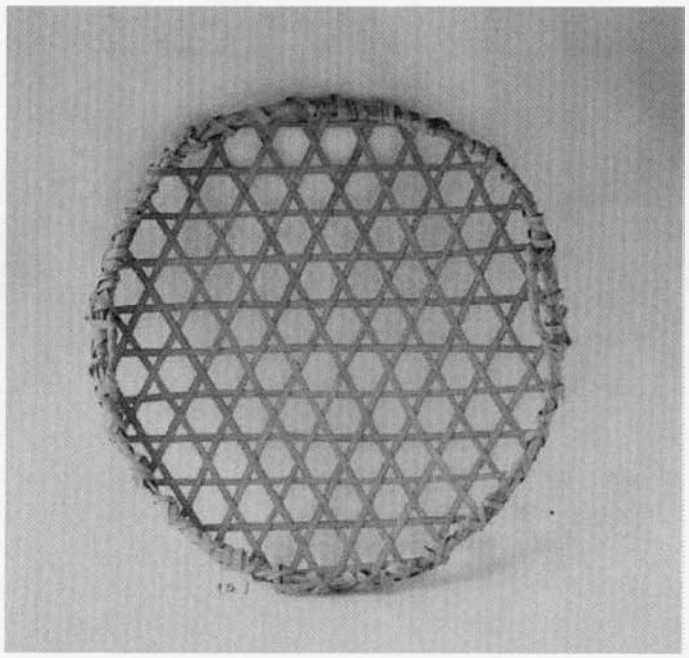
名称	ムチウブサー

収蔵品番号	2003-1-0021

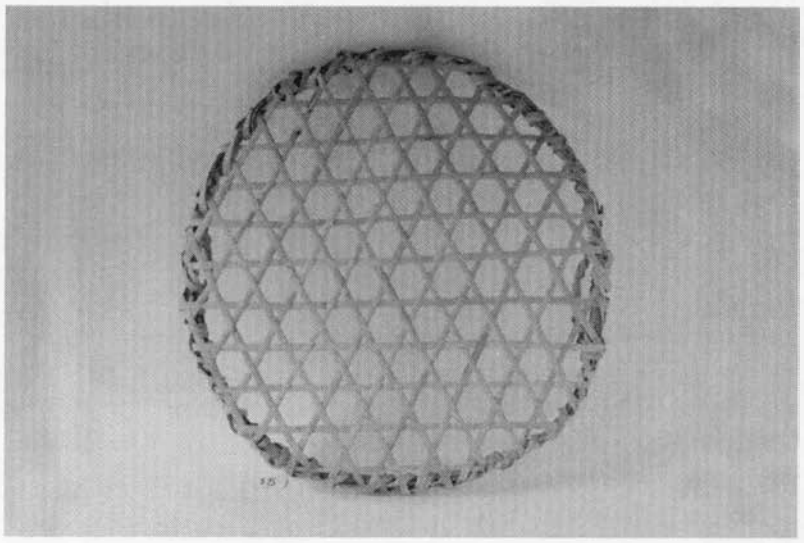


全体俯瞰

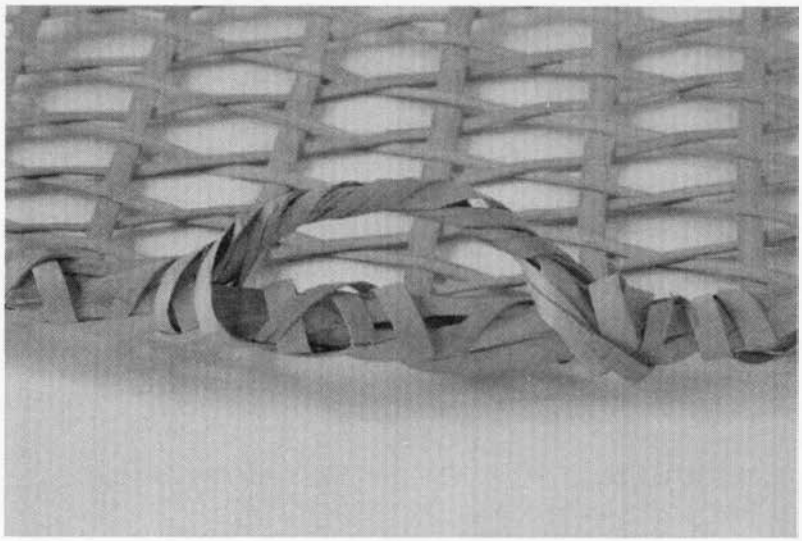
製作年月日	
用　　途	シンメーナービで、ウニムーチーを蒸す時に使用する。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:36本(12本×3列) 幅:9～10　厚さ:0.5　長さ:500～800 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:9～11　厚さ:0.2　長さ:竹1本分 外縁の芯材:ツルグミの徒長枝
底の編み方	六つ目編み
伝承など	
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 570 60
備　考	編み方は82ページ参照



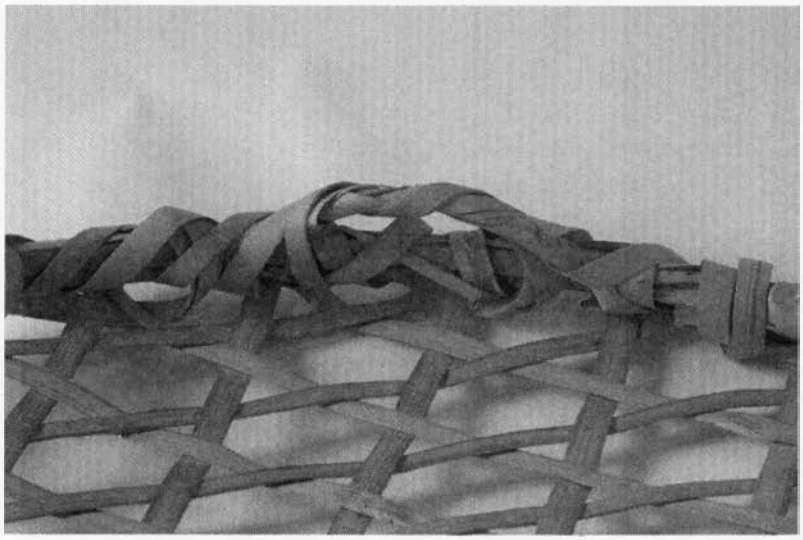
上面



底面



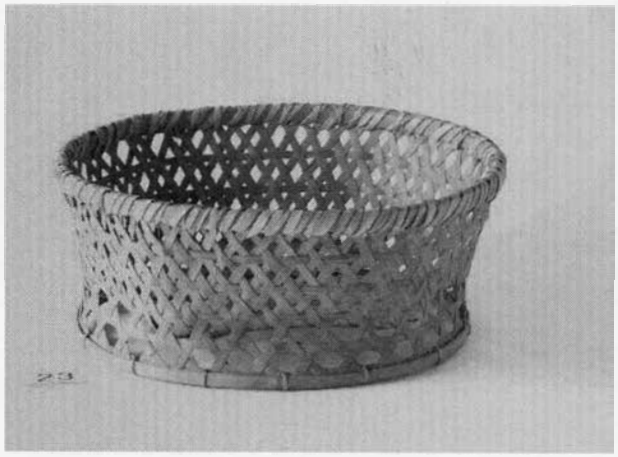
縁外側



縁内側

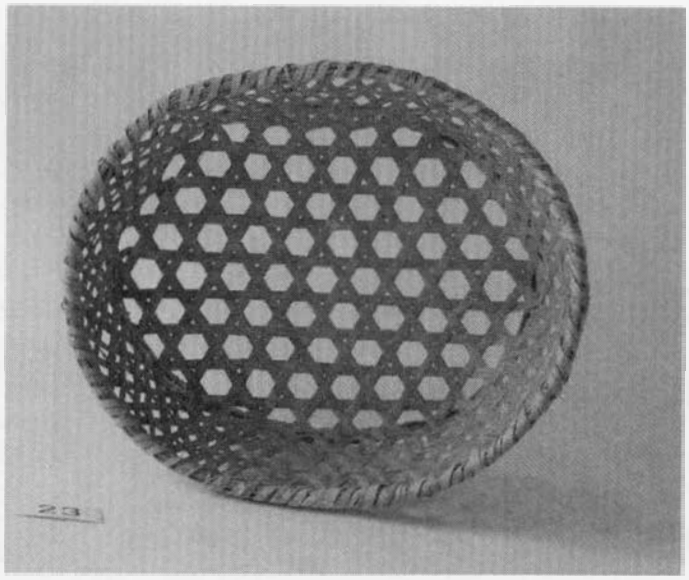
名称	茶碗かご

収蔵品番号	2003-1-0022

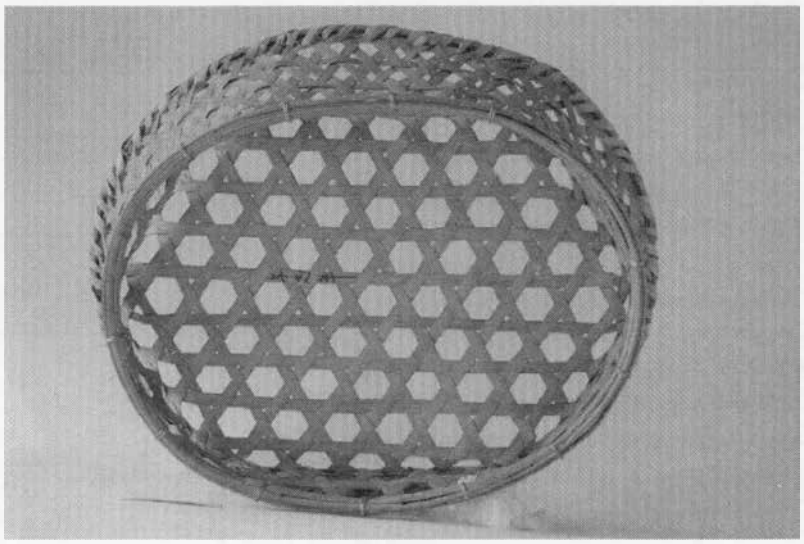


全体俯瞰

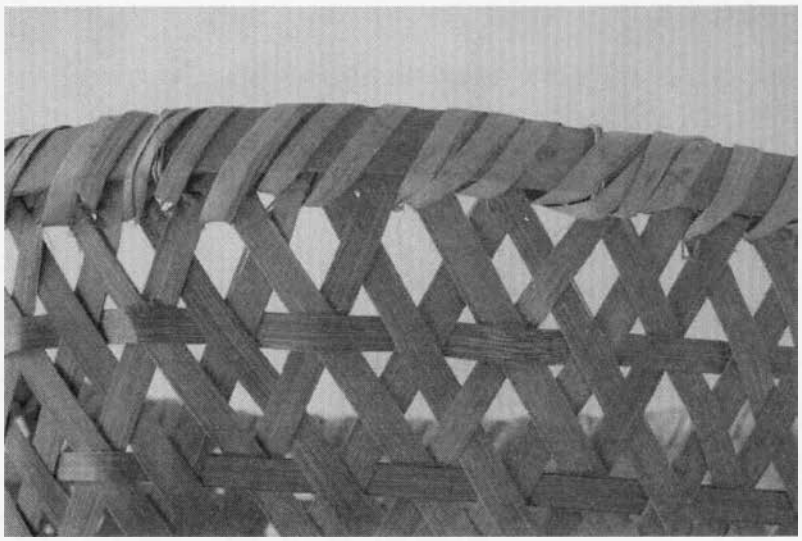
製作年月日	
用　　途	茶碗や湯のみ入れ。また、果物入れとして使用した。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ)　使用本数:30本(10本×3列) 幅:6.8～7.3　厚さ:0.3　長さ:500 巻ひご(ヌチ)　本数:適量 幅:9～11　厚さ:0.8　長さ:竹1本分
底の編み方	六つ目編み
伝承など	下の足部は後から差し込む
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 315 220 280 138 30 280
備　考	編み方は82ページ参照



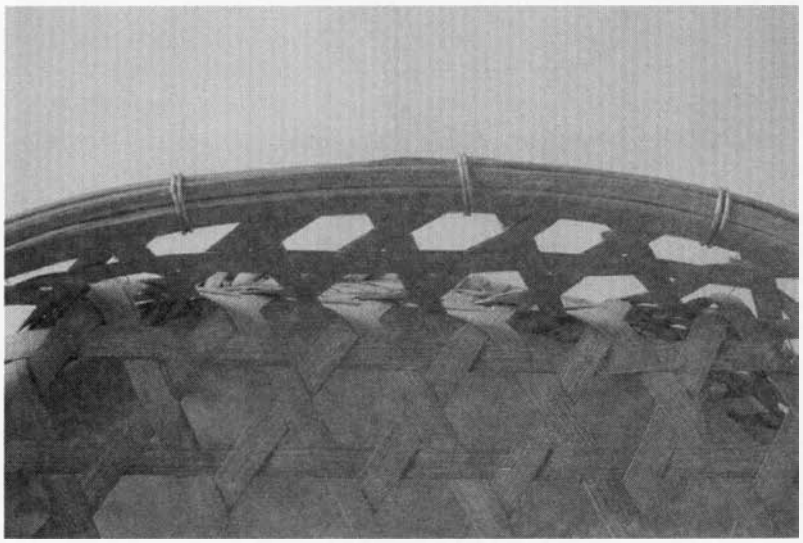
上面



底面



縁外側



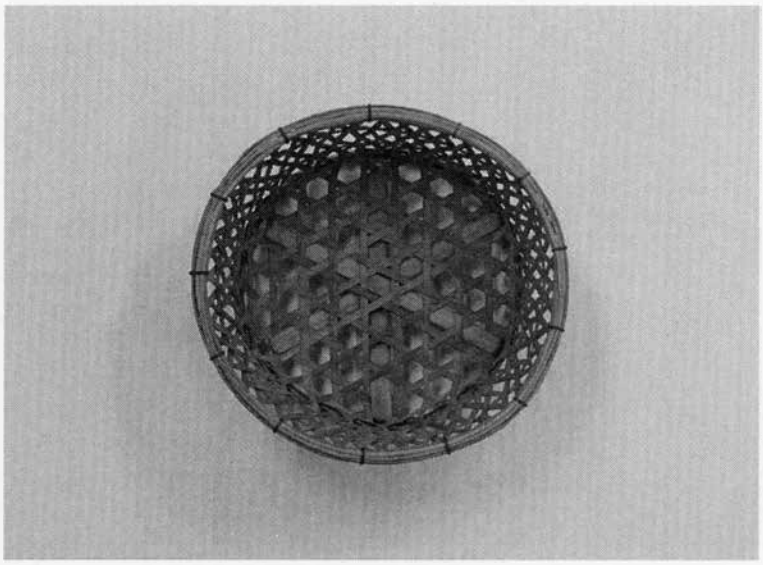
底面縁内側

名称	茶碗かご

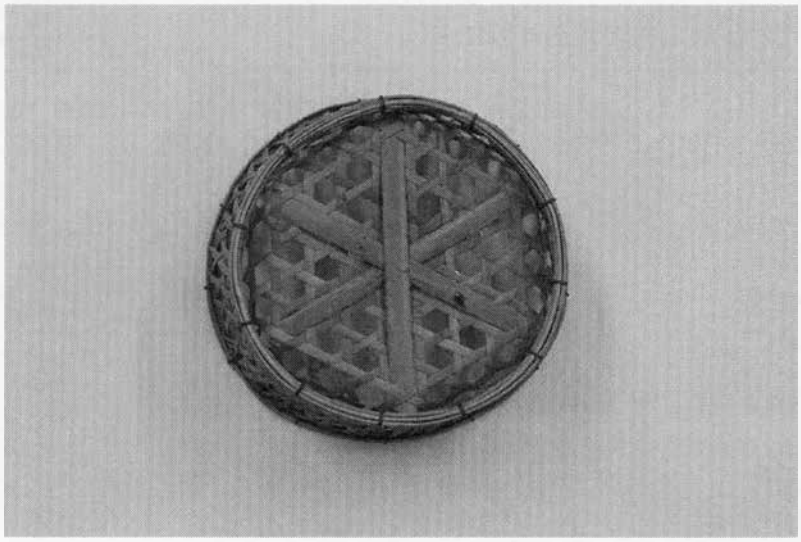
収蔵品番号	2003-1-0023

全体俯瞰

製作年月日	
用　　途	茶碗や果物入れとして使用した。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:27本(9列×3本) 幅:5.5～6　厚さ:0.3　長さ:550 補強用ひご　本数:3本 幅:14～16　厚さ:0.3　長さ:200
底の編み方	六つ目編み　補強材入り
伝承など	下部の足のところは後から差して作る
略図（寸法）直径・高さ・耳・蓋の有無など）	単位:mm 260 225 120 120 15 225
備　考	編み方は82ページ参照

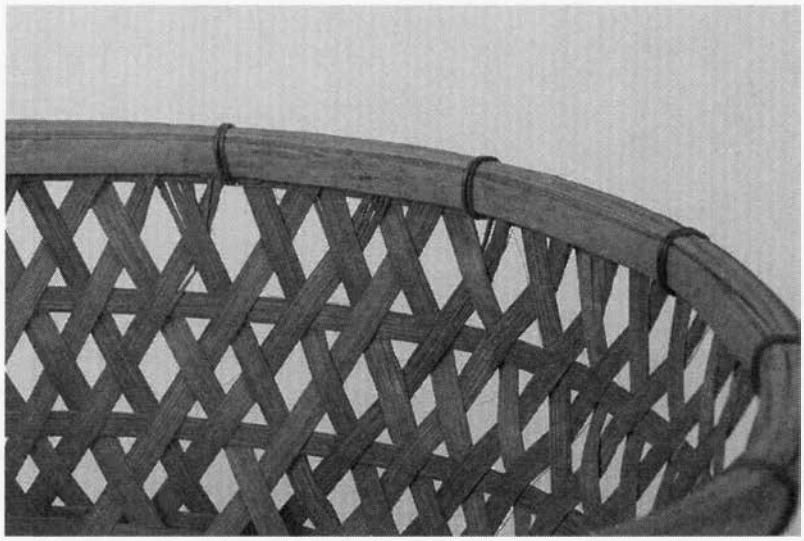


上面



底面

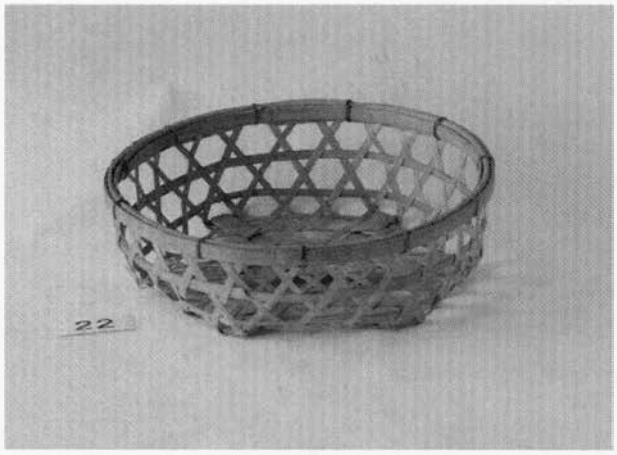
縁外側



縁内側

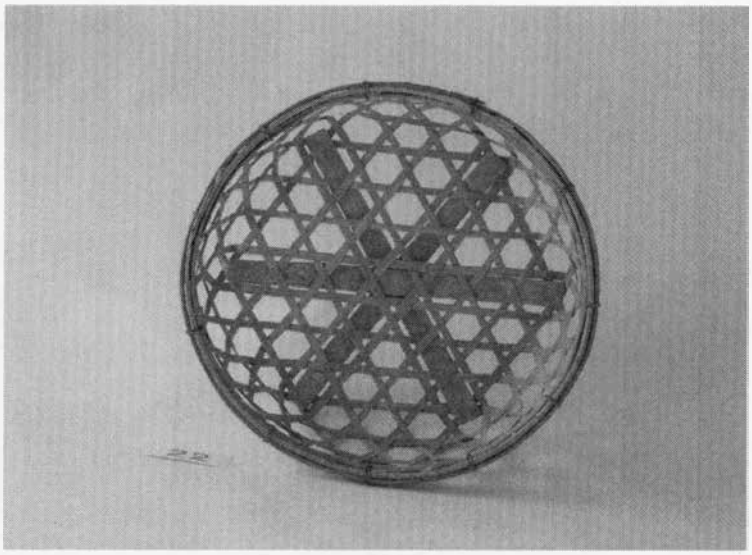
名称	かご（六つ目編み指導用のサンプル）

収蔵品番号	2003-1-0024

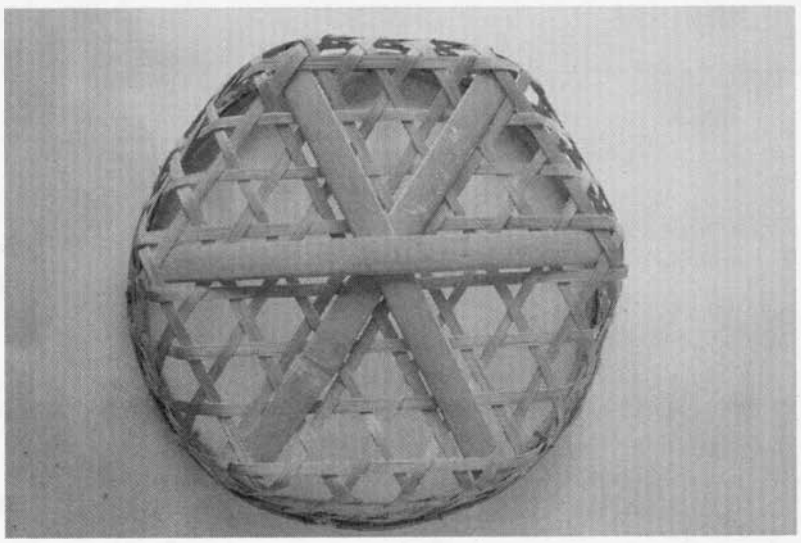


全体俯瞰

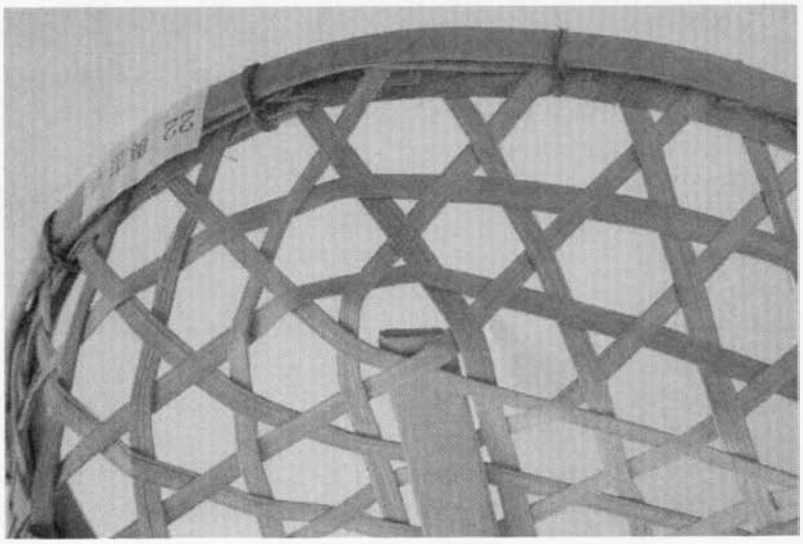
製作年月日	
用　　途	小学校などで子どもたちにバーキ作りを教える時に、かごのサンプルとして作った。底補強材をそのまま残した。
材料素材	ホウライチク（ンジャダキ）
材料寸法 mm	縦ひご（カシ） 幅：0.45～0.6　厚さ：0.3 長さ：45 底補強材　　本数：3本 幅：1.5～1.6 厚さ：0.2　長さ：20.5
底の編み方	六つ目編み
伝承など	
略図（寸法（直径・高さ・耳・蓋の有無など））	単位：mm 250 75 180 200
備　考	編み方は82ページ参照



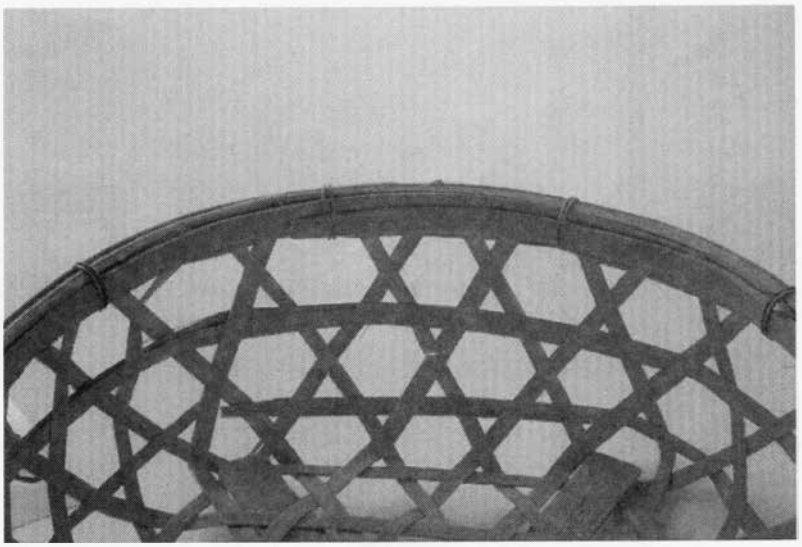
上面



底面



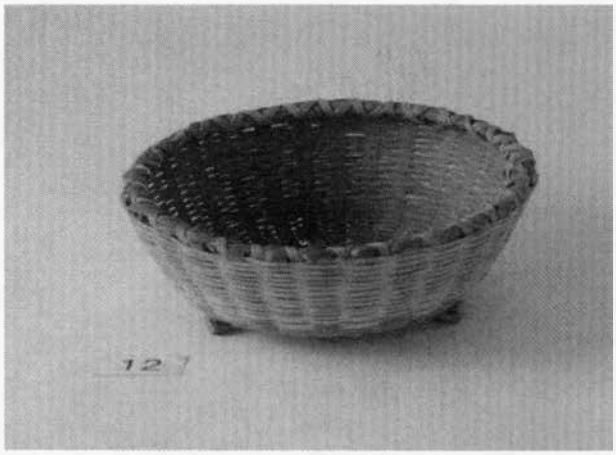
縁外側



縁内側

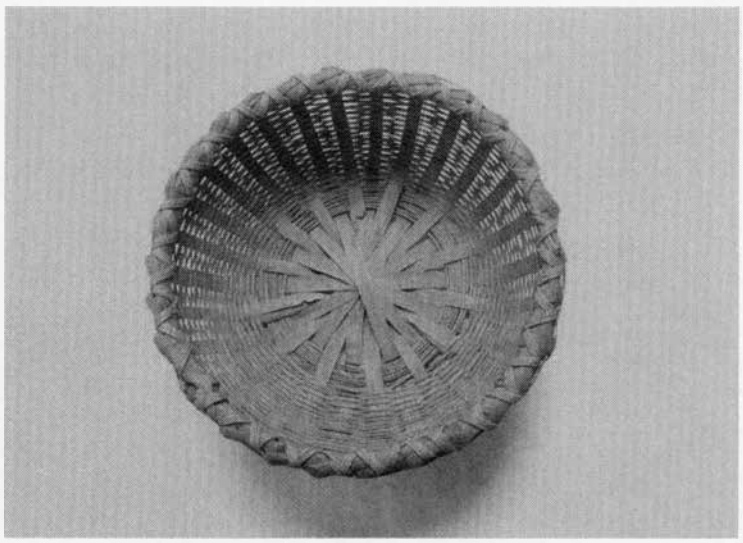
名称	果物かご

収蔵品番号	2003-1-0025

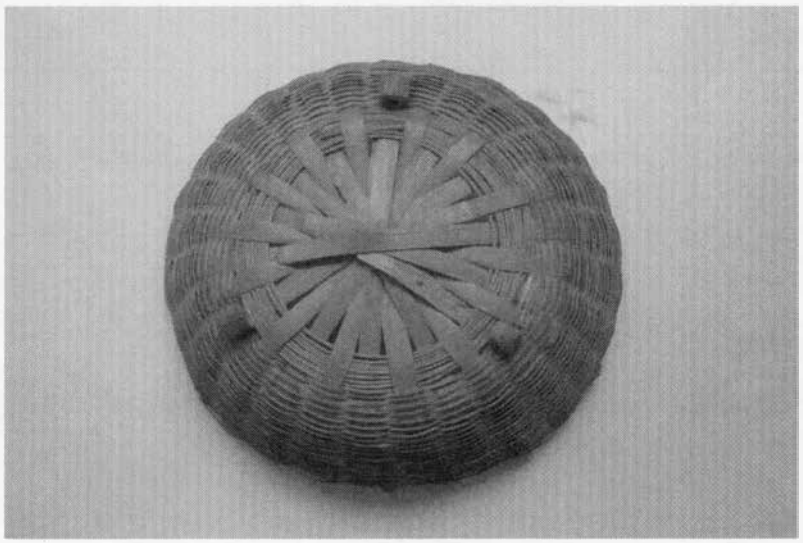


全体俯瞰

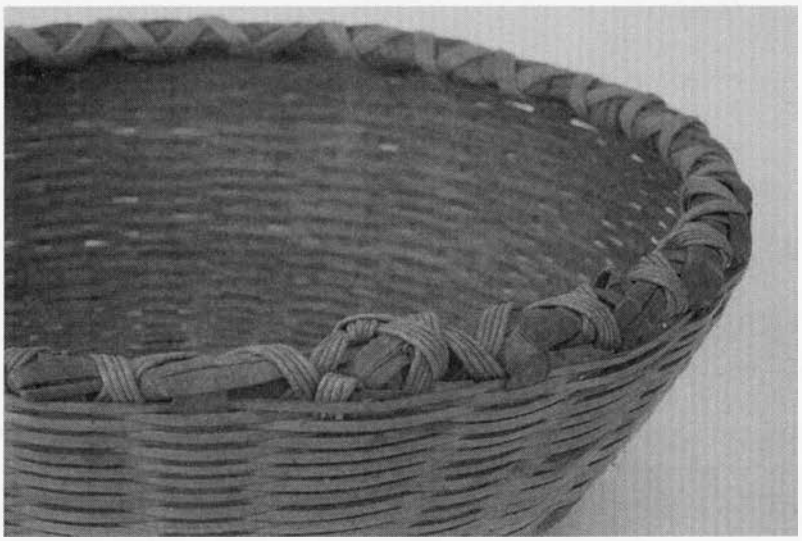
製作年月日	1953年頃
用　　途	みかんなどを入れる。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:14本 幅:9　厚さ:0.3　長さ:500 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2.0～2.3　厚さ:0.3　長さ:竹1本分
底の編み方	菊底編み 底の中心から10巻くらいはヌチを立てて巻き、同じ道を通る。11巻からざる目編みで次第に立ち上げていく。
略図 寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など)	単位:mm 230 85 160 竹の節を使って3カ所に 足を付けた。
備　考	



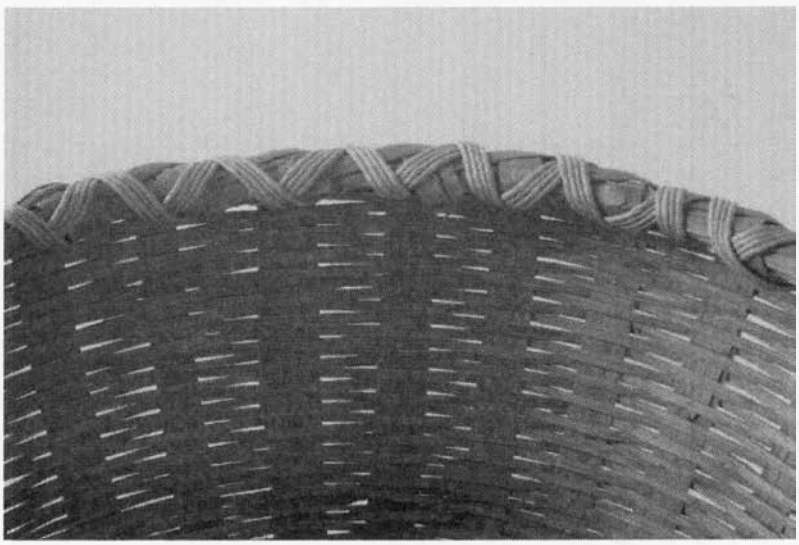
上面



底面



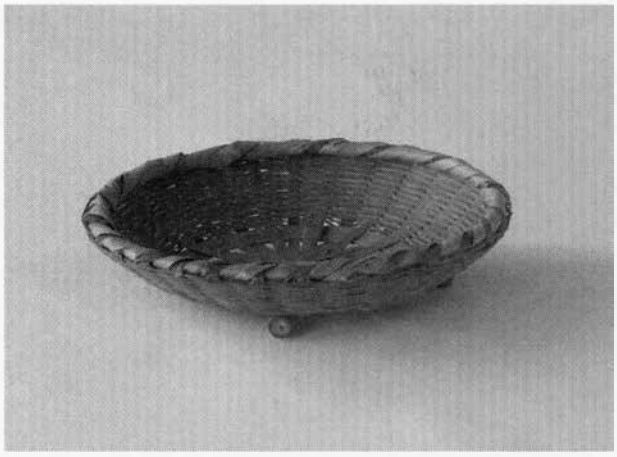
縁外側



縁内側

名称	果物かご

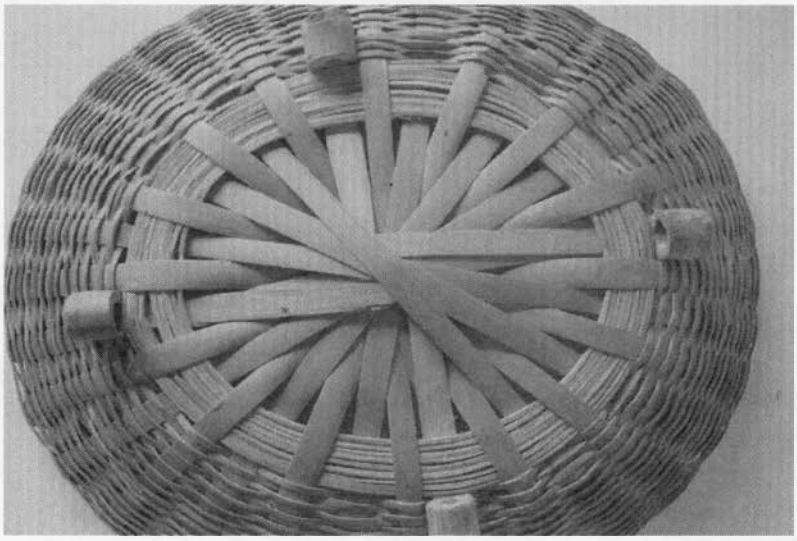
収蔵品番号	2003-1-0026



全体俯瞰

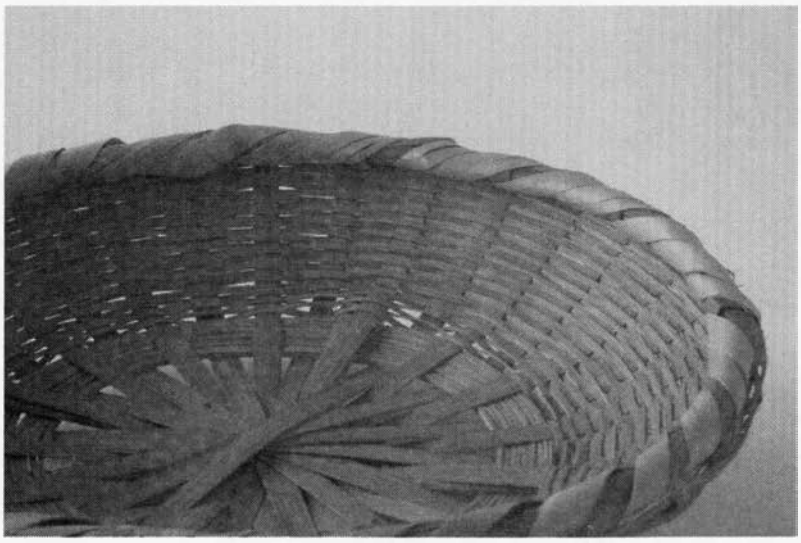
製作年月日	
用　　途	果物を入れる。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:16本 幅:7～9　厚さ:0.3　長さ:500 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2.2～2.5　厚さ:0.3　長さ:竹1本分
底の編み方	菊底編み 底の真ん中から9巻は巻ひごを立てて同じ道を通し、10巻目からざる目編みで編む。
略図（寸法（直径・高さ・耳蓋の有無など））	単位:mm 265 235 60 160 135 底4カ所に足を付けてある。
備　考	

上面



底面

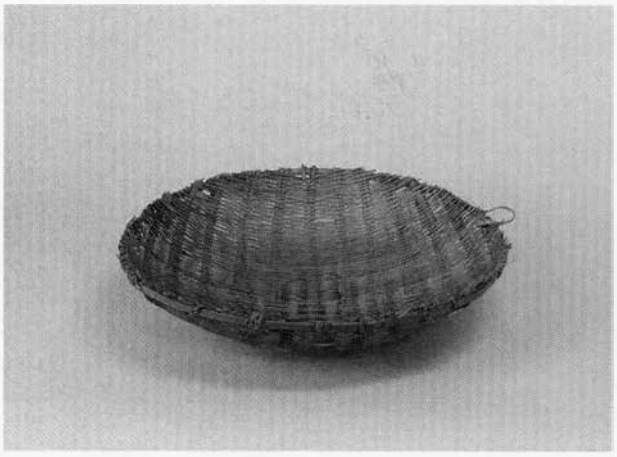
縁外側



縁内側

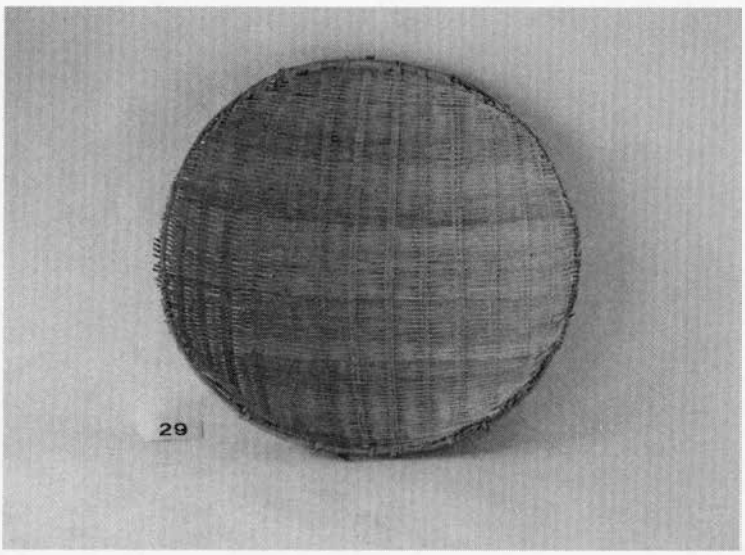
名称	ソーキ

収蔵品番号	2003-1-0027

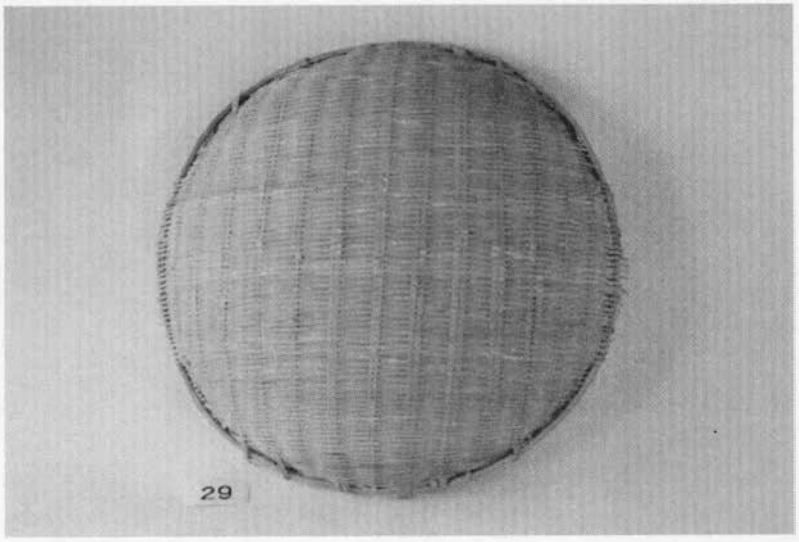


全体俯瞰

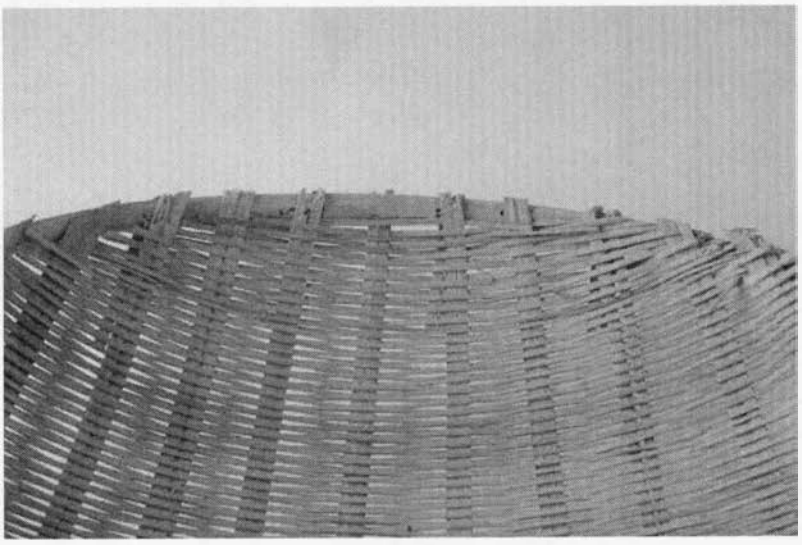
製作年月日	
用　　途	洗った野菜の水切り等に使用。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:22本(11列×2本) 幅:5～7　厚さ:0.3　長さ:350～530 巻ひご(ヌチ) 本数:適量(外皮を軽く削ってある。) 幅:1.7～2　厚さ:0.8　長さ:竹1本分
底の編み方	ざる目編み
伝承など	未完成であるが、製作過程を知る事ができる。
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 340 345 85
備　考	



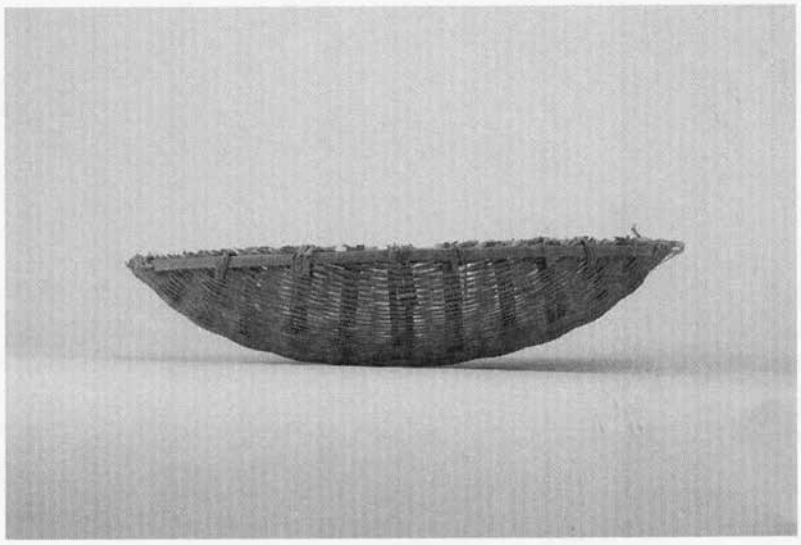
上面



底面



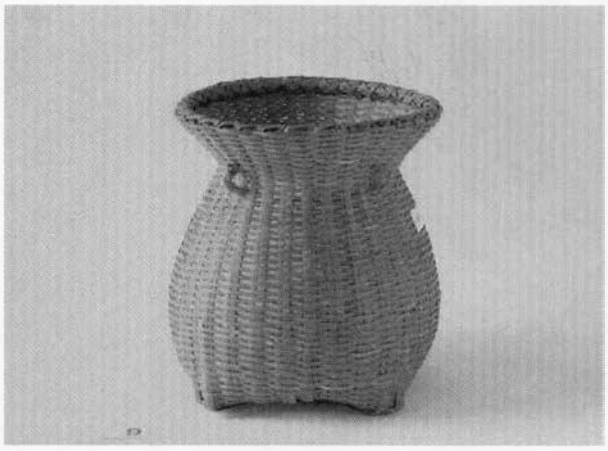
縁内側



縁外側

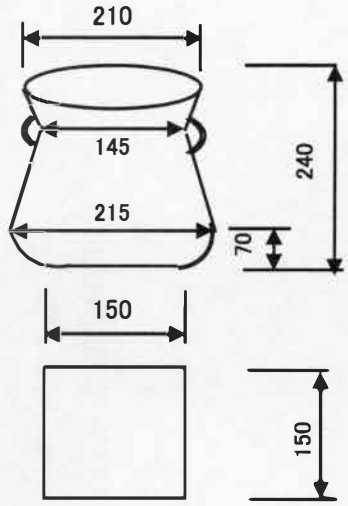
名称	カジラーティール

収蔵品番号	2003-1-0028

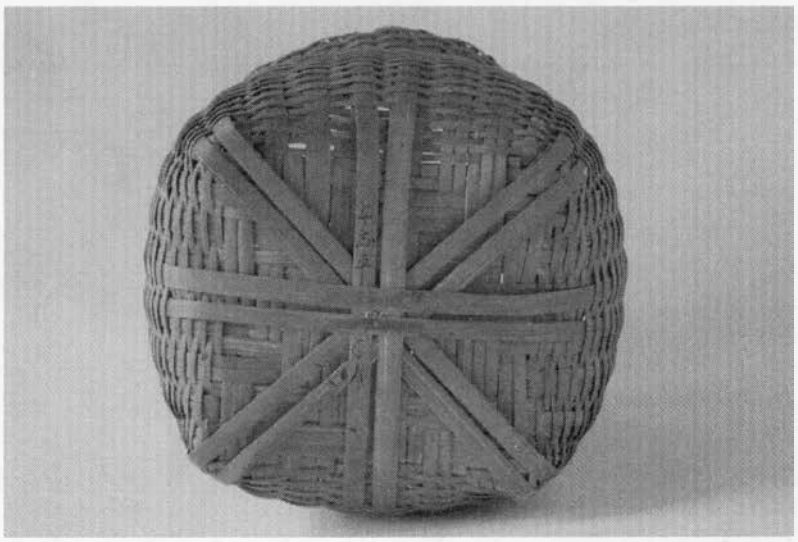


全体俯瞰

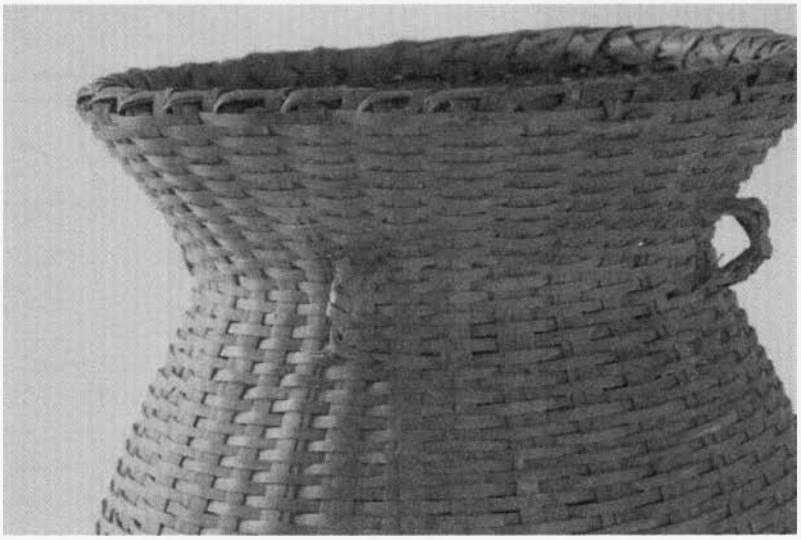
製作年月日	
用　　途	ヤマモモの実を入れるのに使用した。 耳に紐を通し、腰に結んで使用した。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:32本(8列×2本×2方向) 幅:5～6　厚さ:0.3　長さ:850 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2.2～3.5 厚さ:0.8　長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み(補強材4方向に入る)
伝承など	山モモをとる時に使った。 山内、諸見里、上地で使用された。 4カ所に耳有り。
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm
備　考	編み方は87ページ参照



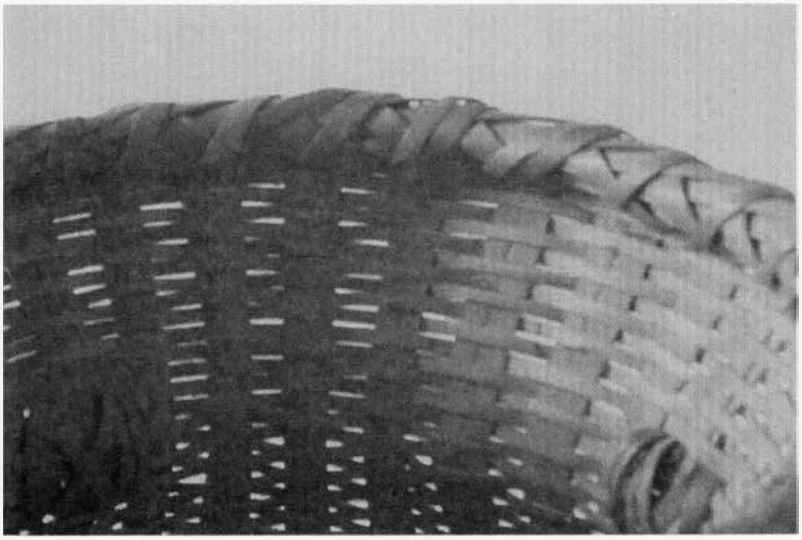
首部分



底面



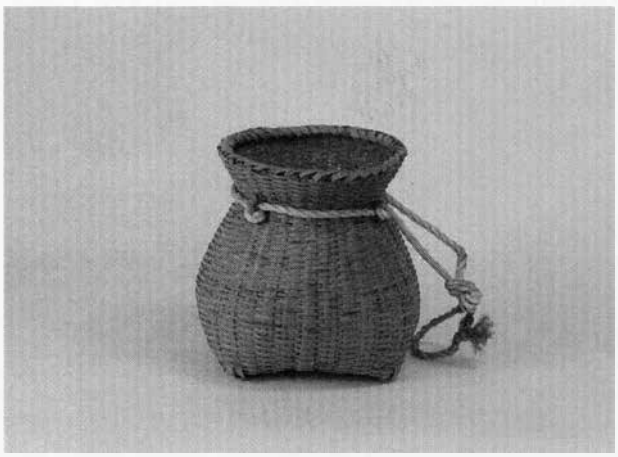
縁外側



縁内側

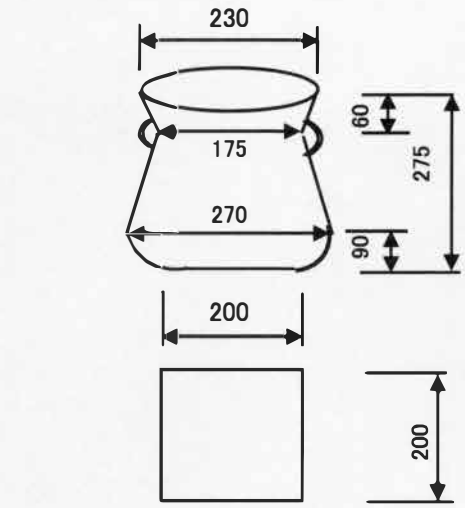
名称	カジラーティール

収蔵品番号	2003-1-0029

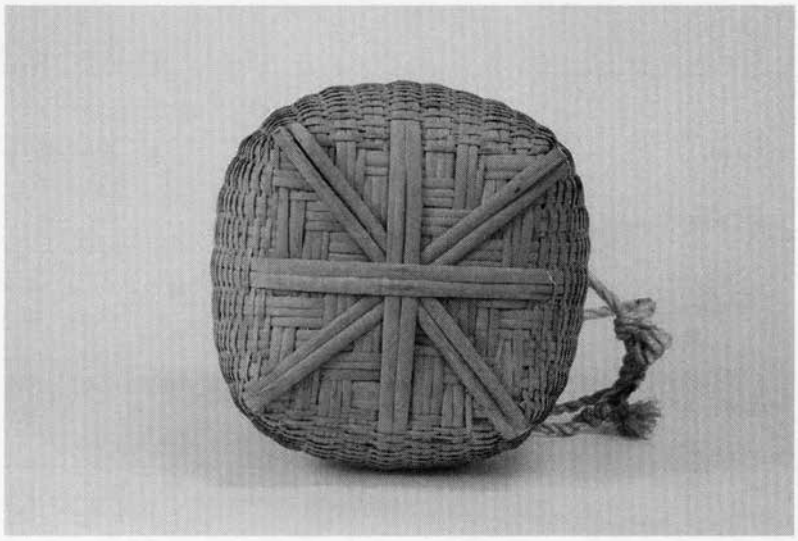


全体俯瞰

製作年月日	不明
用　　途	ヤマモモの実を入れるのに使用した。 耳に紐を通し、腰に結んで使用した。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:36本(9列×2本×2方向) 幅:7～9　厚さ:0.3　長さ:1,100 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:3～4　厚さ:0.3　長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み(補強材4方向に入る)
伝承など	山モモをとる時に使った。 山内、諸見里、上地で使用された。 4カ所に耳有り。
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm
備　考	編み方は87ページ参照

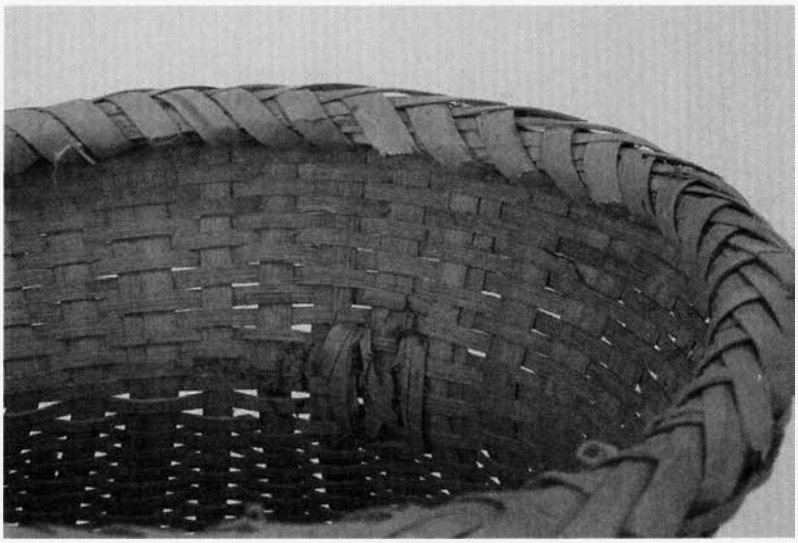


首部分



底面

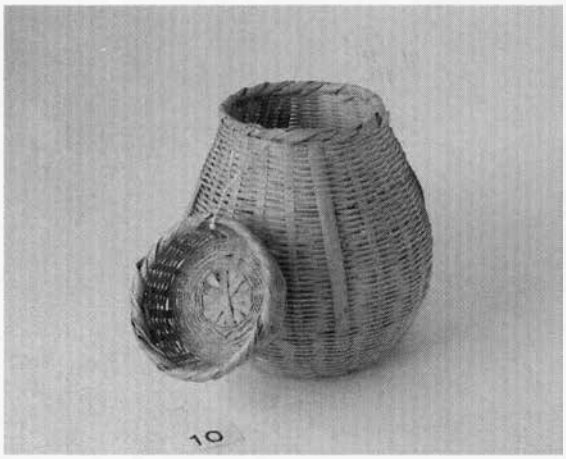
縁外側



縁内側

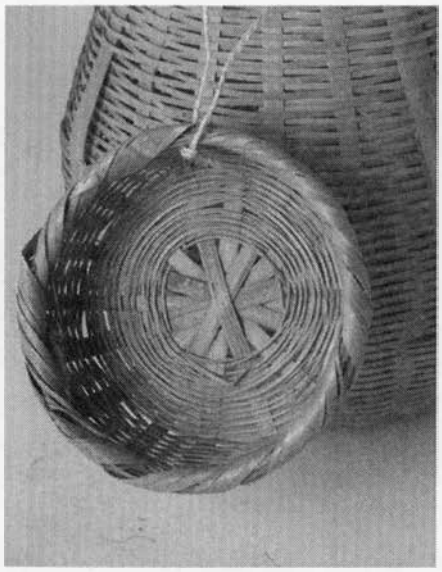
名称	つりかご

収蔵品番号	2003-1-0030

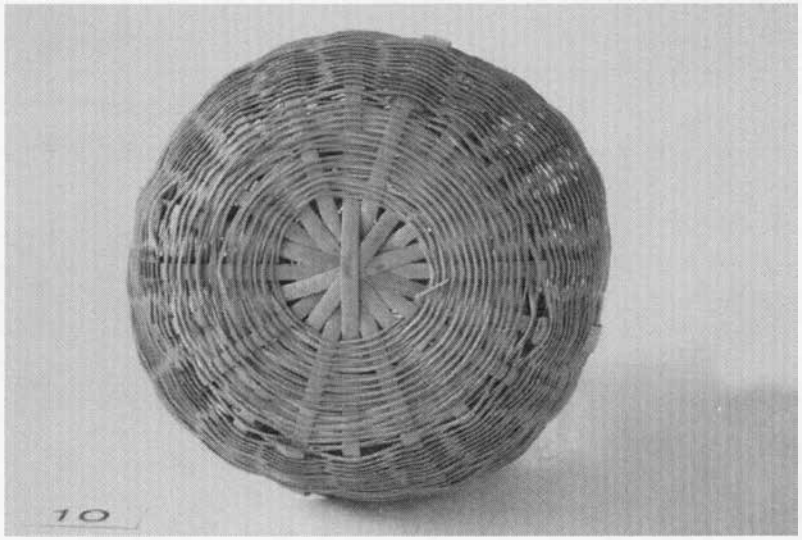


全体俯瞰

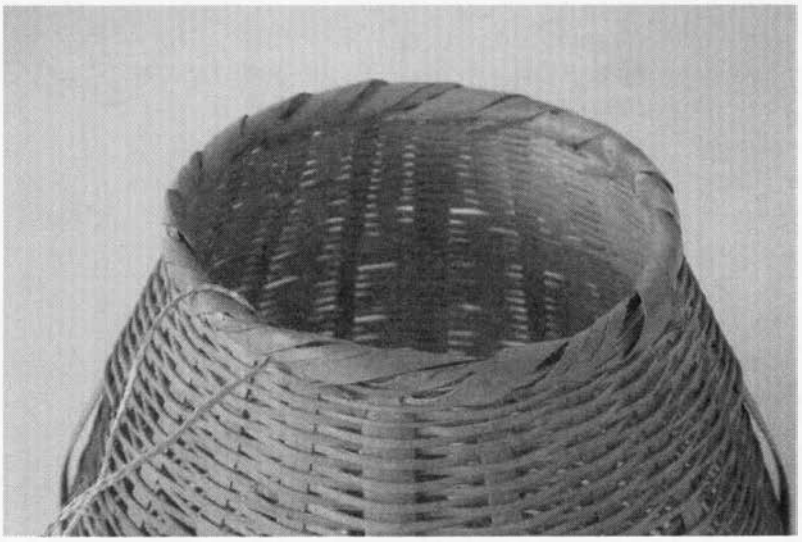
製作年月日	1983年頃
用　　途	漁をしている間、生け簀代わりに海につけておく。魚が逃げないように蓋が付いている。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:10本 幅:5.8～6.6　厚さ:0.3　長さ:700 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2　厚さ:0.3　長さ:竹1本分
底の編み方	菊底編み
伝承など	石川先生から教わって作った。 耳4カ所(耳に紐を通して使った。)
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 蓋部 115 90 35 本体 110 180 140 200
備　考	



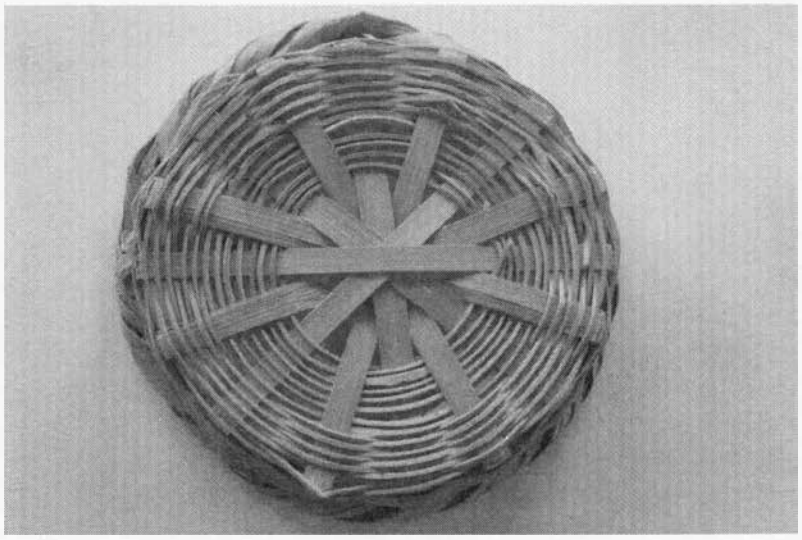
蓋の内部



底面



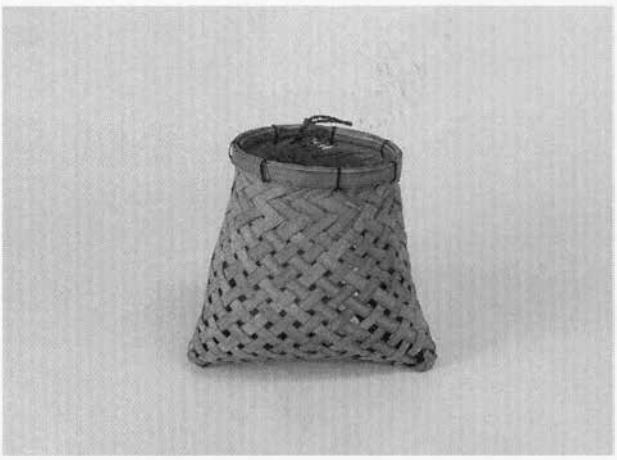
縁外側



蓋の底面

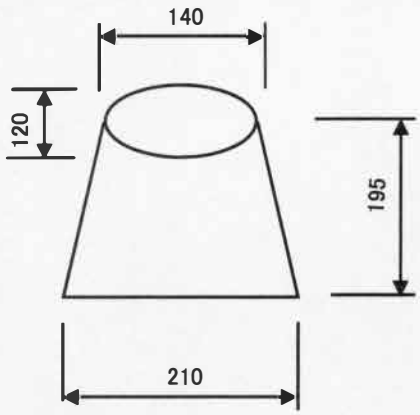
名称	チリカゴ

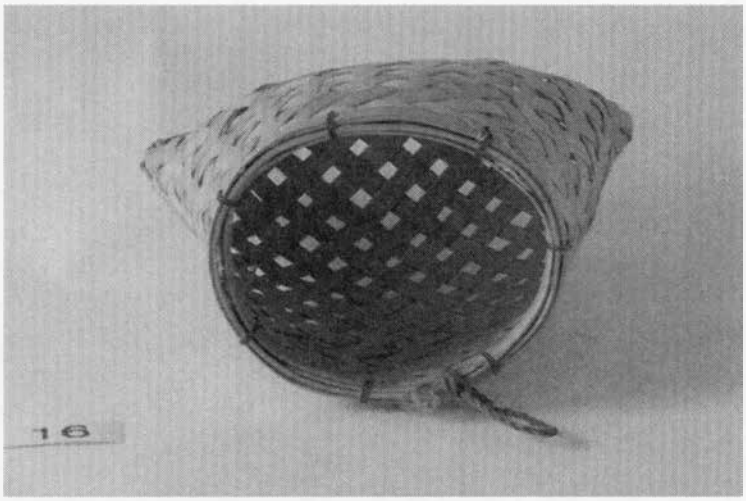
収蔵品番号	2003-1-0031



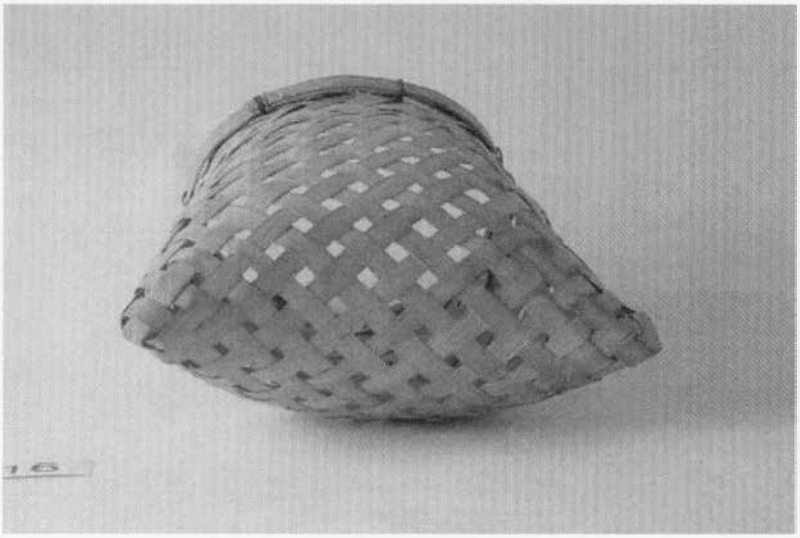
全体俯瞰

製作年月日	1973年頃
用　　途	机の横に下げてゴミ入れとして使用した。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:32本(8列×2本×2) 幅:9～10　厚さ:0.8　長さ:1,200 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:9～11　厚さ:0.8　長さ:竹1本分
底の編み方	
伝承など	材料はワタの部分を使うので材料の節約が出来る。 作り方は17才の頃石川先生に教わった。
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm
備　考	



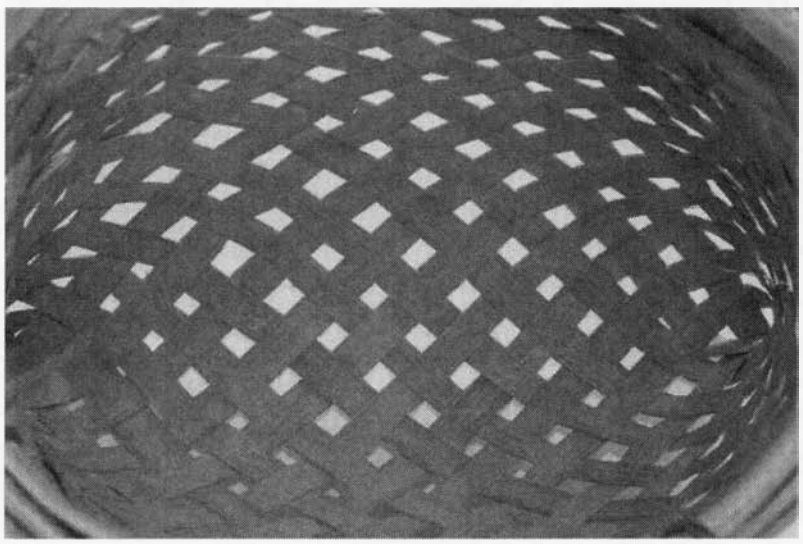


上面



底面

側面（使用状況）



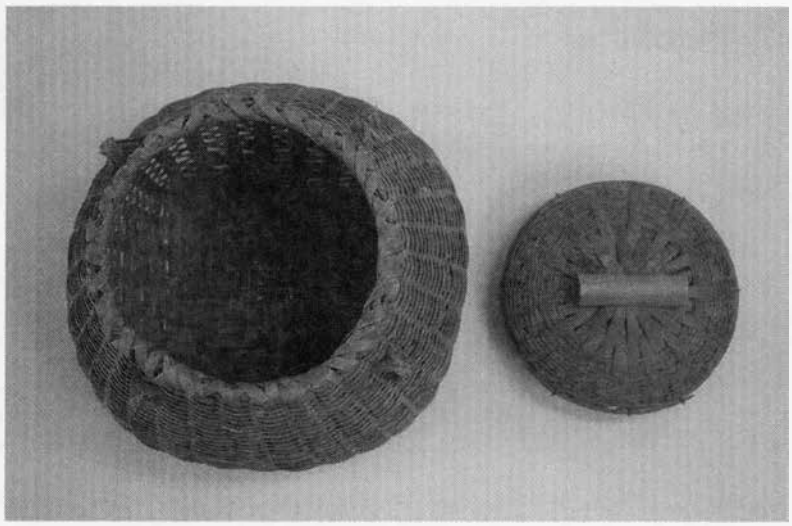
内面

名称	ウミディール

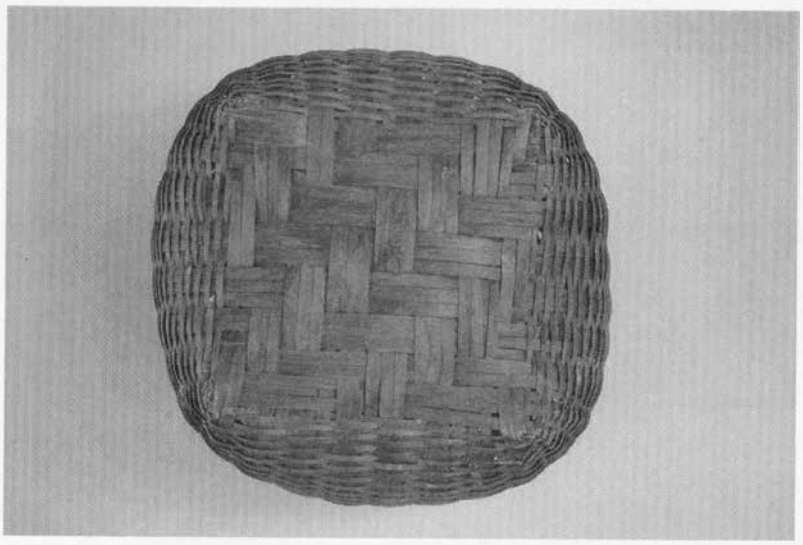
収蔵品番号	2003-1-0032

全体俯瞰

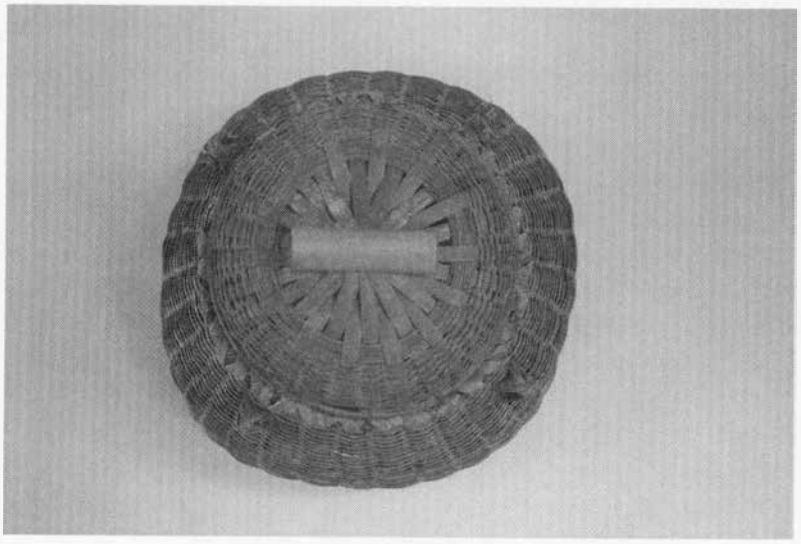
製作年月日	
用　　途	釣った魚を入れるのに使った。
材料素材	ホウライチク(ンジャダキ)
材料寸法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:32本(8列×2本×2)方向 幅:6.5～8　厚さ:0·3　長さ:950 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2.5～3.5 厚さ:　長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み　蓋は菊底編み
伝承など	耳4カ所(耳に紐を通して使った。)
略図 (寸法(直径・高さ・耳・蓋の有無など))	単位:mm 蓋部 165 95 本体 190 280 170 230 70
備　考	編み方は87ページ参照



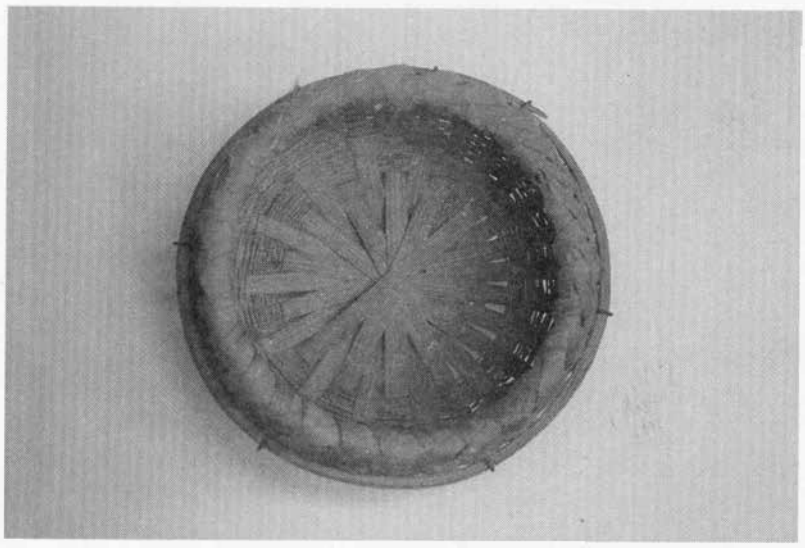
蓋を外した状態



底面



上面



蓋の内側

第3章　バーキの作り方

作図：木下義宣

バーキづくりの極意は
編み方にあらず
ヒゴ作りにあり…

アラバーキの作り方（底の編み方）：網代編

材料

- ケケ（ホウライチク）の外側の節をナタで落す。竹の汚れはぬれた布でふきとる。
- 竹を120~130cm 4本（縦ヒゴ用）、巻ヒゴ用に長い竹1本準備する。
- 竹を8等分に割る（巾9~10mm）
- 縦ヒゴ32本，巻ヒゴ10本作る。

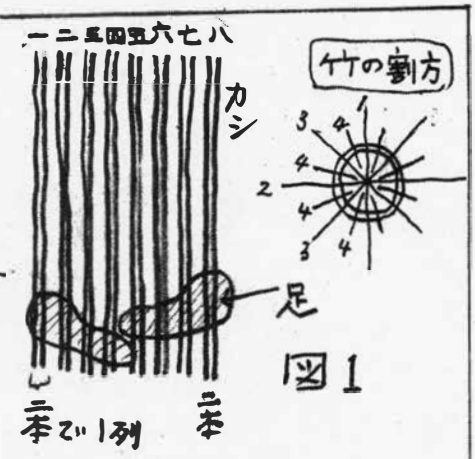


図1

① 縦ヒゴ（カシと言う）を皮を上にして2本を1組で1列とし、足で押えながら8列並べる。（長い板で押えてもよい）

② 縦ヒゴを2本1組にし横に下記の要領で入れる

1列目：左から2列を上げ（一、二列）下から通し、三・四列の上から通り、五・六列の下，七・八列の上を通る。

2列目：左から一列を上げ下から通し、二・三列の上、四・五列の下，六・七列の上、八列の下を通る。

3列目：左から二列（一・二列）の上三・四列の下，五・六列の上、七・八列の下

4列目：左から一列の上，二・三列の下，四・五列の上，六・七列の下，八列の上

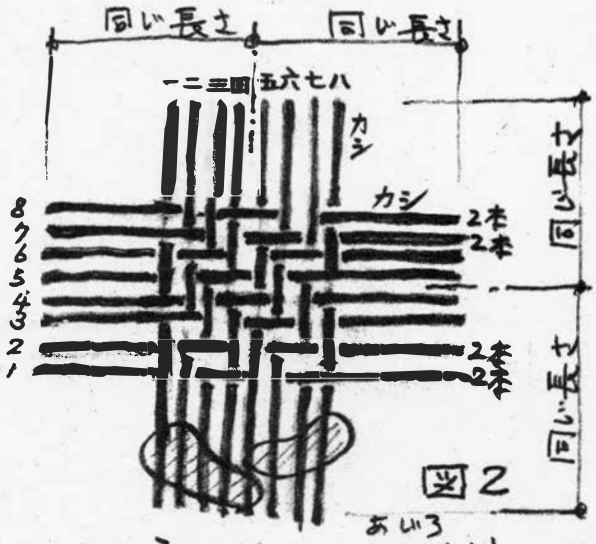


図2

あいろ

この底の編方を網代編という

5列目：1列目と同じ
6列目：2列目 〃
7列目：3列目 〃
8列目：4列目 〃

③ 巻ヒゴ（ヌチと言う）を巻く

㋐：ヌチをハの右、8・7の下から2列くぐらせ6・5の上，4・3の下，2・1の上 以下同じように1周りさせる。七・八列目は右上の注意書きのようにする。

㋑：2回り目からは1列ごとに上・下と交互にいく。角はきちっと折る。

四隅のカシを内側にひねる。（これは立ち上がるまで続ける）

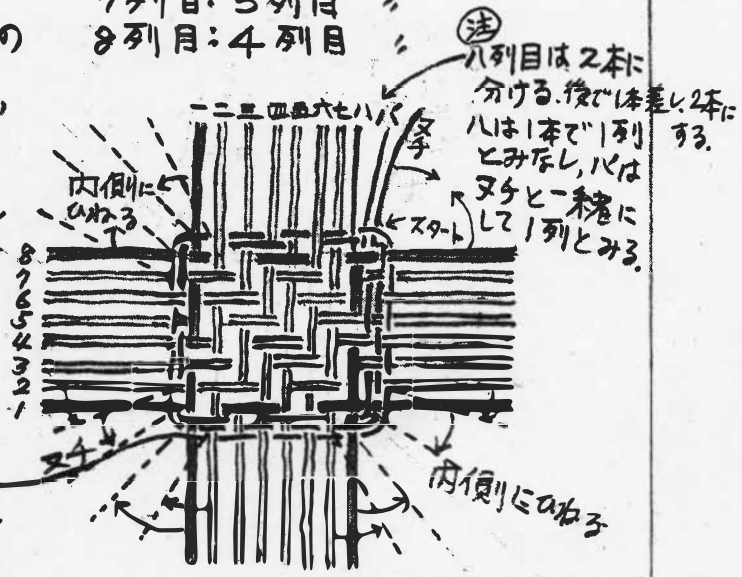


図3

㋒ 8～10回位巻いたら ひっくり返えし、さらにヌチを巻いていく。カシの先端から25～30cm位のところで止める。（図-4）

最後まで返えさずやってもよい。

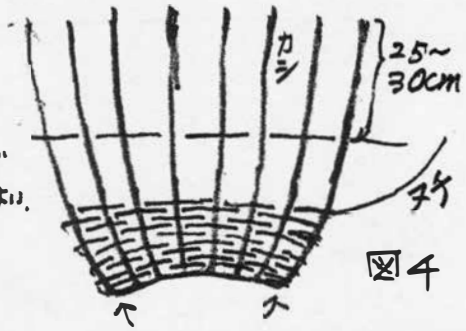


図4

角は少し反るように工夫する

④ 上縁を巻く

㋐ 4等分した長い竹ヒゴで、上縁の内側に入る輪を作る（2回りになるように）。重なる15cm位は薄くしておく。（竹の長さ＝直径×3.14×2＋α）

㋑ 立っているカシの先端を4～5本束ねて、その右側のカシで㋐の輪と一緒に巻きこむ。巻きこんだカシは後で抜きその空いた穴にカシの先端をさし込む。（割りばし状の竹を4～5本巻きこんでもよい。）

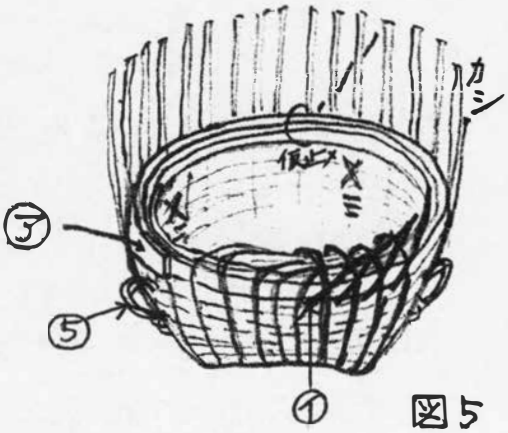
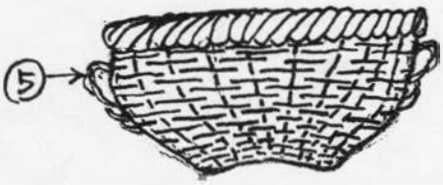


図5

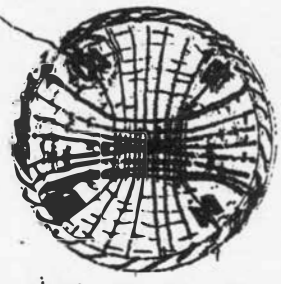
⑤ 耳をつくる。

4隅の上から2～3段のところに耳を編む。出来上がり。



完成図

真中に付ける
X もいた



内側から見た耳の位置

耳用の巻ヒゴ あつさ 0.6mm 長さ1m位。

㋐ 上から9列目の下から差し込む（5列位まで）

㋑ 上から5列目の上（4列目との間）に差し、内側で斜めにし、縦ヒゴの右側から出す。

縦ヒゴの左側

外は通さない

㋒ 親指が入るくらいあけ、しめる。

㋓ それの内から通し、縦ヒゴの右側から差し込む

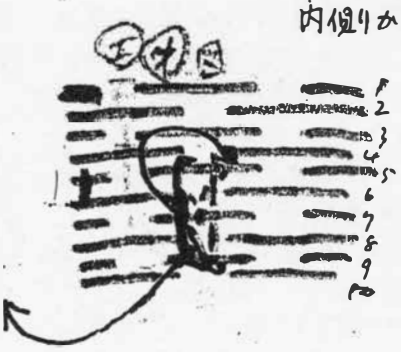
㋔ 縦ヒゴの内側で斜めに（X字に交わる）し、9列目の左側出す。

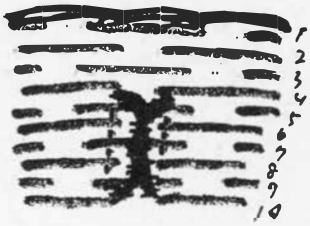
㋕ ㋐～㋔を2回くり返し、余った巻きヒゴを外側で巻きつけ完成。

㋖ 四隅に作った耳の穴に紐を通して使う

㋓～㋕図

㋓～㋕図





㋕ 完成図

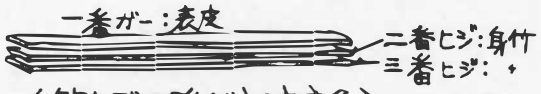
2回目は、内側でX字に交わらせず、その数子真下に降ろし9列目から出す。

ミージョーキの作り方

：連続ますあじろ＋（プラス） 四方あじろ編み
↳ポイント：竹ヒゴの巾と厚さをそろえること。

材料

- 縦ヒゴ（方言でカシと言う）：竹の表皮（一番ガー）を使う
  - 巾10mm，厚さ0.4～0.5mm，長さ80cm→1本（真中のヒゴとなる）。
  - 巾8mm，厚さ0.4～0.5mm，長さ80cm→26本・70cm→20本・60cm→20本・50cm→10本（中心部は長く，外側は短いヒゴを使う）⇨合計75本
- 横ヒゴ（カシ）：竹の肉質部（身竹：方言で二番ヒジ，三番ヒジと言う）を使う。
  - 巾10mm，厚さ0.4～0.5mm，長さ80cm→1本（真中で使用する）
  - 巾8mm，厚さ0.4～0.5mm，長さ80cm→26本・70cm→20本・60cm→20本・50cm→10本 ⇨合計75本
- 口縁竹：巾20mm，厚さ3mm，長さ2m→4本（2本は巾10～15mm），巾3～4mm，厚さ3mm，長さ2m→1本
- ステンレス製針金 #20（φ0.9mm）



〈竹ヒゴの呼び方：方言名〉

編み方

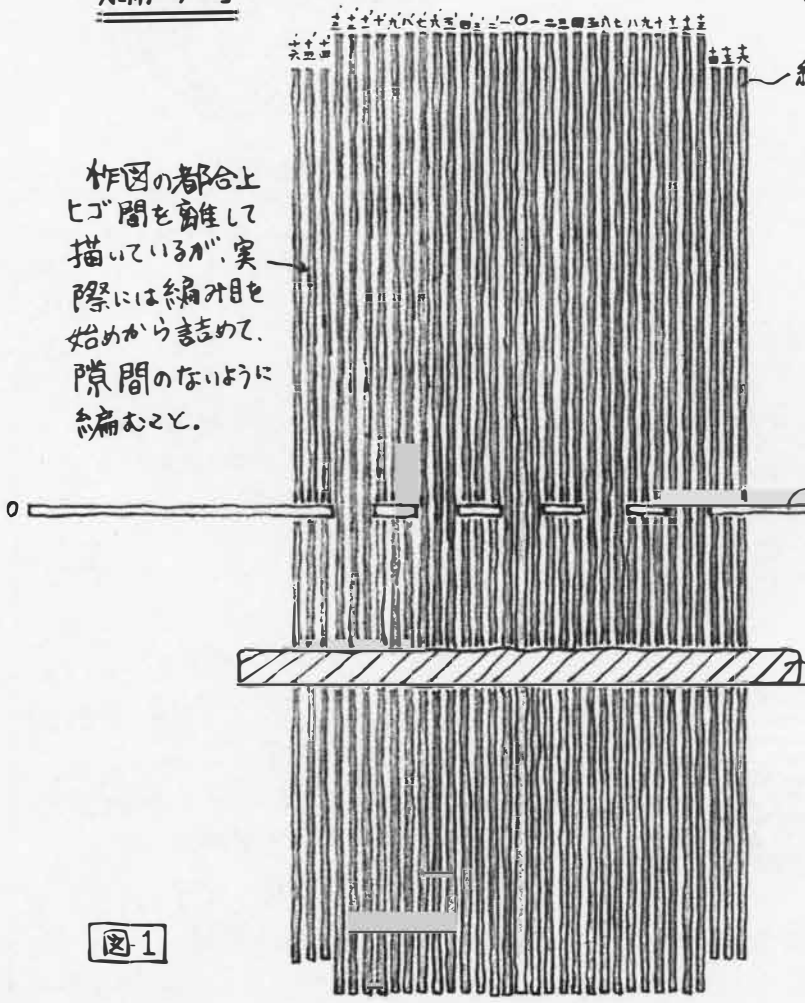


図1

手順

1. 表皮付きの縦ヒゴ（80cm）を表皮を表にして，十六′～0～十六と並べ板と足で押える。中央の0番は10mm巾のヒゴを使う。

2. 横ヒゴの真中になる身竹（巾10mm）を，縦ヒゴの中央部一′・0・一の下，二・三・四の上，五・六・七の下，八・九・十の上と繰り返す。（三本とび編み目という）。
   左側も同様に二′・三′・四′の上，五′・六′・七′の下と繰り返す。

※以下，左右対称なので，右側の編み方のみ説明し，左側の説明は省略する。

3. 横ヒゴ1を入れる。縦ヒゴの中央0番の下，一・二・三の上，四・五・六・七・八の下（五本とび編目），九・十・十一の上，十二の下，十三・十四・十五の上，以下三本とび編目で下，上，下と繰り返し。

4. 横ヒゴ2を入れる。
縦ヒゴ二'・一'・0・一・二の上（五本とび），三・四・五の下（三本とび），六の上（一目），七・八・九の下，十・十一・十二・十三・十四の上，十五・十六…の下，以下三本目とびで繰り返

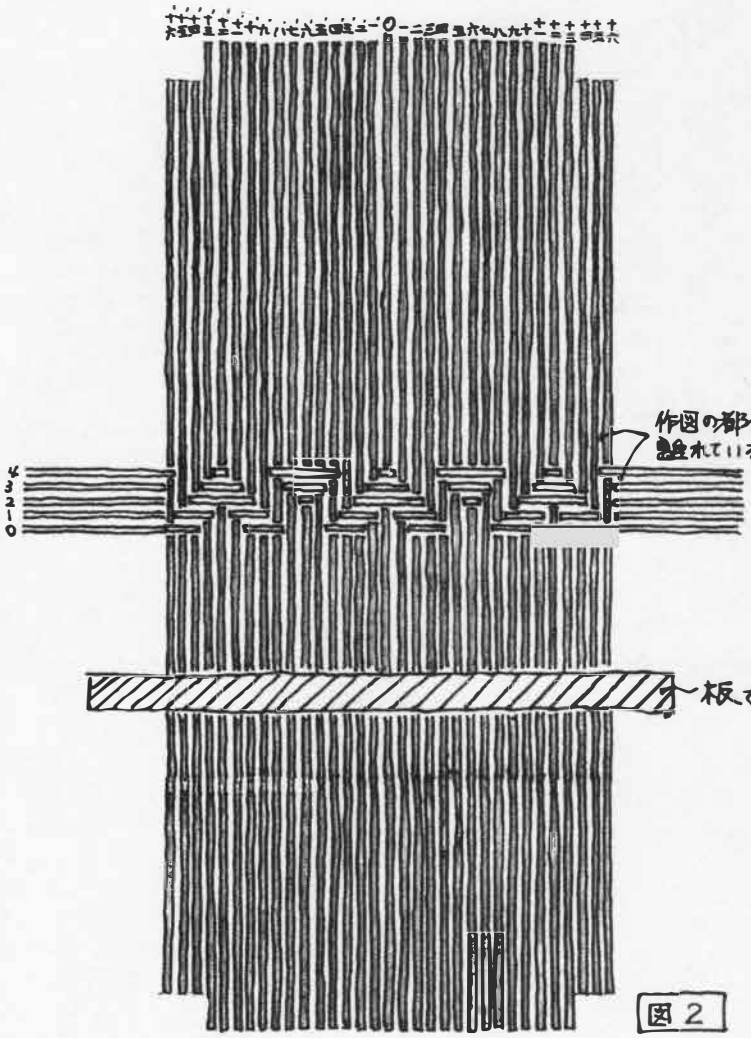


図2

5. 横ヒゴ3を入れる。
縦ヒゴ一'・0・一の上，二・三・四の下，以下三本とび編みを繰り返す。

6. 横ヒゴ4を入れる。
縦ヒゴ0の上，一・二・三の下，四・五・六・七・八の上，九・十・十一の下，十二の上，十三・十四・十五の下，以下三本とび編みを繰り返す。

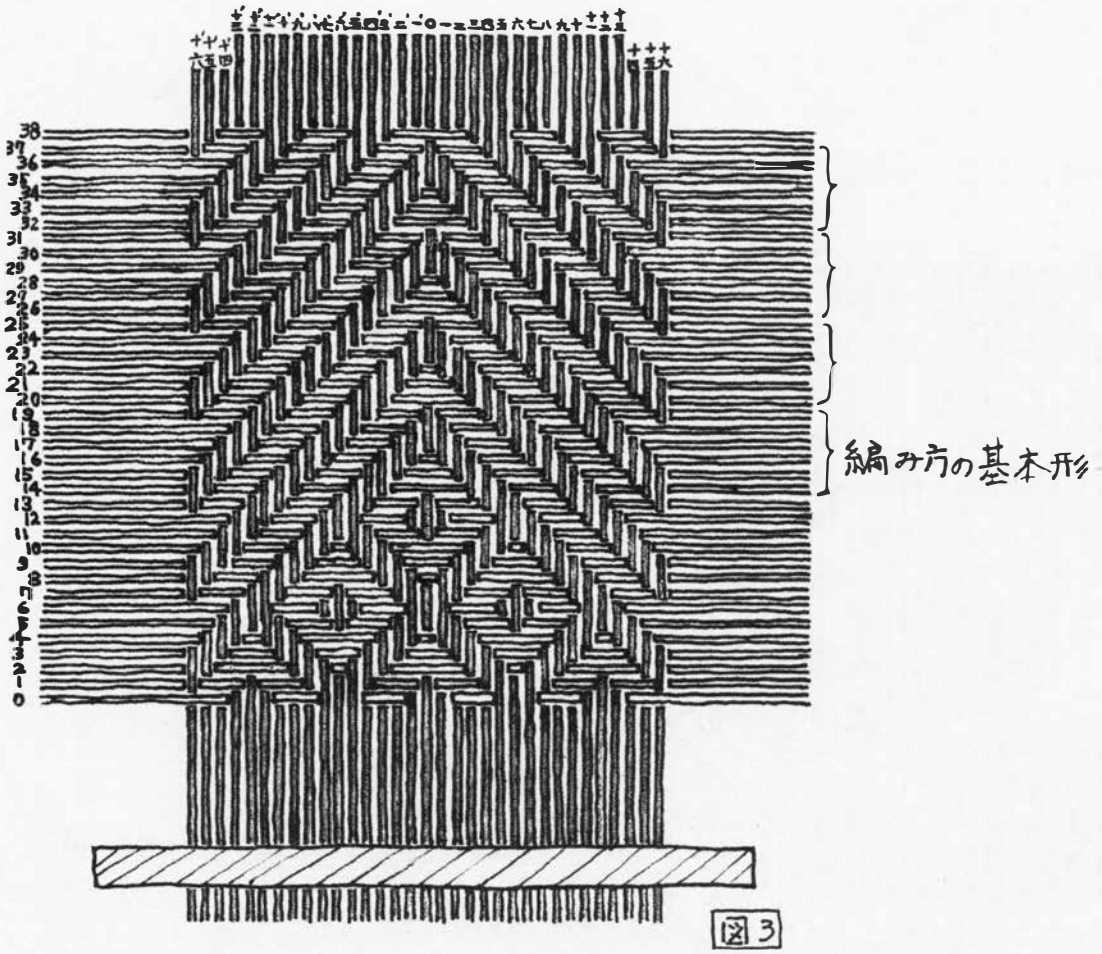


図3

7. 横ヒゴ 5 を入れる。

縦ヒゴ 二'・一'・0・一・二の下（五本とび）、三・四・五 の上（三本とび）、六の下（一目）、七・八・九の上（三本とび）、十・十一・十二・十三・十四の下（五本とび）、以下三本とびあじろの繰り返し。

8. 横ヒゴ 6を入れる。

縦ヒゴ 一'・0・一の下、二・三・四の上、以下三本とびあじろの繰り返し。

9. 横ヒゴ 7を入れる。

縦ヒゴ 二'・一'・0・一・二の下、三・四・五の上、六の下、七・八・九の上、以下三本とびあじろの繰り返し。

10. 横ヒゴ 8 を入れる。

縦ヒゴ 0の上、一・二・三の下、四・五・六・七・八の上、九・十・十一の下、以下三本とびあじろの繰り返し。

11. 横ヒゴ 9を入れる。

5. 横ヒゴ3と同じ。

12. 横ヒゴ 10を入れる。

縦ヒゴ 二'・一'・0・一・二 の上、三・四・五の下、六の上、七・八・九の下、以下三本あじろの繰り返し。

13. 横ヒゴ 11を入れる。

縦ヒゴ 0の下、一・二・三の上、四・五・六・七・八の下、以下三本あじろの繰り返し。

14. 横ヒゴ 12を入れる。

縦ヒゴ 一'・0・一の下、二・三・四の上、以下三本あじろの繰り返えし。

15. 横ヒゴ 13を入れる。

縦ヒゴ 0の下、一・二・三の上、以下 三本あじろの繰り返し。

16. 横ヒゴ 14 を入れる.
縦ヒゴ 二'・一'・0・一・二の上，三・四・五の下，以上 三本とびあじろ の繰り返し.

17. 横ヒゴ 15 を入れる。
横ヒゴ 3．9と同じ.

18. 横ヒゴ 16 を入れる。
縦ヒゴ 0の上，一・二・三の下，以下 三本 とびあじろの繰り返し。

19. 横ヒゴ 17 を入れる.
縦ヒゴ 二'・一'・0・一・二の下，三・四・五の上，以下 三本 とびあじろの繰り返し.

20. 横ヒゴ 18 を入れる.
横ヒゴ 0，6，12 と同じ。(三本とびあじろ)

21. 横ヒゴ 19 を入れる.
縦ヒゴ 0の下，一・二・三 の上，以下 三本とびあじろの繰り返し。

22. 横ヒゴ 20 を入れる.
縦ヒゴ 二'・一'・0・一・二の上，三・四・五の下，以下 三本とびあじろの繰り返し。

23. 横ヒゴ 21 を入れる.
横ヒゴ 3・9・15 と同じ。

24. 横ヒゴ 22 を入れる.
横ヒゴ 16と同じ.

25. 横ヒゴ 23 を入れる.
横ヒゴ 17と同じ。

26. 横ヒゴ 24 を入れる.
横ヒゴ 18 と同じ.

27. 横ヒゴ 25 を入れる.
横ヒゴ 19 と同じ。

28. 横ヒゴ 26〜31，32〜37，38〜 を
横ヒゴ 14〜19 を基本的編み方とし
これと同じように編んでいく。

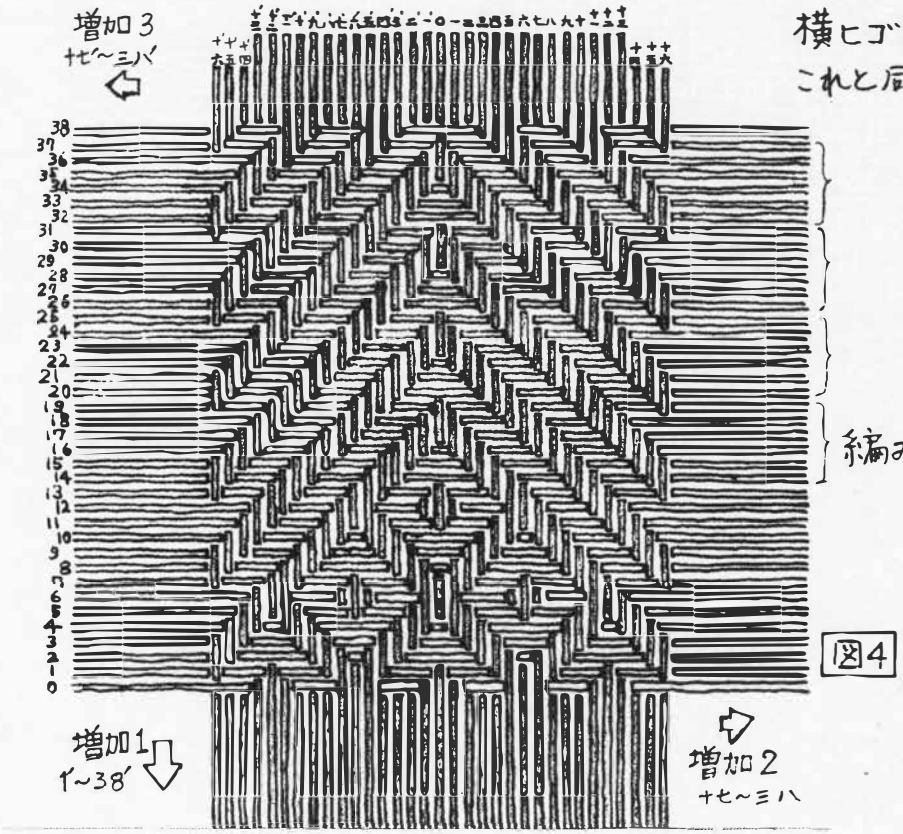


図4

29. 下の方に 1'〜38' を編む.
体の向きを変えて，横ヒゴ 1'〜38' を 1〜38 と同じように編んでいく。

編み方の基本形

30. 右側に十七〜三八を編む.
縦ヒゴ十七〜三八を三本とびあじろで編む。

31. 左側に十七'〜三八'を編む.
縦ヒゴ十七'〜三八'を三本とびあじろで編む。(底編終了)

《底編完成図：連続ますあじろとますあじろの組み合わせ》

（中央部分）　（周辺部）

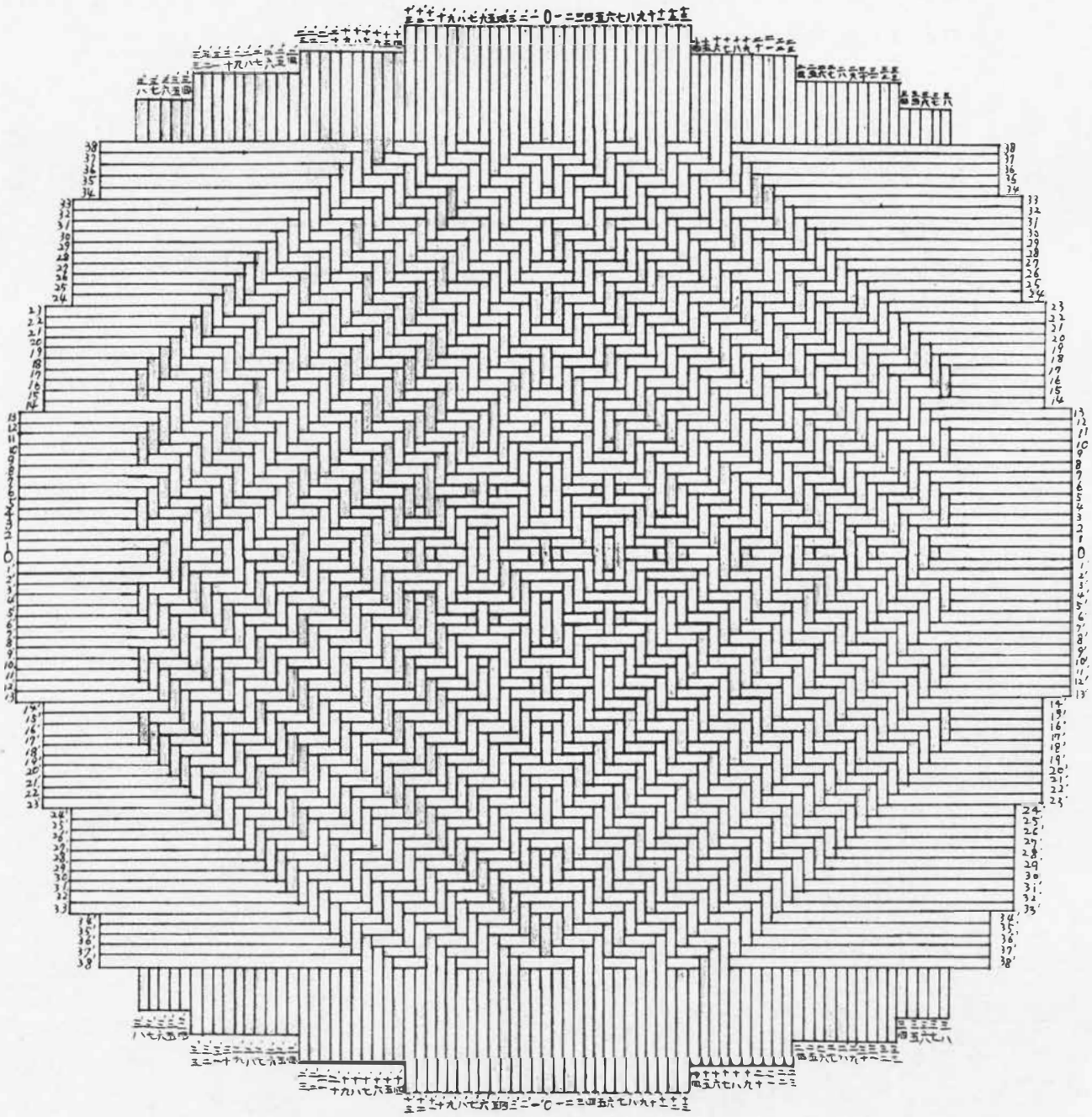


図5

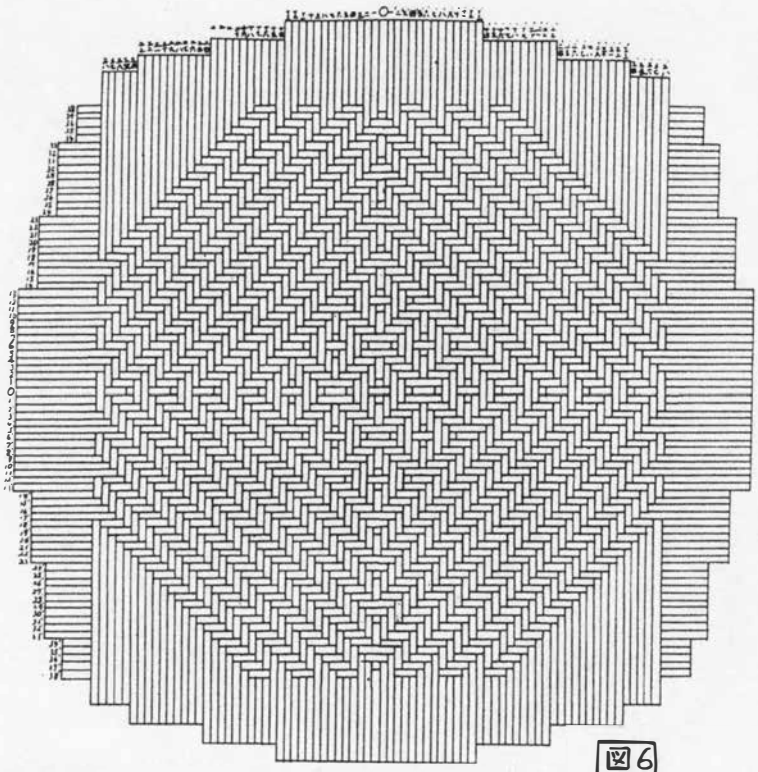


図6

32. 図5の編み終えたのを 皮が裏になるように裏返えす.（図6）

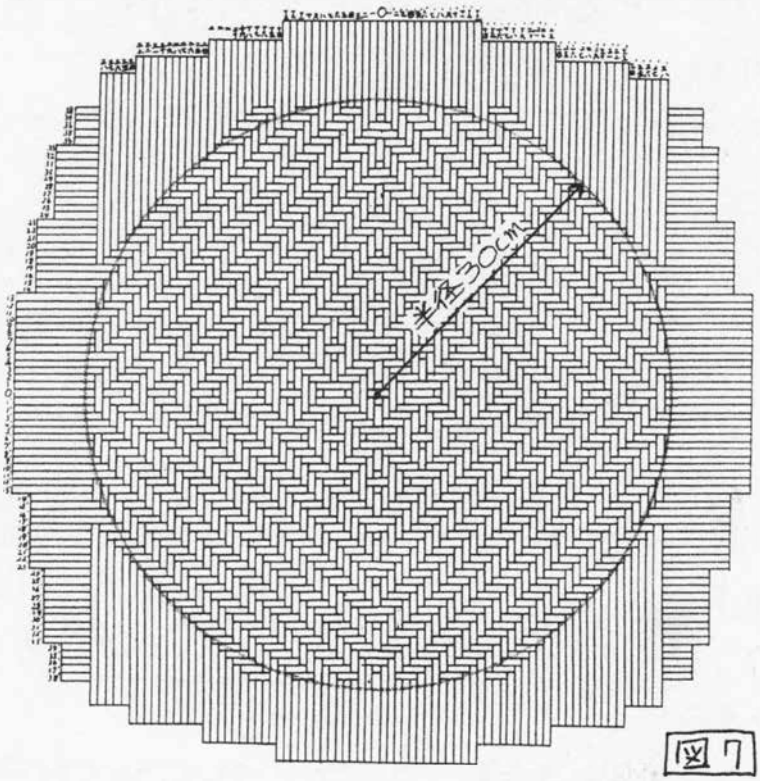


図7

33. 編みの中心から半径30cmの円を棒や鉛筆を使って描く.（図7）
円周の線に沿ってケケヒゴを内側に曲げる. 長くて余分なヒゴは,
切り取る.

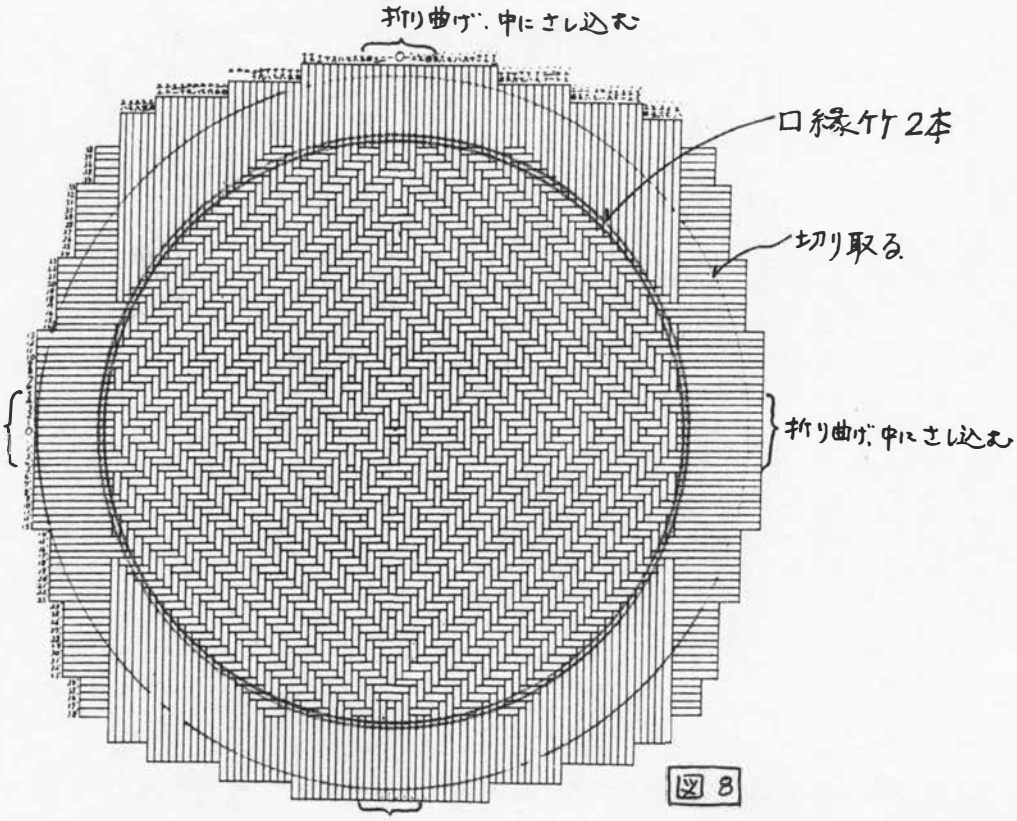


図8

34. 直径60cmの口縁ケケ（2本は巾20mmで上段に使用．2本は巾10～15mmにし下段に使用する）を作る。内側になるのは、外皮を内側に、外側になるものは、外皮を外側に向けて作る。（図9）

直径60cmの円周は，3.14×60＝188.4cmになる。

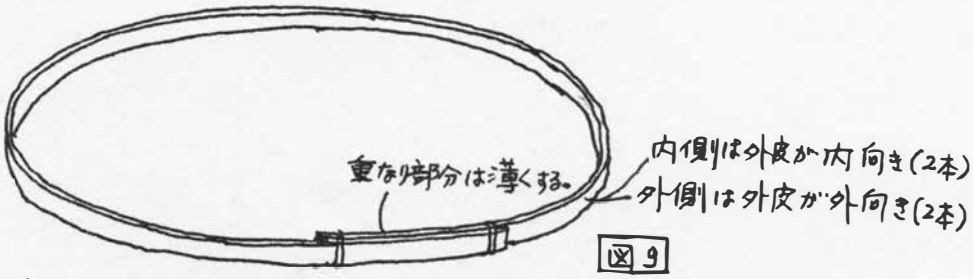


図9

35. 上の口縁竹を入れる。先ず、外側を下から入れ，後に内側を上から入れ針金で仮止めする。中央部四ケ所の約10本をそれぞれ折り曲げ中にさし込む。（図10）

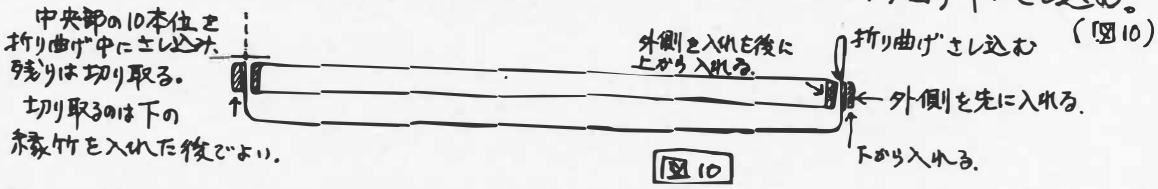


図10

36. 下の口縁竹を上と同じ要領で入れ、お押えの縁ケケを上から入れ、針金で束る。（図11）

図11

ミージョーキ 完成図

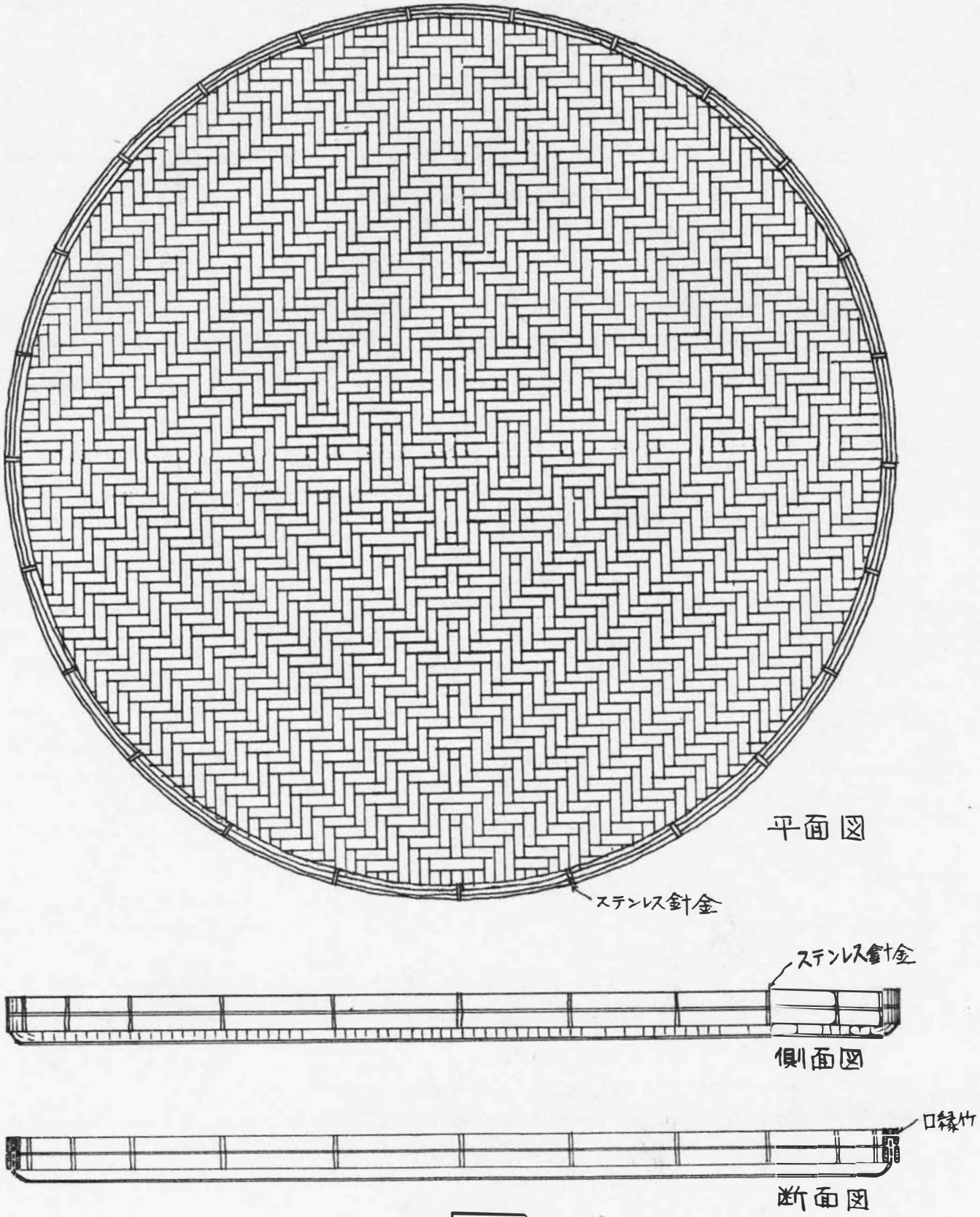


図12

六つ目かごの編み方

材料（　かご　）

・縦ヒゴ：長さ 60 cm，巾 6～7 mm，厚さ 0.3 mm ～0.5
12×3＝36本　↳巾をそろえること。

・巻きヒゴ：長さ 140 cm，巾 6～7 mm，厚さ 0.3 mm ～0.5
2本

・縁巻きヒゴ：長さ 140 cm，巾 13～15 mm，厚さ 1.5 mm
2本　↳両端の重なる部分は薄くする。

長さ 140 cm，巾 2 mm，厚さ 1.5 mm
1本

・ヘラ竹：長さ約 40 cm，巾 10～12 mm，厚さ 1.5 mm
3本　↳六角形の頂点の対角線の長さ。

・ステンレス針金　φ0.9 mm(#20)，2 m

（ムチウブサー）

・縦ヒゴ：長さ 60～85 cm，巾 8～9 m
厚さ 1.5～2 mm
12×3＝36本

・縁巻きヒゴ：長さ 190 cm，巾 15～17 mm
厚さ 2～3 mm
2本

長さ 190 cm，巾 2 mm
厚さ 2～3 mm
1本

あるいは　ツルグミの枝
φ-7 mm 位　190 cm

編み方 ―《底を編む》

・縦ヒゴを外皮が表になるように横に1本置く。1のヒゴ。
・2のヒゴの中間点を1の中間点位で60°で交差させる。(2が下)

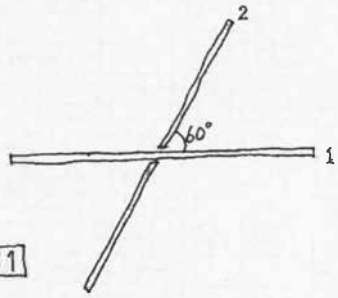


図1

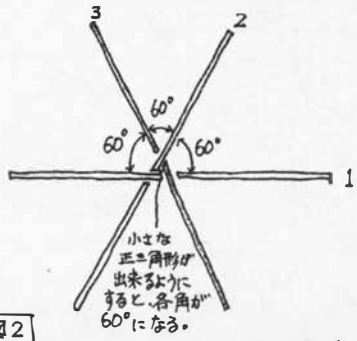


図2

3を2の下、1の上を通し交差させ、各々が60°で交わるようにする。

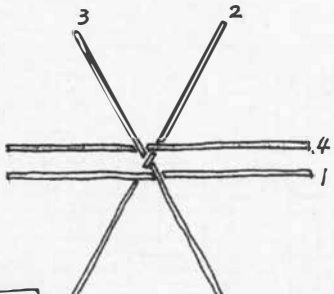


図3

4を2の上、3の下を通るように差し入れる。

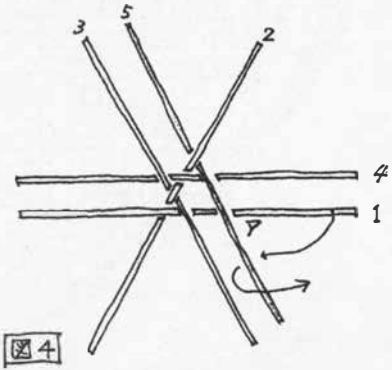


図4

1と5の交点アで1と5の上下を入れ変え1を5の上にする。(下図)

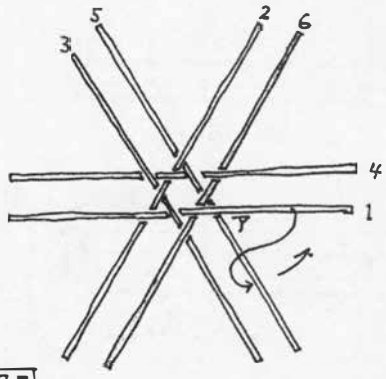


図5

6を2と平行に差し込む。
1と5の上下を入れ変え5を上にする。

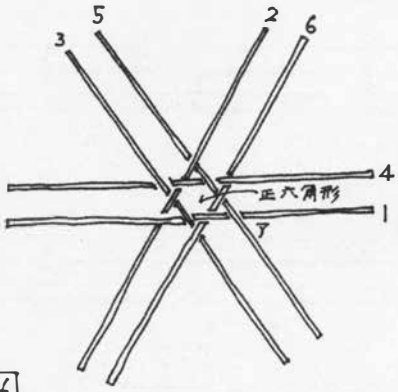


図6

6がはずれなくなる。
中央の空間が正六角形になる。

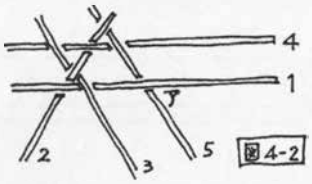


図4-2

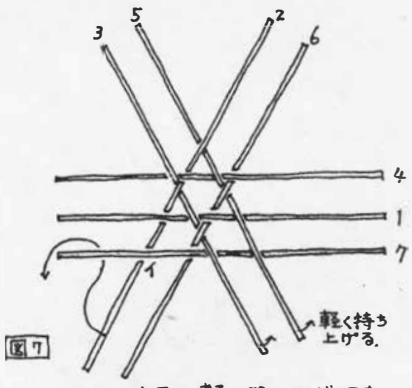


図7

3と5の右下を軽く持ち上げ、7を5・3の下から2・6の上へと通す。
1点で2と7を上下入れ変え、2が上、7が下になるようにする。

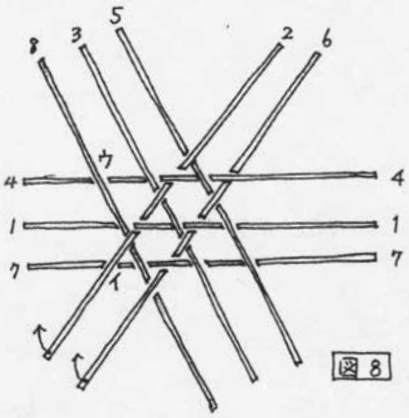


図8

2と6の左下を軽く持ち上げ8を2・6の下、7・1・4の上へ差し込む。

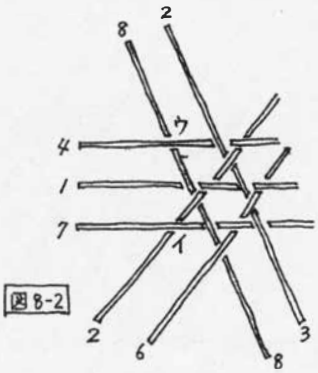


図8-2

1点の2と7の上下を入れ変え、7が上2が下に来るようにする。8がはずれなくなる。

ウ点の8と4の上下を入れ変え、4が上8が下に来るようにする。

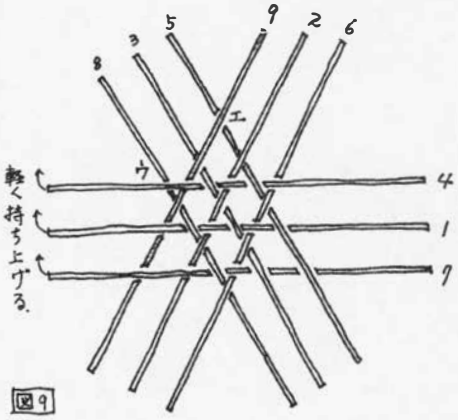


図9

4・1・7の左側を軽く持ち上げ、9を4・1・7の下、8・3・5の上から入れる。

ウ点の8と4の上下を入れ変え、4が下、8が上に来るようにする。9が抜けなくなる。

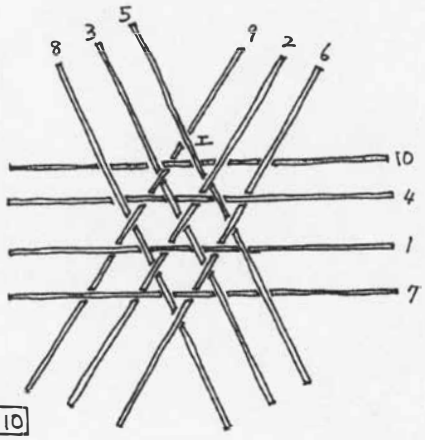


図10

10を入れるため エ点で5と9の上下を入れ変え、5が上 9が下になるようにする。

10を入れた後、10が抜けないようにするため 5と9を入れ変え元に戻す。

以下 同様に増していく。

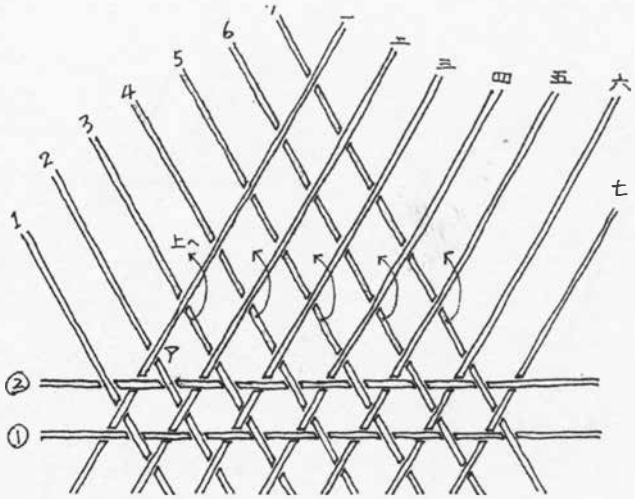


図11　ヒゴが増えてきたら⇨

下になっている左斜め向きの3・4・5・6・7を右斜め向きの一・二・三・四・五の上にする。(右斜め向きが上になっているのを、左斜め向きのものが上になるようにする。)

《数字は図1～図10までと無関係》

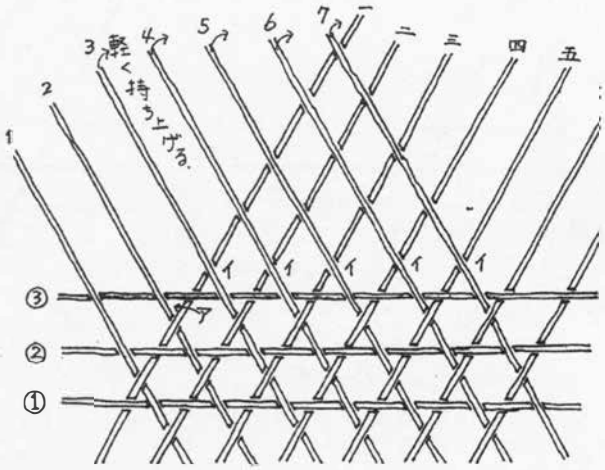


図12

3・4・5・6・7を軽く持ち上げ、③をア点で1～7の下，一・～七の上になるように入れる。

③が抜けないようにするため、イ点で3と一，4と二，5と三，6と四，7と五の上下を入れかえる。図13のようになる。

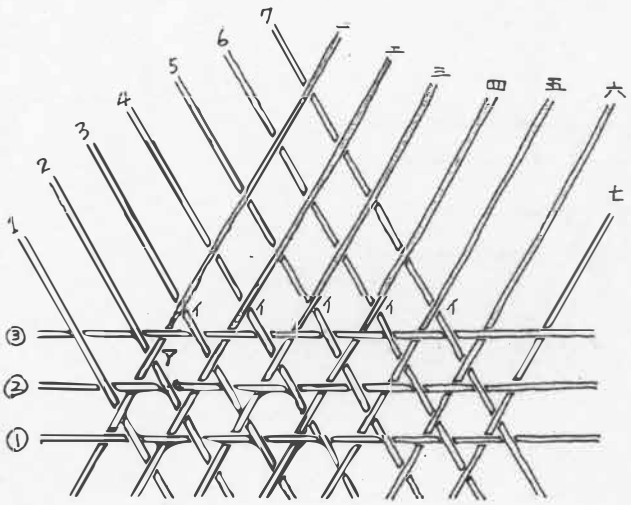


図13

・イ点を交じり変えると③のヒゴがはずれなくなる。

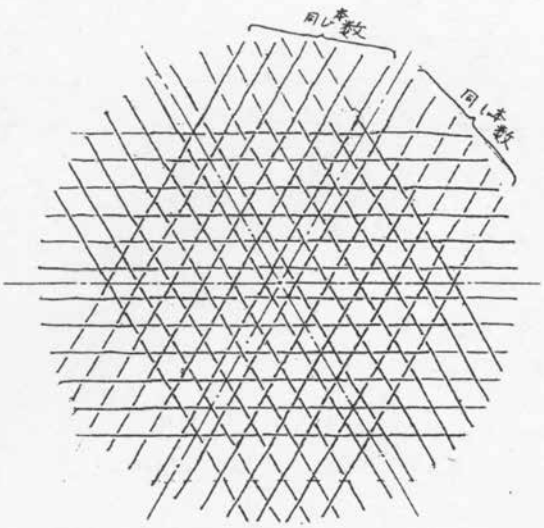


図14　底が編み上がり、裏がえした図(表皮側が下)

・六角形の頂点を中心に、ケケヒゴは左右同じ本数になる。

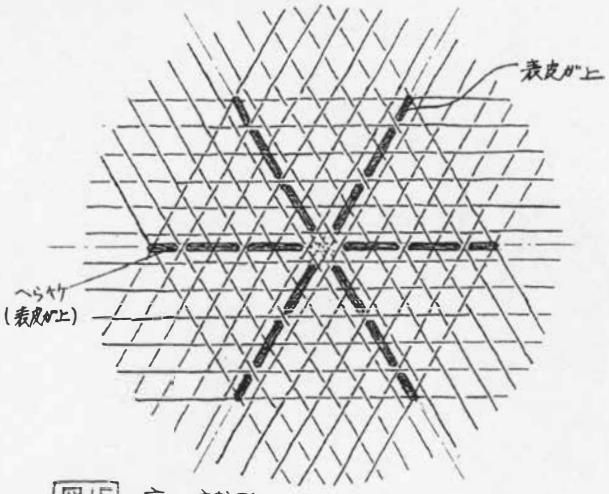


図15 底の補強

・底を補強するため、へら竹を図のように三本入れる。中央では縦ヒゴを差し込まない。へら竹は表皮を上にする。

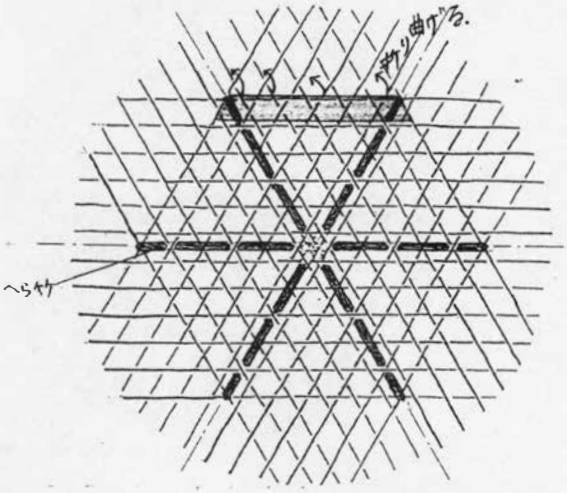


図16 六辺を折り曲げる

・六角形の各辺に板を当て、内側に折り曲げる。

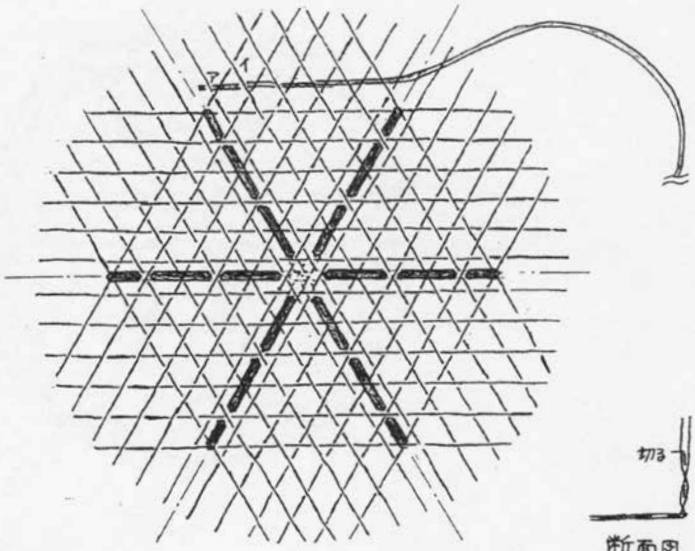
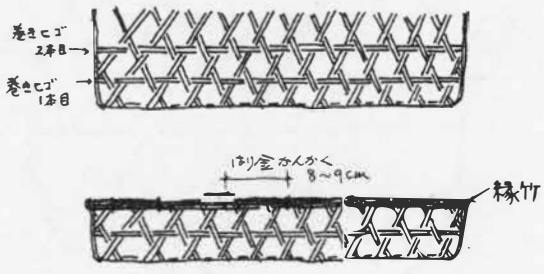


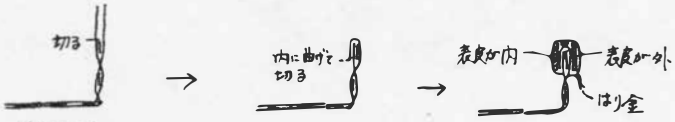
図17 立ち上げ

・巻きヒゴを ア点に差し込む。事前に縦ヒゴを イ点で 図12のように 組み変えておく。巻きヒゴを入れたら 又 元のように組み変える。

一周りしたら 15～20cm重ねる。

図18 立ち上がり

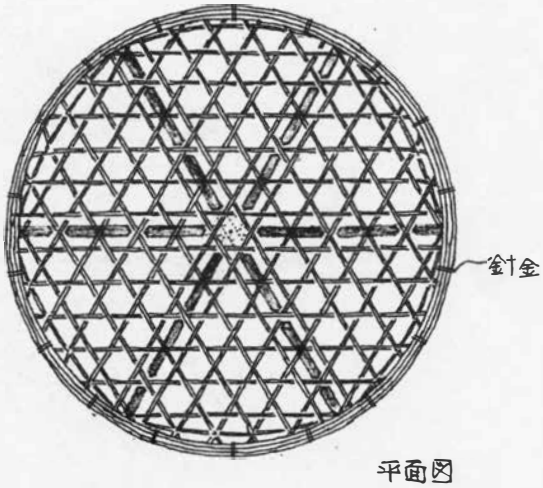




断面図

内側のヒゴは切り取り
外側のヒゴは内に曲げる

縁竹を内と外から
はさみ、上に細竹をのせ
はり金でしばる。



平面図

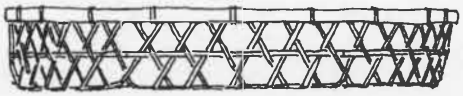
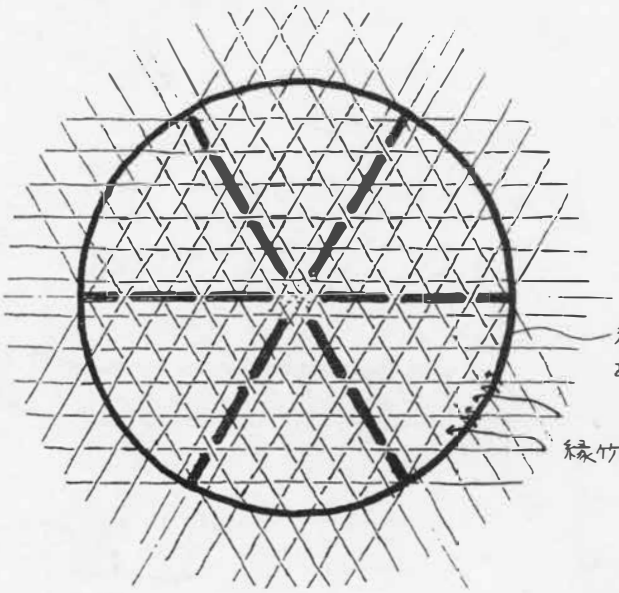
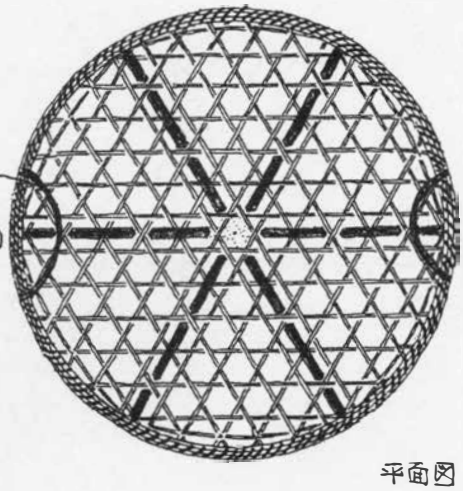


図19 完成図(果物かご)　側面図

ムチウブサー





平面図

図20 ムチウブサーの縁仕上げ

・少し太目の 縁竹 あるいは、ツルグミの枝を 円形にし、それに 縦ヒゴの余分を巻き込む.

・取っ手を 内側に 少し 斜めにして取り付ける。

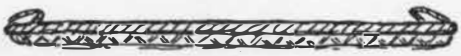


図21 ムチウブサー完成図　側面図

ティールの作り方

ここで紹介するティールの作り方は、本編のティール製作技術ではないが、基本的な技術として掲載した。

竹の選び方

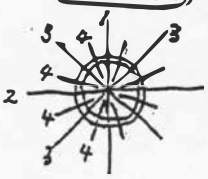
- 2～3年物の竹を選ぶ。節の近辺に白い粉のような物が着いているのは、1年物の竹なので取らない。堅そうな物から選ぶ。体験で覚えるしかない。
- 虫食いで穴の空いた物や、途中から枝がでているのは出来るだけ取らない。
- ヤンバルの野山に生えているホウライチク(インジャダキ)を使う。
- 切り倒すときは、裂けない工夫をする。切り口の乾燥を防ぐため、節の下で切ると良い。使うときに節を落とす 2～3日で使い切るときは、節の上で切り落としてもよいが、裂けない工夫をする。
- 切り倒すには、廻し鋸を使うと良い。

必要な長さに切る

- 竹の外節を落とし、表面の汚れをスカッチブライトや濡れた布で拭き取る。
- 縦ヒゴ(方言でヌチと言う)用の竹を110～120cm位に切る。3～4本必要。
- 巻きヒゴ(ヌチ)用の竹は切らずに長い物(4m位の物)をそのまま使う。3～4本必要。

竹の割り方(ダキワイ)

竹の割方



- 竹は末から割る。(木元竹末:きもとたけうら→→木は根元の方から割り、竹は末から割るときれいに割れるという諺)
- 竹をアジマー(くもで)を使い、4等分する。内節を落とし、二つに割る。(8等分)竹の径が小さいのはこれで終了。径の大きいのはさらに二つに割り16等分にする。割った竹の幅を必要な幅(今回は7～9mm)にする。
- 竹は同じ角度で割いていくとよい。大きく曲げた方に竹は薄くなっていき切れてしまう。(図1参照)

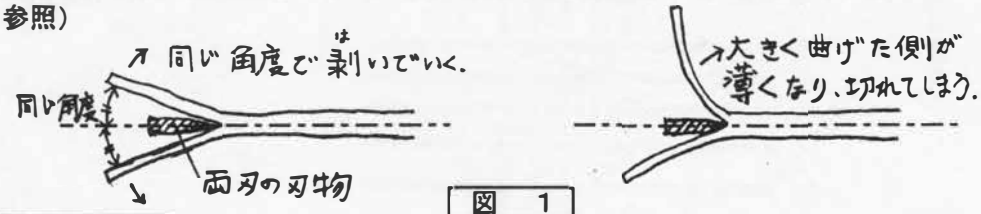


図 1

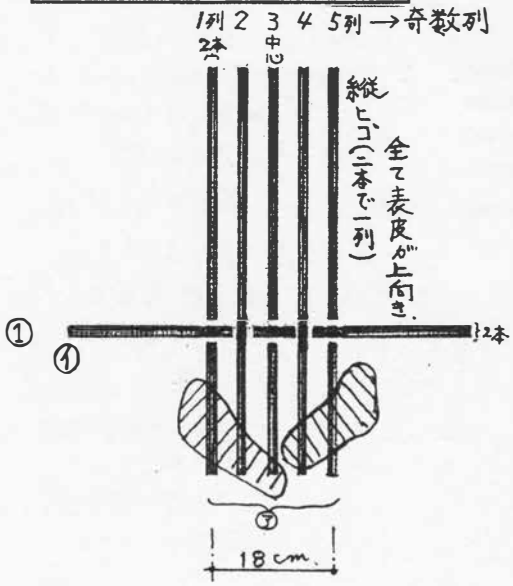
竹ヒゴをつくる(ヒジトゥイ)

- 割った竹を外皮と内肉に2等分するように剥いでいく。決して削ってはいけない。(図1参照)
  一番ガー(外皮)、(二番ワタ、三番ワタ、四番ワタ・・・竹の身だけの物で今回は使わない)
- 縦ヒゴ(長さ:110～120cm位、幅:7～9mm、厚さ:0. 3～0. 5mm両端25cm位は薄目に)→→24本
- 巻きヒゴ(4m位:長い竹1本分、幅:7～9mm)→→20～30本:必要な分

編 み 方

- 底を編む(シチグン)→→縦ヒゴを入れて周辺を編み(スクマーシ)→→徐々に立ち上げていく(タチアギ)→→縁仕上げ(マグイ)→→ミミチケー(耳付け)

底の編み方①:筏(いかだ)編み



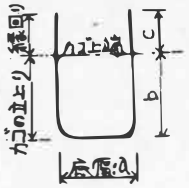
手順1:縦ヒゴを縦に並べる。

㋐縦ヒゴ 2本を 1列とし, 5列を両足又は板で押えて並べる。

㋑縦ヒゴ①を横にし, 1列の上, 2列の下, 3列の上, 4列の下, 5列の上を通す。

㋒3列目が中心になるように左右の長さを調整する。

縦ヒゴの長さ: $l = a + 2b + 2c$

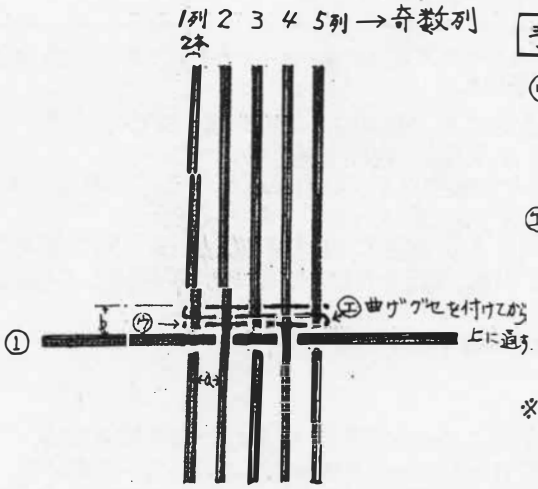


但し $c \fallingdotseq 20cm$

今回の作品では

$l = 18 + 2 \times 30 + 2 \times 20$

$= 118 \rightarrow 120cm$

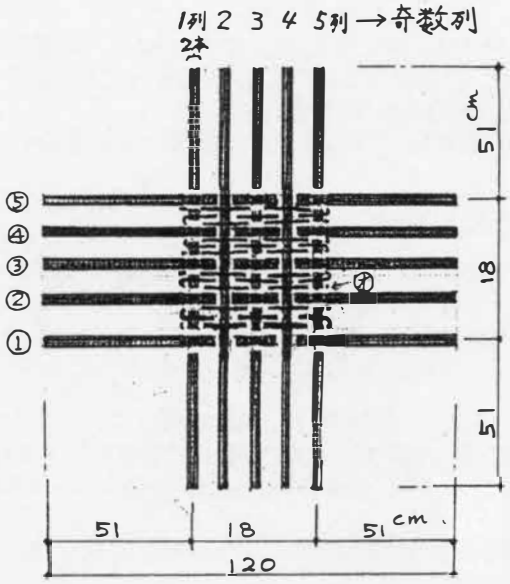


手順2：縦ヒゴを横列に入れる

㋒ 縦ヒゴと同じ幅位のヒゴを縦1列の下、2列の上、3列の下、4列の上、5列の下を通す。

㋓ で折り返えし、5列の上、4列の下の順で通していき、㋒点で再び折り曲げ1列の下、2列の上を通し、5列の下へ通して切る。

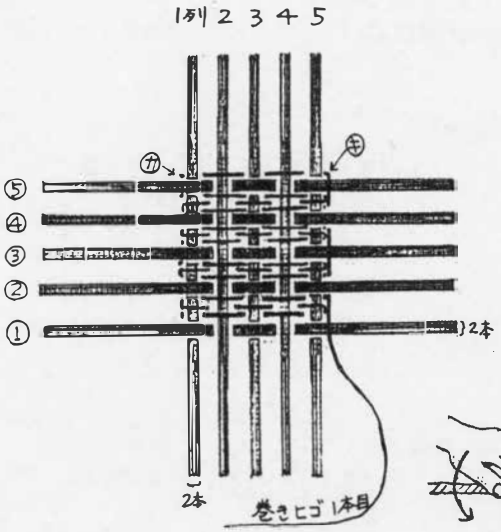
※巻き付けるヒゴの幅で横列の間隔が決まるので、ヒゴの幅を調整する。a・bの幅が同じになるようにヒゴの幅を調整する。



㋔ 短い巻ヒゴを、㋔点で縦ヒゴ5列目の下から、4列の上、3列の下…と交互に上・下と通し、3回折り返し、1列の下を通して切る。

・以下㋒～㋔と同じ。横5列目を入れる。

・横③列目が中心になる。



手順3：巻きヒゴを巻く

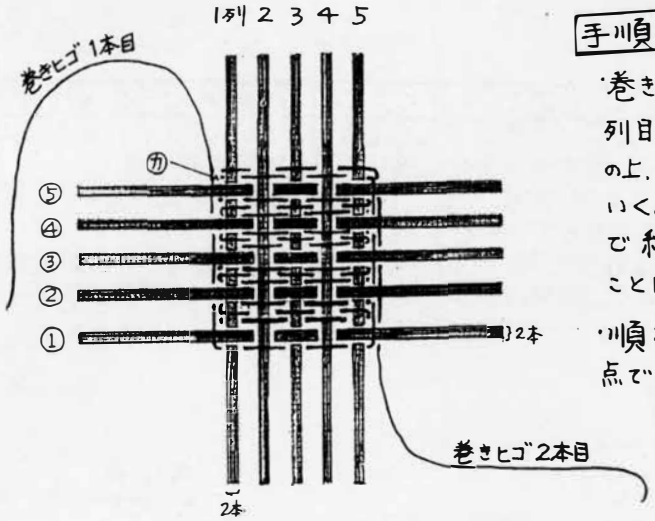
㋕ 巻きヒゴ 1本目を㋕点縦1列目の下に入れ、2列の上、3列の下、4列の上、5列の下と通して行く（表皮が上向き）

㋖点で一度曲ゲグセを付ける。左右両手の親指を支点にし、竹ヒゴの表皮が左右とも上になるようにするとよい。

・順次四辺を同様に巻いて行き㋕点で止める。

・巻く辺と自分の体を対面させるとよい。

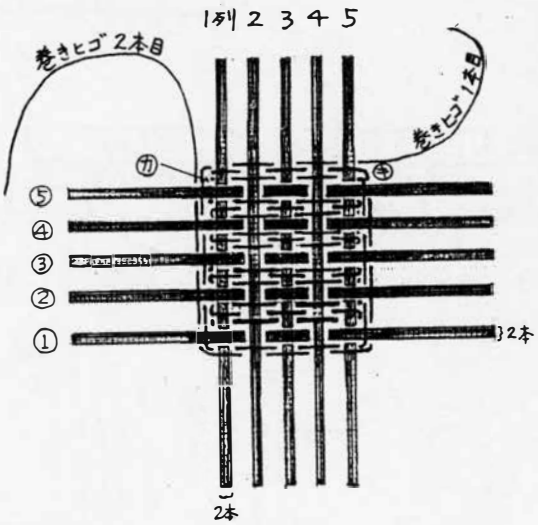
・巻きヒゴは、できるだけ縦ヒゴに密接するようにきつく巻くとよい。



手順4：巻きヒゴ2本目を巻く

・巻きヒゴ2本目を㋕点縦1列目の上に掛け，2列の下，3列の上，4列の下，5列の上と通していく。巻きヒゴ1本目と2本目で縦ヒゴをはさんで行くことになる。

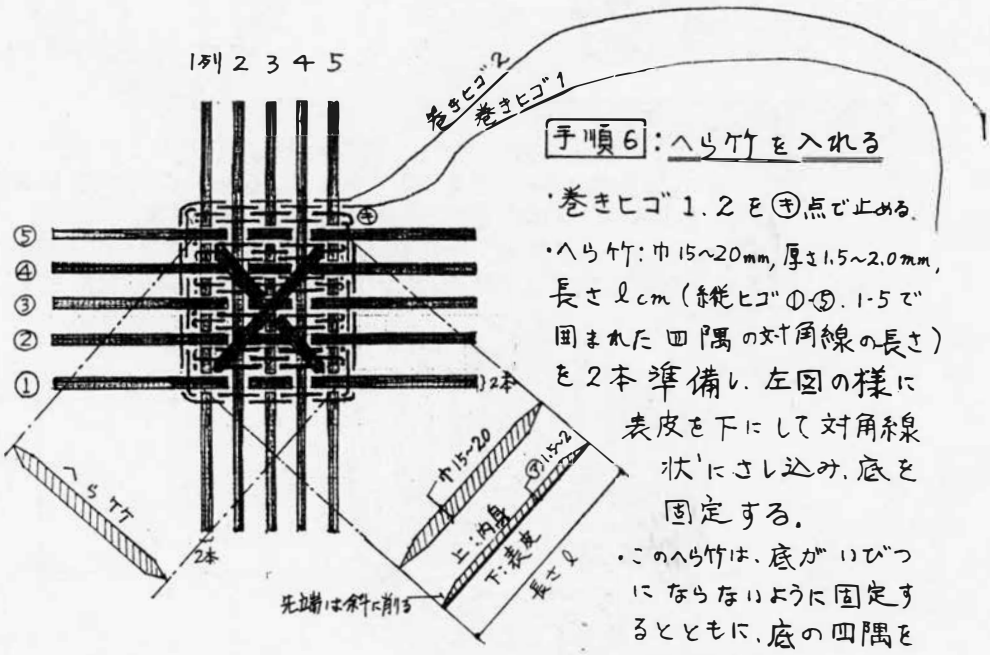
・順次 四辺を巻いて行き㋕点で止める。



手順5：巻きヒゴを残り一辺まで巻く

・巻きヒゴ2が㋕点まで来たら，1本目をあと一辺㋖点まで巻く。

・巻きヒゴ2も同様に㋖点まで巻く。



手順6：へら竹を入れる

・巻きヒゴ1，2を㋖点で止める。

・へら竹：巾15~20㎜，厚さ1.5~2.0㎜，長さℓcm（縦ヒゴ①⑤，1-5で囲まれた四隅の対角線の長さ）を2本準備し，左図の様に表皮を下にして対角線状にさし込み，底を固定する。

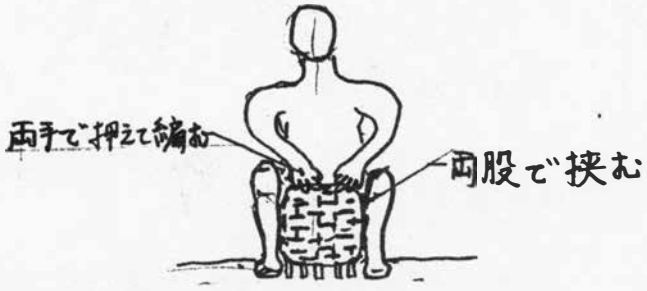
・このへら竹は，底がいびつにならないように固定するとともに，底の四隅を盛り上げる役目を持つ。仕上ったら取り除く。

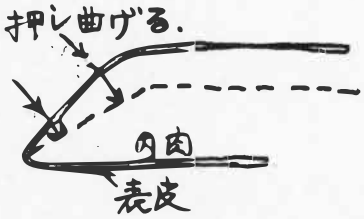
立ち上げ(タチアギ)

：腰立ち→胴編み

手順7：腰立ち(底から5cm位まで立ち上げること)：我慢のしどころ。忍耐忍耐

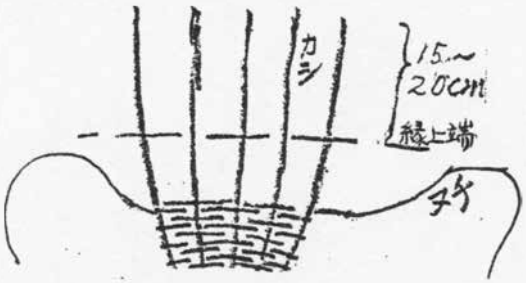
- 底編みが終わったら、表皮が下になるようにひっくり返し、一辺を床に押さえつけて曲げ癖をつける。順次回転させて残り三辺も同様に曲げる。
- 両足を投げ出すように座り、一辺を床、両側の二辺を両足で挟み、編む辺を上にして縦ヒゴを二本の巻きヒゴで挟む要領で編んでいく。
- 四隅の縦ヒゴは外側に開いているので内側に引き寄せ、その都度縦ヒゴ全体が平行に立ち上がるように調整していく。一度では出来ないので巻きながら直していく。

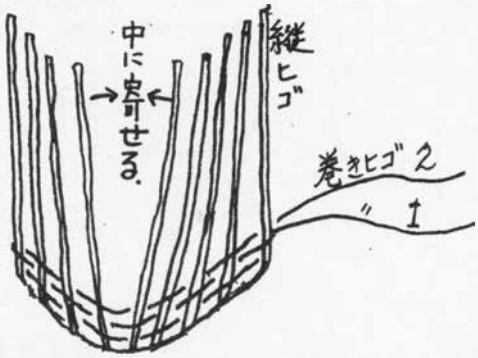




手順8：胴編み(腰立ちから縁までの立ち上げのこと)：楽しい楽しい

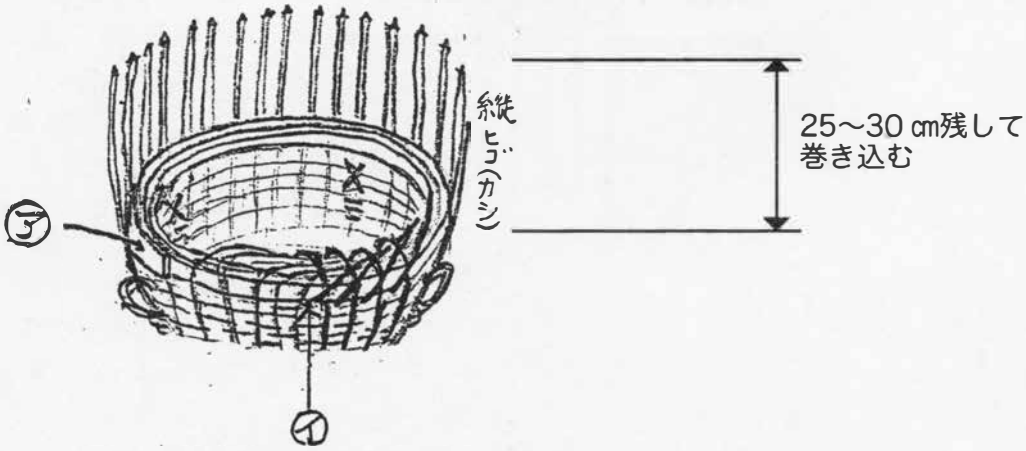
- 巻きヒゴの継ぎ足しの仕方：巻きヒゴが足りなくなってきたら新たな巻きヒゴを上から継ぎ重ねる。重ね長さは縦ヒゴ3～4本位の間隔がよい。内側からも外側からも継ぎ目が見えないように縦ヒゴで隠れる位置で継ぐ。
- 縦ヒゴの先端から上から15～20cm残して止める。二本の巻きヒゴは同じ箇所で止めず、反対側でとめる。





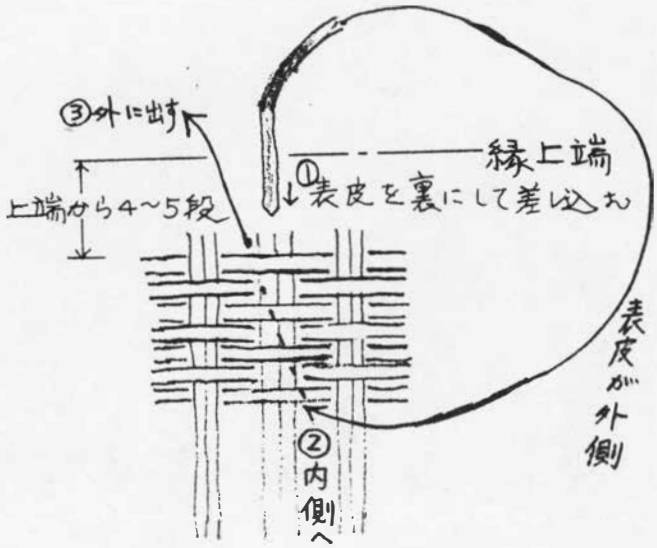
手順9：縁仕上げ(マグイ)

- 縦ヒゴを15～20cm残し、先端を剪定ハサミで山切りにする。
- ㋐ 2cm、厚さ約2mm、長さ：籠円周＋約15cm の竹を二本準備し、内側に入れ10cm位ずらす。両端の重なる部分は少し薄くしておく。
- ㋑ 縦ヒゴを4～5本束ねてその先端を右側の縦ヒゴで ㋐ の輪と一緒に巻き込む。巻き込んだ縦ヒゴは後で抜き、その空いた穴に縦ヒゴの先端を差し込む。
- 図参照



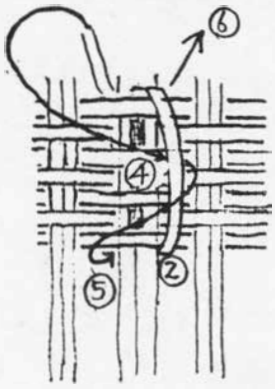
耳付け（ミミチケー）

・幅7～9mm、厚さ約0．2mm、長さ約180cmの竹ヒゴを4本準備する。
・巻きヒゴの上端から4～5段目の所に、表皮を裏にして差し込み編んでいく。
・編み方は図参照

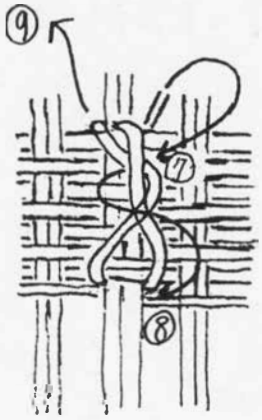


※表皮は常に外側で、途中でねじれて反転してないこと。

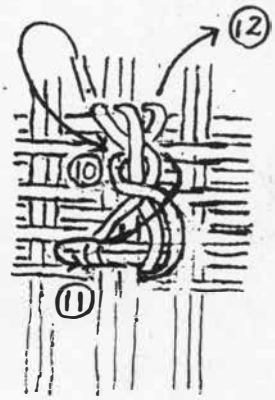
① 表皮を裏にして差し込む。
② 5～7段下へ差し込み、裏を通り①の左横から出す。
③ 外に出す。



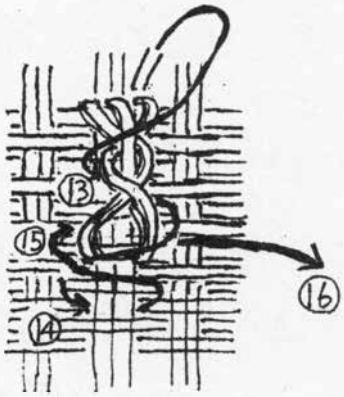
④ 内側から通し、ひねって上を通し、②点の反対側⑤へ
⑤ 内側へ差し込み⑥から外へ裏側で、たすき掛け状になっている。
⑥ 外に出す。



⑦ 内側から通し、ひねって上を通し②点と同じ所へ差し込む
⑧ 中へ通し斜め上へ
⑨ ③と同じ所へ出す。



⑩～⑫：③～⑥と同じ

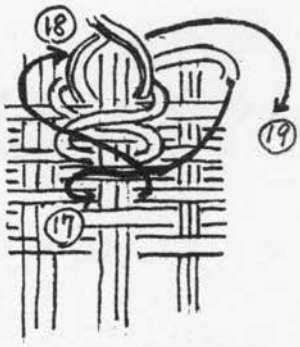


⑬ 上から通し，ひねって下へ通す．

⑭ 巻きヒゴ 3段下を 縦ヒゴの下を通し右側へ出す

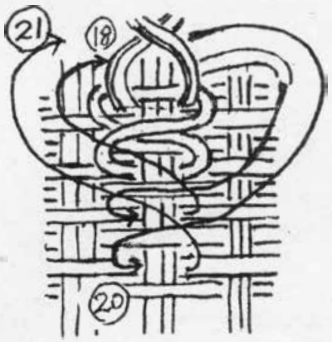
⑮ 少し ひねって 内側へ

⑯ 外へ



⑰ 二段下へ 差し込む

⑱ ⑲ 少し ひねって 内側へ



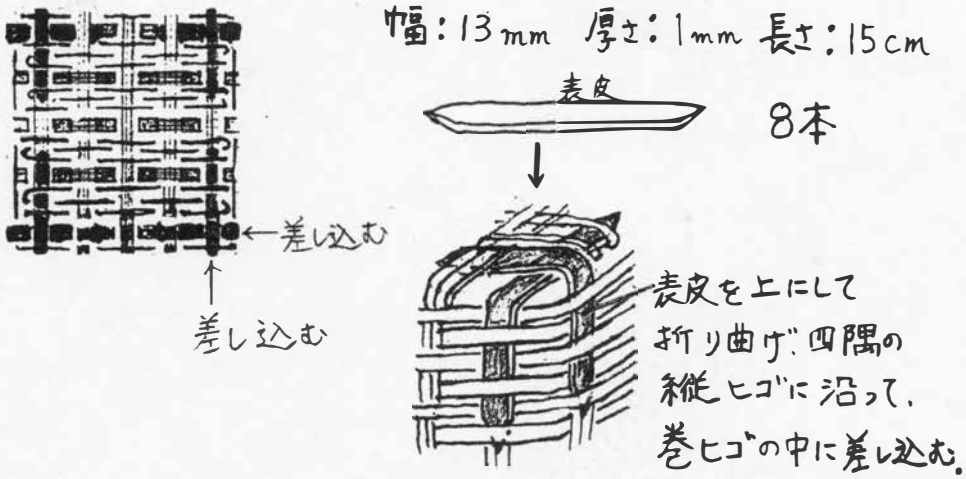
⑳ 二段下へ

㉑ 内側へ

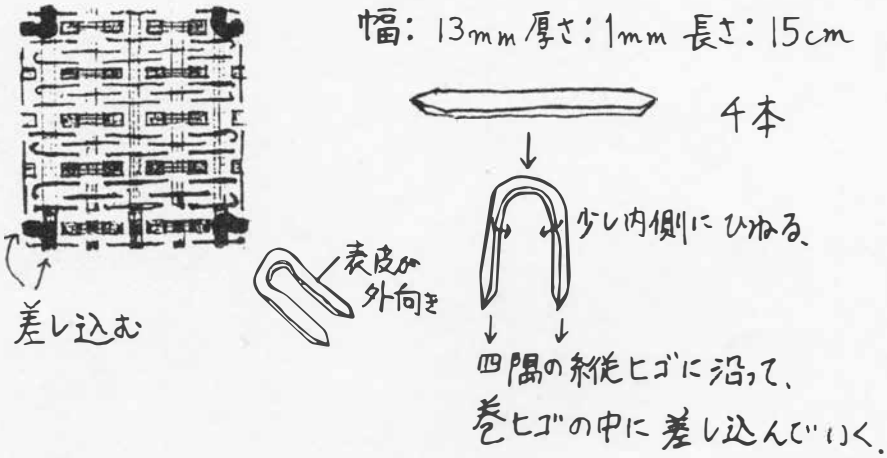
㉒ 二段下へ差し込む.

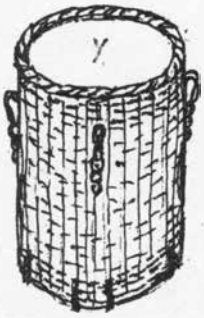
底の補強　その1

・四隅の底を図のように補強する。



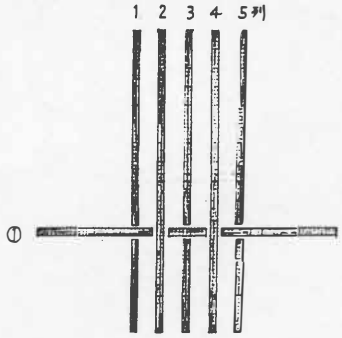
底の補強　その2





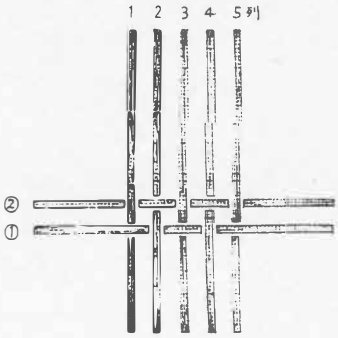
・以上でティールの完成である。
・使用するときに、適当な紐を耳に通して使う。柔道着の帯が最適である。

底の編み方:筏編み変形

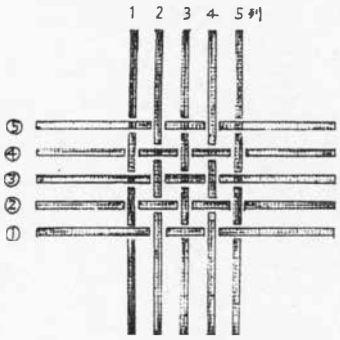


手順 1:縦ヒゴを二本1組で1列とし、両足で押さえながら5列並べる。

・横ヒゴ ① を縦1列目の上、2列目の下、3列目の上、4列目の下、5列目の上の順でを差し込んでいく。



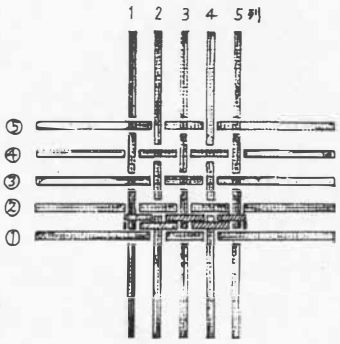
手順 2:横ヒゴ ② を縦1列目の下、2列目の上、3列目の下、4列目の上、5列目の下に差し込む。



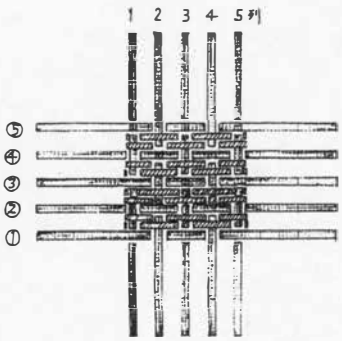
手順 3:横ヒゴ ③ は、横ヒゴ ① と同じ。
横ヒゴ ④ は横ヒゴ ② と同じ。
横ヒゴ ⑤ は横ヒゴ ① と同じ。

・縦ヒゴ横ヒゴの長さ、間隔を調整する。
縦ヒゴ3列と横ヒゴ ③ が中央に来るようにする。

※ここで底編みを終えて、巻きヒゴを入れて巻き始め、後は筏編みと同じよう要領でやっても良い。
この場合、隙間の差しヒゴは、ティールが完成しその後に手順4、5の順で行えばよい。



手順 4:横ヒゴ ① と ② の隙間に隙間埋め用のヒゴ1本目をマイナスのねじ回しでリードして挿入していく。2本目のヒゴで縦ヒゴを挟むように挿入していく。



手順 5:横ヒゴ ④ と ⑤ の間の隙間を埋めると底は終了。

・巻きヒゴはの編み方は、筏編みと同じ。

上地のバーキづくり

沖縄市文化財調査報告書第 36 集

—與志平朝蒲氏製作バーキ調査報告書—

2008(平成 20)年 12 月 19 日発行

発　行　沖縄市教育委員会
編　集　沖縄市立郷土博物館
〒904-0031　沖縄県沖縄市上地 2-19-6
TEL (098) 932-6882
印　刷　コザ印刷所
沖縄県沖縄市東 1-4-18
TEL (098) 937-5015